

---

# 魔法と科学と考古学

こんこん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法と科学と考古学

### 【Nコード】

N16380

### 【作者名】

こんこん

### 【あらすじ】

魔法使いの存在する魔法国家、科学者の存在する科学国家、そしてどちらにも属さない人間の存在する中立国家があった。

それぞれは元々一つの国であったのだが、訳あって三国に分裂した。

魔法国家と科学国家で決められたことがいくつかあつたのだが、そのうちの一つが中立国家で子どもを学ばせ、将来は好きな国家で生きることを選択するというものだった。

そんな中、学園生活を送る九重俊永は進路の岐路に立たされていた。悩む中、教師の水雲イズルは自分の弟子にならないかと誘う。

水雲イズルの専門は考古学で、数少ないアールキオロジストだった。そんな誘いに俊永はあまり乗り気ではなかったのだが、イズルを慕う生徒のシズクやザツハの登場により事態は一変する。

イズルを怨んでいる人間からの数度に渡る報復行為が勃発することや三国から追放された人間「バロ」の強襲でイズルを中心に三人の進む道はより険しくなっていく。

## 1話

季節は春を迎えようとしていた。世の中は卒業シーズンであったり新年度を迎える準備だったりで引越しや何やらで大忙しだった。そんな中で、一人の男が進路を決められず悩んでいる。

一人で講義の終わった広い教室で紙とにらめっこしていた。提出期限は今日の午後四時。腕時計を見ると時刻はもう三時を回っていた。

優柔不断なこの男は今後を左右するかもしれない自分の未来をはつきりと決めることができなかつたのだ。すると後片付けに来た女教師が入ってくると、そんな暗く沈んでいる男を見て驚いた。まさかこんな時間にここに人がいるとは思わなかつたので…しかし気持ちを取り直し声を掛けた。

「ん…ん。あらあら…俊永<sup>しゅんえい</sup>。あなたまだ悩<sup>し</sup>んでる訳？」

まるで霊にでも取り付かれたような有様だといった感じだった。

その教師は水雲<sup>みなぐも</sup>イズルといって二十代後半の悩殺ボディの持ち主で、容姿まで女優級ときていた。どうみてもそんなスキルで教師をするような感じに見えないのだが、年とは関係なく頭脳も明晰なのでこの学校のトップに君臨する人間でもあった。

そしてそんな教師に声を掛けられている男が、九重<sup>ここのえむね</sup>俊永<sup>しゅんえい</sup>で、成績はびりから数えた方の速い奴で、優柔不断と諦めることが第一という適当さを兼ね備えたランクDのどうしようもない存在だった。

「だって…俺みたいな男、社会の役に立つんですかねえ…自分の未来像なんか想像もできませんし、多分二トトかホームレスになってると思うんですよね…ははは…」

そんな否定的な言葉を口にしたので、イズルは拳で俊永の頭を小突いた。

「馬鹿！そうやって逃げようとするんじゃないよ。あんたはいつともいんなことに否定的な考え方でまともに進もうとしない…つたく自分に自信がないからって言い訳ばかりして…うじうじと男らしくない！」

「それはできる人間が言う台詞なんです。大体どれだけの人間がその出来る人間の犠牲になってると思います？所詮…僅かなでできる人間をより幸せにするためにいるんですよ、俺みたいな存在は…」

「暗い男だねえ…いずれは自分もそうなりたいとか、今の自分を変えてみたいとかそういうの…ないのかい…僻み根性丸出しだね」

だらだらとした俊永の態度にため息をつきながら彼の未来を不安に思っていた。

「あの…自分の進路って言うかこれから生きていく国を紙切れ一枚で決めるってどうなんですかね。同じ人間同士なのに…」

そんな自分の理論を話したがイズルは聞いていない無視して自分の都合を優先させる。

「うっさいなあ…早く提出してもらわないとこっちの仕事が増えるんだよ。だからさっさと、鉛筆転がしてでもいいからどちらかの国

でも記入して出してよ！」

いい加減にしろと屁理屈ばかりを並べる俊永を一喝してイズルは急かす。

そもそも俊永が悩んでいたのことは、学校を卒業した後にとどの国で一生を過ごすかということだった。この世界には大きく分けて三つの国が存在した。一つは、魔法国家で、神の存在を認めその力を魔法に変える力を身に付けることを日常としている国である。

二つ目は科学国家で、ここは、全ての理論を科学で解釈し魔法も科学だと分析してそれに見合う力を持つ国である。

最後の三つ目の国家は、中立国家である。名の通りにどちらにも属さない。力も持たないというものである。魔法、科学両国の丁度中央にあり、どちらの国家の子どももこちらの学校に通わされる。そして子どもたちは十七歳になると未来の選択をここでするのである。この国家で生きていくか…大抵は親の意志を受け継ぎ同じ道を進むのだが、そうでない者も中にはいる。親のいない者、反発する者、自ら進む道を独断で決める者。ごく一部かもしれないが、別の選択肢を選ぶ者もいるのだ。

この制度を設けた理由は、公平さを期するためということと、戦争をする気はないということである。国が三つにも分断されていれば、大きな争いも起こりそうなものだが、小競り合い程度で済んでいる。

## 2話

イズルは指先をこつこつと教壇に当ててイラついていた。しかし俊永の持ち前の優柔不断はそんなことでは揺るがない。決めかね再び悩んでいたのだ。流石にイズルはそれに切れた。

「いい加減にしろよ！あんた私の話聞いている？これは永久均衡法律で決められてる義務。決められないはないの。魔法国家か科学国家か中立国家かどれかの選択肢しかない。あんたの理想の自堕落国家なんてものは存在しないの…草食系男子にもほどがあるでしょ。もつと自分の意思を持ちなさい」

「俺は…草食系じゃないですよ。がんばるのが嫌いなだけです」

「開き直るな！」

イズルは容赦なく拳を顔面に叩き込んだ。軟弱な俊英の態度が気に食わなかったのか、それとも現実を見ないその姿勢が嫌だったのかどちらでも良かったが、とりあえず殴りたかった。

「分かったよ…あんたは性根が腐ってるから根本的に叩きなおさないきゃならないってことがねえ…」

これほどまでの怒りを感じたことは久しぶりだった。そしてこいつをどうにかしなくては気が済まないとも思った。だから本来の選択肢にないことを提示した。

「なら…あんたは…私の弟子になりな」

びしつと俊永を指差し言い放つ。一方、俊永は間抜け顔を見せるだけだった。

「はぁ？」

「国選人師弟制度は聞いたことくらいあるだろ？」

「ま…ま…国で選ばれた有数の人間が弟子を持つ制度ですよね。でも…先生はここ中立国の教師ですよ。どちらかの国の国選人なんでしょうか？」

「私は考古学専門の教師だよ」

にやにやと笑みを浮かべながら俊永のほうを眺める。一方でそれを聞いた俊永は目を見開いて驚いた。

「え？あの…両国で行われる厳密な審議でたった二人しか選ばれないアールキオロジストなんですか？」

「その通り。アールキオロジストは一定の場所に捕らわれないで動けるから、弟子もなかなか取れないんだ…しかし…お前はどうか。経歴を見れば、親もいないし特に固執している国もないようだ…それなら私と共に三国を歩き来する旅をすればいい。その間にその軟弱な性格を直してやるがな…」

唐突にリアルな自分の将来のを話され、俊永は頭の中が混乱してしまった。自分はそのような人間ではないのに、スケールの大きな話になっていたので思い切り断った。

「いやいや…いいですって。そんな大きな仕事俺には無理ですから。」



他の奴を弟子にしてください。俺よりもっと頭の良い奴もいますし…似たような境遇の奴もいますから」

逃げ腰でそんなことを口にしたが、イズルはあからさまに不機嫌な態度を取った。

「あのさあ…今の時期に進路決めてないのあんただけだから、あんなたしかいないんだけど？」

「え？あ…やっぱりそうなんですか…でも無理なものは無理なんで…」

引き下がることなく初志貫徹を貫き、面倒な用件を断った。その変わらぬ態度にイズルは呆れるどころか逆に感服してしまった。

「まったく…それなら中立国家でいいね。緩いあんたが生きていくにはここが最適だから。ああ…でもね。回ってくる仕事は両国家の下請けしかないからそのつもりでね」

そう話しながら俊永の進路用紙を奪い取ると、一瞬で燃やしてしまった。それが魔法だということも俊永は分かったがあえて触れることはしなかった。

それから俊永は鞆を持つと学校から出ようとした。

卒業を控えたこの時期にいつまでも学校に残っている人間などほとんどいない。だから静かな校内、玄関を歩きながら物思いにふけた。

両親は幼少期に失い、ずっと施設にいたのだが将来のことなど全

く考えなかった。魔法国家、科学国家…そんなのはどうでもよかった。自分が何がしたいかが重要だった。

魔法も科学も興味はない。それよりも草花や生き物を育てることががしたかった。自然と触れ合うことで気分も安らぎ、落ち着いた。一人でよく山に出かけて一日を過ごすこともあったし、野宿をすることもあった。

人は…面倒でわずらわしいが、人以外の生き物は気を使うこともなければ、話もしない。

そんな自分なりの理屈のせいで変わり者としての烙印をはっきりと押されてしまったのだ。

自分は争うのが嫌いだし、のんびり暮らせればそれでいい…そう思いながら廊下を歩いていると、一人の女性に出くわす。

その女性はこの学校の生徒だった。制服を着ていたが、サイズが小さいように思わせるほど足が長く、胸も大きかった。髪は赤く目の色はブルーだった。いろんな人種が存在する国だけに珍しいものではないが、両腕を組んで堂々と俊永の前に立ちはだかっていた。

「…」

無視して進もうとしたが、俊永の進む進路をあえて阻んできた。

### 3話

「あの…どいてくれる？」

普段女性と話なれていないので、そこまで強気にはなれなかった。だからやさしくそんな言葉を掛けてみたが、女性は動く気配はなかった。それよりもどこか怒っている様子で睨んでいた。俊永には女性に怒まれるようなことをしていなかっただけに訳が分からなかった。

「あんた…イズル先生と何を話してたの？」

女性はまるで恋敵にでも話すような初めから相手を受け入れられないといった口調で話しかけた。それには俊永も困りながら答えた。

「え？つと…進路相談みたいなものかなあ…でも一方的な感じだったから、相談じゃないかも…」

「あんたまさか…弟子にでも推薦されたんじゃないでしょうね。家柄もないし、成績でもビリのほうで取り柄もないくせに…」

まるで虫けらでも見るかのように俊永のことをけなししていた。しかし俊英は腹を立てることもしないで、事実だと受け止めていた。至って冷静に対応するので互いの温度差が生じてしまう。

「弟子？ああ…そんな話もあったけど、断ったよ。だって…そんな柄じゃないでしょ。どう見てもねえ…それにいろいろ面倒だし、普通が一番かなあ…」

へらへらと笑いながらそんなことを話していると、女は急変し俊永に向かって鋭い蹴りを放つ。

「ええ！」

どうにかそれをかわすが、当たれば骨が砕けそうな勢いだった。

「ちょっ…落ち着いて…何がなんだか分からないんですけど…」

「問答無用！私の邪魔する輩は真つ向から殺してあげる！」

「はあ？」

俊永の話など聞いてくれる様子もなく、突っかかってくる。一方的な暴力にただただ戸惑うばかりで、喧嘩などしたことのない俊永が攻撃の餌食になるのにそう時間は掛からなかった。

両拳の上の攻撃ばかり意識しすぎて、下の攻撃まで気が間わらなかつたのだらう。左右に振られて上に気を取られたばかりに、しなるような蹴りが腹部に突き刺さった。

「うっう…酷すぎる…」

俊永は声にならない声を上げ、そのまま悶絶しながらゆっくりと崩れ落ちたが、未だに自分が襲われた理由が分からなかった。

「はっはあー見たか。あんたみたいな害虫が私の野望を邪魔するからこんな目にあつたよ。天罰よ！天誅よ！」

俊永はそんな言葉を聞いて、明らかにお前の手で行われているか

ら、天罰も天誅も違うだろうと思わず突っ込みをいれてしまった。

「大体、何で成績トップで魔法国家でも有数の名家の私が選ばれないのよ！そもそもそれがおかしいのよ。水雲イズル師の弟子に相応しいのは私みたいな完璧な人間はずなのに！完璧な人間の元には完璧な人間が集う…それが自然の摂理…」

酔った状態で話している女に俊永は腹を押さえながらせめてもの抵抗を見せた。

「いやいや…あんたの脳みそが不完全だろ…」

流石にその言葉には女は逆上した。何故こんなミジンコ脳みその持ち主に自分が否定されなければならぬのか道理が見当たらないからだ。まるで愚民は愚民なりに大人しくしてるとも言いたげな態度を取った。

「あんたが賢いのも家柄がすごいのも分かりましたよ…けどさ…結局お前選ばれてないじゃん。だったら大人しく諦めたら？」

さらっとそんなことを口にしたが、女は益々感情が高ぶり声のトーンも大きくなった。

「馬鹿じゃないの？そんなの分かってるのよ！く・や・し・い・かに決まってるじゃない！私のやり場のない怒りの矛先をあなたに向けてるだけなんだから！」

何て理不尽な…わがままな女の玩具にされている自分の存在をちっぽけなものだと思いため息が出た。そしてその後すぐに二度目の激痛が顔面を襲った。唐突に無防備な状態で殴られたのだ。

「おう！」

俊永はそのまま鼻血を出して卒倒して、自分は悪くないのに何故こんな仕打ちを受けるのだろうか？と運命さえも呪ってしまった。

しかしそのことに対し、いい加減にしろとばかりに今まで大人しくしていた草食系男子の俊永も身を乗り出し怒った。

「お前ふざけんなよ！俺だって殴られてばかりじゃないんだよ！」

その言葉の勢いのままに初めて攻撃らしい攻撃を繰り出そうと、右拳を固めて襲い掛かってみたが、あっけなくクロスカウンターを食らい再度鼻血を出しながら卒倒した。

「はん！情けない…男のくせに…こんな弱くて頭の悪い奴が今まで同級生だったと思うだけで恥ずかしいわね」

慰めの言葉など一切ない。容赦ない毒舌を吐き捨てる。女は最後まで名乗ることもしないで不機嫌のままに去っていった。そして俊永は死んだ蛙のように大の字になって誰に発見されることもなくしばらくのびていた。

## 4話

そんな屍のように転がっている俊永を最初に発見したのは、仕事を終えて帰るところのイズルだった。

「お前…何してるの？」

新しい遊びか何かと勘違いしていたのか、気にも留めずにそんなことを話しかけた。するとその一言で俊永は目覚めた。

「え？…ん？ああ…このやろっ！」

殴られたところから記憶が飛んでいたのも、真っ先に浮かんだのは女を懲らしめてやる真っ最中だった。だから腕を振り回しイズルに向かって拳を向けていた。そんな届かない拳を目の当たりにイズルは冷めた顔をしながらため息をついた。

「え？あ？…あれ？…ああ…やっぱり…」

拳を止めた状態で自分が返り討ちにあって気を失ったのだと知り、一人で勝手に納得してしまった。冷静になったことで恥ずかしさも増し、顔を赤らめながら突き出した拳をそっと下ろした。

「お前もやられたか…」

「はい？どついう意味です？」

「シズクだよ…あいつは優秀なんだが…嫉妬心と執着心が人一倍強いから…お前以外にも悲惨な末路を迎えた輩は両手じゃ数え切れな

い…」

俊永はすつくと立ち上がり乱れた自分の身だしなみを整えた。

「ああ…先生も知ってたんですか？」

「あいつの武勇伝というか猪突猛進に近い無謀な行動は有名だからなあ…こっちとしても勝手なファンはありがた迷惑な訳で軽く追い払っているんだが…しつこいから困る…」

イズルもさじを投げてしまうほどの相手を俊永が撃退できるはずもない。だからせめてもの抵抗にと愚痴をこぼした。

「そんな弱気なこと言っていないで何とかしてください…あいつがこのまま野放しになってたら無意味な被害者が続出ですよ。それも…先生の軽はずみな言動一つでいるんな人間がとばかりを食らうんですから」

痛いところをつかれたという表情を見せたが、俊永の話はまだ続く。

「だったら…あいつとくつつくなりばっさり振るなりしてくださいよ。いくら名高い先生でも一人の女生徒が同姓同士の色恋沙汰で学校の風紀を乱しまくったらそれこそ責任問題になりますよ？」

脅しにも似たことを俊永は話すが、イズルがそれに動じることなどなかった。やっぱりかぁーといった様子でこれからどうしようかなど大した問題を扱うわけでもない素振りを見せていた。

「はいはい…お前に言われなくても分かっているって…私の方でもと



りあえず釘を刺しておくからさ。あいつも若さゆえの一時の迷い  
しか過ぎない…だから多めに見てくれよ…」

「そんなものですか？あいつしつこそうだし…」

「お前らぐらいの年頃はな…未熟さゆえに不器用でも一歩進んだ大  
人に憧れるんだよ。それが期待に応えるほどの力がないのに勝手な  
妄想やら幻想を抱いて自分の中でどんどん膨らませている…だから  
もう少し大人になれば現実を見るものだ」

なるほどなと俊永は納得しながらイズルの話を黙って聞いていた。  
しかしだからといってイズルが具体的な策を練ってくれるかという  
こと別だった。きつとほつたらかきに違いない。この人の性格なら  
そうだ…とも思っていた。

「そうそう…お前の書類は受理されたそうだから、来月からは移住  
区が変わる…だから引越しの準備を進めておけよ」

「あの…先生？」

「何だ？まだなんかあるのか？」

「弟子の候補者は他にいないんですか？その…話ついでじゃないん  
ですけどシズクじゃ駄目なんですか？成績もトップみたいだし、お  
家柄も名家らしいですよ」

「あいつはな、優秀だが…偏ってるんだよ。性格も力も…両国を行  
き来する私のような人間に必要なのはバランス…魔法の力が強くて  
も科学の知識の力に頼りすぎて駄目なんだよ。両国の力を均等に  
…しかも冷静に扱うことができる人間でなければ勤まらない。だか

ら…家柄が良すぎる人間はその国に感じがらめだから真っ先に対象外だ…」

「なら…中立国希望者から選ぶってことなんですね」

「うーん。まあ…そうなるな。しかし中立国は両国の訳ありの人間が集まるからこれはこれで選抜するのが大変なんだよ。だからお前みたいにシンプルに分かりやすい人間が一番いいんだ」

「嫌ですからね…絶対に」

「ほんと…頑固な上にやる気ないねえ…お前…」

そのまま俊永は挨拶を済ませると、学校を後にした。

## 5話

俊永は帰り道ワンコインで買えるハンバーガーを食べながら歩いていた。安いだけあって全体的に薄かったが、腹の中に入ってしまった。ええ同じだと気にもしていなかった。

石畳の広がる街道を歩いていると、視界にシズクが入った。彼女は俊永を待っていたように、何をしてもなく歩道の策に座って足をぶらぶらさせていた。

「ねえ！」

目が合うなり俊永に声を掛けた。先ほどの忌まわしい記憶が蘇ってきただけに俊永は一步身を引いてしまった。

「な…なんだ…」

立ち止まり思わずファインディングポーズをとって構えていた。それを見るなりシズクはやれやれとため息をついた。

「さっきみたいに襲い掛かったりしないから力抜いてくれる？」

「え？いや…お前のことだから…そんなこといって油断させて殴ろうって魂胆じゃないのか？」

「馬鹿じゃないの？そんな姑息な手を使わなくてもあんたなんかすぐ倒せるわよ」

「むううう…」

その通りだとも思い、体の力を抜いた。すると話す態度がよつや  
くできたとシズクは話し始めた。

「イズル師の話なんだけど…あんた何で弟子に誘われたの？それだ  
けははつきりと聞きたくてね」

そのことが気になっていたらしいが、聞く前に手が出ていたので  
聞けなかったのだ。俊永は都合の良い話だと腹も立てていたので  
いからかってしまう。

「その前に何か言うことはないんですかねえ！」

真つ赤になつた鼻を指差して聞いた。このプライドの高い女に一  
度でいいから謝ってほしかった。しかしそんな淡い望みもすぐに粉  
々に打ち砕かれる。

「え？なんのこと？そんな汚い鼻に見覚えはないわ」

そんなたつた一言で全てを俊永の存在もろとも一蹴してしまった。

「おいおい…すごいよ…お前…」

俊永はその時こいつに何を話しても無駄だということがよく分か  
った。これ以上自分の話をして同じように軽くあしらわれてしま  
うに違いないと諦めた。

「分かったよ。教えるよ。そんな隠すような大したことじゃないか  
ら…」

「へー…素直ね。最初からそうしなさいよ…それで?どうしてあんたが誘われたの?」

迫るように向かってくるシズクとの距離が近く、免疫のない俊永は顔を赤らめた。

「その…俺は、両親もいなく両国に縛られていない身軽な存在だからいいんだと…アールキオロジストはどちらの国にも平等じゃないと駄目らしいんだ」

「え?ちょっと…それだけ?あんたが魔法なり科学の素質があるとかそういう理由はないの?ただの生まれの問題ってこと?」

「ああ…そうだよ。俺には権威のあるお父さんも秘密の魔法が使えるお母さんも存在しないって。両国に身寄りのない俺はこの先もどうするか分からずぶらぶらしてる現状だからなあ…」

自分で話していて悲しくもなったが、俊永は別に恥じることもなかった。

「それで、お前はお家柄が相当いいんだろ?魔法国家の名家の生まれってことはどうしたって魔法国家に進路は決まってるだろ?」

「それはそうなんだけど…私…イズル師にあこがれてずっと頑張ってたからさ。成績もトップをキープしたのだからって自分の技に磨きかけたのだから…それなのに家柄の理由だけで弟子を断られるのって何か…納得できないっていうか…」

「でも、イズル先生がはっきりとそう話していたのは間違いないか

ら、きつとこれからもそのつもりだと思っ…」

ころころと意見を変えるようなタイプではないので素直にそう思っていた。

「そう…」

慰めにもならない言葉を掛けると、シズクは肩を落としてそのまま帰っていった。

## 6話

俊永たちの通う学校は両国から集められただけあって、科学に長けている者もいれば魔法に長けているものもいた。しかし学校ではそれを使うことを禁じていた。あくまでも学生の間は力を伸ばすのではなく精神面と教養を鍛えることが目的だった。

もしもその禁を犯すようなことがあれば中立国の査問会に通され強制退学、最悪ブラックリストに載せられ両国家での後々の行動にも制限が加えられてしまうということもあった。だから学生は不必要に力を誇示したり、利用することはできなかった。

そして学校は一つだけではなかった。中立国家の中心に円を描くように十数校が点在していた。中立国にいる人間が教壇に立ち政治、経済、法律、歴史、数学、一般教養を中心に指導をしていた。このように両国に平等な勉強だけを選び人間形成を目的として生活を提供していた。

何故このようなややこしい制度が設けられたのかは、この世界の歴史にあった。

かつてこの大陸には魔法が絶対的な存在として確立していた。力のない人間が神を崇めその力を代用し生活に利用し進化を遂げていた。その力は摩訶不思議なもので自らの体を依り代とし五大元素（地、水、火、風、空）を扱うものだった。発動条件は様々だったが人間は不確かなものを次第に確かなものへと解明させていった。そこで生まれたのが科学だった。

根本的に魔法という概念に疑問を持つ者が現れたのだ。そもそも

神は存在するのだろうか？先人は不確かな物を神として誤魔化していたのではないだろうか？そんな議論も幾度となく繰り返される。進化と共に人の観点は変化し神に対する絶対信者ではなくなってしまう。

知識が増える分だけ人の信仰意識は薄れてもいた。だから不確かな物から確かな物への移動も生まれていたのだ。そして魔法は絶対的なものなのか？そんな疑念を揺るがす大きなきっかけとなった発見が起こる。

それはアルケーエナジーの発見だった。万物の根源の力とも呼ばれるもので地中深くに存在する鉱物の中に粒子で含まれていたのだが、幾度となく行われた地質の変動で地上まで飛び出してしまった。アルケーエナジーを含んだ鉱物は七色に光り輝くから目立つことこの上ない。だから発見されるのも地表に現れてすぐの出来事だった。

それを調べれば調べるほど様々な分野が知識が広範囲で広がったのだが、その結論としてこの素材が魔法の代わりになるということが分かったのだ。五大元素とは違う四大元素（土、水、火、空気）であったが、それらを物理的な力に代える術を次第に知ることになる。

魔法という絶対的なものが、もしもアルケーエナジーを使い行われているのだとしたら？そんな疑問を抱くものも少なくはない。だから国内で混乱、分裂、そして決別が幾度となく繰り返され別の国家を作ろうという意見も大いに出たのだ。

それから数百年の間に内部分裂を起こして魔法国家と並ぶ巨大大国を作り上げたのだが、その時にはつきりと領土を分断しそれ以上もそれ以下もないという契約を交わした。だから魔法国家に圧力を



掛けられたり、虐げられたり、阻害を受けることはないので大きな戦争もなかった。その理由の一つに互いの生活を守ることとで精一杯の部分があったので、侵略などで国家の規模の拡大を図らなかった。

科学国家は出来上がって数十年でその進化を確実に遂げていた。

階段を上がるかのように研究の成果をはつきりと出し、アルケーエナジーの活用方法を見つけていた。それと同時に機械工学の研究も進められ、街もどんどん様変わりしていた。

木造から鉄筋コンクリートになった建造物。地面にはアスファルト、そんな地面を走っているのは馬車ではなく自動車である。ビルが木々のように生え、その高さも相当のものだった。まるで今まで築き上げたものを象徴するかのようにでもある。そんな文化なり技術の発展によって今日の科学国家があるのであるが、それとは対照的に魔法国家は生活のスタイルを変えなかった。

地面は土のまま、電気などないので明りはランプか蠟燭で、移動には馬車か馬である。魔法を使うことは自然との調和が大事な要因なので生活の変化を望まなかったのだ。手作業で行われることがほとんどで、炊事、洗濯、掃除を始めあらゆる物を精製することも手間ひまかけていた。

時の止まった場所と止まる勢いを知らないで進んでいる場所。そんな二つの国は互いの変化を知らなかった。だからこそ相容れぬ存在であり干渉もしなければ、興味も示すことなく数百年を過ごした。

## 7話

そんな中で一つの変化が生まれたとしたら中立国家が出来たことだろう。

科学国家は一定の到達点まで達していた。人口の増大、食料の完全自給、大量生産できるようになりそれに伴う機械の活躍などなど、そこまで文化が発展すると次に起こす行動は、他国との交流である。それをする事で自国の良い点、悪い点を知ることができるのだ。それに元々は同じ生活をしていた人間なのだから気にならないはずがない。

魔法国家と科学国家の間には数百キロの空間が存在していた。そこを境界線として魔法国家が分断されたのだが、互いの場所を行き来できないようにあえてそこには何も作らなかつたのだ。無限に広がる草原が地面一体を緑に染め手入れされていないので無造作に草木は伸びていた。

互いの国へのアプローチを試みたのは科学子国家の方からなので、まずは魔法国家に数人で使者として出向いた。

初めて魔法国家に足を踏み入れた使者はまずその街並みの景観を見て驚いた。地面は土で、車など走っていない。家の作りも木造で細部まで手作りだというのが分かつた。歩く人の服装もただ布を切つて縫つたようなものだった。目に入るもの全てが驚きの対象となり、使者は足を止めてしばらくの間、啞然としていた。同じ大陸にありながらもこうまでに文化の違いがあるものなのかと…自分たちの生活と重ねてしまつただけにその衝撃は大きかつた。

普段見られない光景に目を奪われていたのだが、すぐに我に返り当初の目的を思い出すと、早速国の統治者の人間を探し出しそちらへ赴いた。しかしここ魔法国家において統治する人間は存在しなかった。なぜなら、魔法は万人のためにあるものだという概念があったからだ。一部の人間が隠していたりそれを利用して政治をする。そんなことは一切なく学べる人間は誰でも自由に学びいんな力を共有していた。師弟関係はあるが、主従関係ではない。国家の人間は皆平等に扱われ、共通の神を崇拜していた。

だから使者は困っていた。誰と交渉したら良いのか分からない。そんな中で右往左往していると側にいた人が声を掛けてくれた。いろんな人間の相談役であり、賢者とも崇められる人間がいるのでその人を訪ねたらいいのではないかと親切に教えてくれた。

使者たちは一筋の光が見え胸を撫で下ろしながら話に聞く賢者の下へと出向いた。

森の奥の洞窟の前に焚き火を前に食事をしている人物が見える。八十代の髭も髪も白髪で無造作に伸びているしわしわの老人だった。着ている服さえどうでもよいといった様子であちこち破れていて汚れていた。

使者はそれから長老にも似たその老人に話しかけた。簡単な挨拶から始まり、自分たちの自己紹介、それから自身の国の説明、それからワンクッションおいてから目的である本題に入った。

「この国は我々にとっても非常に興味深いです。数百年前に分断された子孫の私たちが話すのは変な感じですが、過去のことは別として交流を深めてはいかれないでしょうか？」  
すると老人は一笑し、ここにそんなものは必要ないと話すだけだった。

「我々は…あなたたちがここを離れ、独自の国を作ったのだから別に咎めてなどいないよ…しかしあなたたちの文化をこちらに持ち込むのだけは勘弁してほしいねえ…」

「何も私たちは自分たちの文化を押し付ける訳じゃないんです」

このままでは何も得ずに帰られないと思ったのか、使者は大人しく引き下がらないで、何度も交渉した。侵略をしようなど考えていない。こちらの文化を知りたい。魔法とはどのように行われるのか？相手の興味を引くことを幾度となくひねり出し話しまくった。

老人にとってそれらの話は不必要なものでしかなかった。自分たちの生活が変わる必要もなければ、この先も変わらないと信じていたのだから。

しかしこのまま何もしないで帰すのは可哀想だとも気持ちを汲んでくれたようで、最大の譲歩としてこの国の人間の意見を聞いてみようとした。すると使者の顔はほころび笑みに変わった。

「ありがとうございます。手ぶらでは帰れなかったんで…何か行動を起こしていただければこちらとしても助かるんで…それでは、また数日後に伺います」

礼儀正しく挨拶を済ませると、片道七時間の道に戻って行った。

## 8話

その日が正に魔法国家にとって大きな節目ともなった。科学国家の訪問者をきつかけに意見が様々出ることによってある程度の政治が必要なのではないかと思いはじめたのだ。それが人間の進化というものでもあるが、着実に国家として成り立ってはいったのだ。

法を定め、それなりの統治者を民衆で決めた。それでも科学国家には及びもつかないほどずさんな作りであったが、それぐらいが丁度よかつたのだ。魔法を扱うものにとって細かすぎる法律や政治は窮屈以外ない。だから統治者を選ぶ際にも単純にあちこちに点在する偉大な魔法使い数人に頼んだ。頼まれた魔法使いは嫌な顔をすることはなかつた。たくさんの人のためならばと人目につかないような奥地から出てきてくれたのだ。

しかしだからといって彼らは具体的に何をやる訳でもない。いつも通り民衆の困っていることに目を向けたり自身の魔法を伝えることに力を注いでいた。あくまでいつものように自然にしているつもりだが、月日が経つにつれてそれは変わってくる。

力在るものは人に崇められ尊敬される。それが道を指し示してくれば群衆は素直に信じる。だからあちこちから人が集まるのだ。以前ならひっそりとくらし、数人しか交わらない大魔法使いだったのだが、表立ってしまったことで噂が噂を呼び人が勝手に集まり、崇拜してしまう始末である。

そうなることで人間は自分の意思で動かなくなるものが多くなってしまう。他人に意見を任せることで楽な方に流れてしまう。自らの生活は自ら切り開くことが前提だった魔法国家に生まれた小さ

なひずみであったが、それは徐々に様々な方向に影響を与えた。

崇拜された魔法使いが関与しなくても経済が成り立ち、資本主義のような体制へと変貌する。今まで自給自足だったり物々交換だったものが、金銭でのやりとりをするようになり法律も形として成り立ったのだ。そうなることで今まで国家として名乗っていなかったものを魔法国家と改めて名乗るようになった。科学国家に及ぶことのない進歩ではあったのだが、そのせいで科学国家との付き合い方も変わっていった。

魔法国家、科学国家の中間に位置する場所に中立国家が生まれたのは今から百年前である。両国家の交流の場として、直接国家に入り込まないように、世界の秩序を保つためにいろんな話し合いをして作ったのだ。そしてそれを作る際に共通の取り決めを行った。

- 一、 侵略行為を行わない。
- 二、 通貨は三国それぞれでしか使えないものにする。
- 三、 直接の国の行き来は例外の人物を除いて禁止する。
- 四、 子どもは必ず中立国家の学校に通わせる。
- 五、 共通の目的が生まれたら協力をする。

このたった五箇条なのだが、互いにそこまで踏み込んだ感じはしなく距離を置いている。そこには互いの文化を受け入れたくないという意思表示が隠れていたのかもしれない。結局自分の国の文化が一番だと思っているので上辺だけの外交といった様子である。

だから最初は両国家に住む人間もそこまで相手の国家の文化に感心はなく、そつちで暮らしたいと話すものはほとんどいなかった。

中立国家で生きる国を決めるといふ制度が生まれたのも中立国家建国から始まり、決めた進路は変えることができず一生そこで暮らさなくてはならない。そして大体が親と同じ国を選択するのだが、現代になって境遇も変わり考え方も少しずつ違ってきた。

あえて違う道を選ぶ者、親が最初からいない者、親の勧めで出される者：昔とは違い自国に誇りを持って生きる者の数は減っていた。その理由のひとつに中立国家で互いの文化を学び、憧れてしまう部分が多いことである。魔法国家の人間にとって科学国家の文化は新しく珍しいものである。一方で、科学国家の者にとって魔法とは原理も詳しく解明されず摩訶不思議なもので、身一つで人外の力を自由自在に扱えることが魅力的でもある。

そんな考えがあるから今までなかったような他国で一生を過ごす者の人口が倍増していった。

## 9話

「…つとまあ。ここまでは習ったことだが、何か質問はあるか？」

黒板にチヨークで大きく三国の歴史と題字が書かれ、様々な方向に向かれた矢印とたくさんの方が並んでいた。そんな話の説明をしていたのは、誰もが知っている名物教師のイズルである。

体の曲線美を強調したような挑発的な服装を身につけ、学生に三国の生まれるまでの話を聞かせた。生徒たちは授業よりもそんなイズルの体の方に目がいつてしまっている。

「さて…ここからが本題。私は考古学の見地から考えることがある…」

黒板の字を全て消すと、だんだんとおおきな音を立てて一気に書いた。

「魔法の登場する前の話についてだ…」

題字は『古代文明の存在について』と書かれていた。そこで雄弁にイズルは教科書にはない自分の理論を話した。

「今から数百年以上前のことは未だに解明されていない…この大陸が魔法で埋め尽くされつよりも前には何が存在したのだろうか？そこに興味はないか？…最近の考古学では今よりももっと進んだ文明があったとも言われている。そうだな…魔法と科学の融合した世界とでも言おうか」

イズルはそのまま自身の研究の話をする。年に数十回と行われる



発掘作業で、遺跡を幾つか見つけることができたが、現代には再現できない魔法やら科学が飛び出してきたのだ。

そこで様々な議論が飛び交った。魔法でも科学でもない文明があったのではないか？古代人は人間ではなかったのではないか？などなど憶測であつたがそんなことを話し合っていた。そして発掘したどの物も数千年以上経っているだけあつて使用は不可能。当時の様子を描いた物も断片的にしか解明できなかった。

イズルは魔法と科学の融合体があつたと主張した。その片方だけが残り魔法が世界に浸透していたのではないかと？その後生まれ科学も人々の遺伝の中に名残が残っていたから再度生まれただのでは？と自分なりの理論を出す。

「まだ考古学の分野は生まれただけで調べ切れていないことも多い…しかしいずれは古代のことも解明される日は近いとも私は思う…」

授業の最後にそんなことを口にしてイズル劇場の幕を閉じた。聞いていた生徒の中に俊永もいたが、特に心に響くといった様子はない。ぼーっとして上りの空だった。

新学期を迎えて数日が経とうとしていたのだが、俊永に未だにやる気はない。その日をどう過ごすかで頭がいつぱいだった。

学生寮に帰り荷物を置いて一息つく。

中立国家に入る学生は皆、学生寮に入るのだが、一人ずつの個室、空調完全完備、学食もあり、図書室、大浴場もあるという贅沢な作りになっていた。流石に科学国家のようなテレビの存在はないのだ。

が、学生にとって不満のない状況であった。だから俊永のような二  
ト予備軍が出てしまう。一生学生だったらいいのに…そんなこと  
を考えてしまう。

俊永は部屋着に着替えるとそのまま学食に向かい夕食を取ろうと  
考えた。

広々とした学食には丸いテーブルが無数に並び、清潔感を漂わせ  
る白をふんだんに使っていた。学生もまばらに姿を見せて仲の良い  
それぞれのグループで談笑しながらトレイを手取る。一方俊永に  
は仲の良い人間はいないので一人でトレイを持ち、順番を待ってい  
た。目の前には三種類のサラダ、二種類のスープ、メインの魚、肉、  
主食の米かパンが並び学生たちの食欲を煽った。

食べ盛りの若者ばかりなので、どれも全てが皿いっぱいの大盛り  
であるが、俊永はフランス料理のフルコースのように皿の中央にち  
よこんと一品一品を少量に盛り付けるだけだった。

誰もいないテーブルを探し、そばに人がいないことを確認すると  
そこに座った。周りは笑い声があちこちで響き楽しい食事のひと時  
と言った様子であった。しかしそれを自分には関係ないことのように  
黙々と小さく切った鶏肉を口に運んでいた。

パンを手に取りちぎって食べようとすると、視界に誰かが入り込  
んだ。

「ん？」

俊永の目の前に一人の男がトレイをテーブルに置いて席に着いた。俊永は気にすることもなく黙っていた。話しかけることなど無論なかった。

その男は長身で髪は無造作ではあるものの少し長く、黒髪だった。肌は思春期特有のニキビはなく彫刻のようにすべすべで美人の女性のような顔立ちだった。眼鏡をかけていたのだが、それがなければもつと顔が引き立つと思えるような容姿の持ち主だった。

「君…九重俊永くん？」

俊永に向かって本人かどうかの確認をしてきた。俊永も人とあまり話したくはないのだが、そんなことを聞かれて黙っているわけにはいかなかった。だからぶっきらぼうにそうだけだと話した。

「そうか…ならイズル先生からの弟子のアプローチを受けているっていうのは本当かい？」

またか？そんなことが頭の中に浮かんでしまったのだが、俊永にそんな言葉話す勇氣もないから二度目のそうだけどが出た。すると相手はじろじろと俊永を舐め回すように見ている。

「そうか…君がか…いきなり質問して悪かったね。僕は、ノエル・ザッハ。科学国家の出身だ。イズル先生が弟子にしたいと話している人間を一度見ておきたかったんだ」

悪気はない感じで話しているが、俊永にとっては良い迷惑だった。自分の時間を壊された感覚になり目の前の無粋な男を睨んでいた。

「彼女は科学国家でも逸話になっっていてね…僕も彼女に憧れていて弟子を志願しているんだけど、断られてね…君はどうして誘われたのかな？」

「どうしてって…その…身軽そうだからって…」

「え？」

「魔法国家にも科学国家にも縛られない存在で家柄も特にないからだって…」

「君は中立国家出身ってことかい？」

「いや…俺は孤児だったからどちらの生まれかは分からないんだけど…まあ…中立国家で育てられていたからそうなのかな？」

曖昧な返事をして見せたが、ザッハは俊永が複雑な家庭環境で育ったのだと察したようですまなそうにもしていた。

「そうか…いや、その悪かった。そんなこととは知らずに聞いてしまっって…」

「いや…俺も別に気にしてないから…」

「そうか…あの、話しつついでに教えてほしいんだけど、君は将来はどこの国に属すんだい？やっぱり中立国家かい？」

「うん…まあ…」

「そうか…なあ、今日、ここであつたのも何かの縁だとも思う。これからも良かったら話し相手になつてくれないかい？」

恐ろしいほどの爽やかな態度に俊永は逆に引いていた。作つていいのか？そんなことを思つてしまうほど人間不信にもなつていた。人と関わらないように過ごしてきただけに対照的な人間に自然と拒否反応が起こつてしまうのだ。しかし無碍に断つてしまえるほどの気の強さも持ち合わせていない。所詮は優柔不断なのだ。だからそんな提案にもうんと同意することしか出来なかつた。

「ああ…そうそう、ひよつとしたらこれから始まるイズル先生の弟子選考会で同じになるかもしれないけどよろしくね…」

「え？」

そんな話を知らないの、驚く以外の反応はない。目を丸くしてザッハの顔を見た。しかし彼は彼で知っているものだと言つた様子で食事を済ませると、そのまま片付けていなくなつてしまつた。

俊永が弟子の選考会の話の詳細を知ることができたのは次の日だった。学校に来るなり、掲示板を眺めると確かに昨日ザツ八の話していることがそこには書かれていた。

『水雲イヅル先生の弟子選考会を土曜三時に会議室にて行います。参加資格は二年生で考古学に興味のあるもの。ただし右の者は必ず参加をすること』

その右の者の名前に大きく、九重俊永と書かれていた。

それを見るなり俊永は頭を抱えて沈んでしまった。こんなに堂々と晒されている知らない者もない…昨日のザツ八の言葉の意味をはっきりと理解した。

ちくしょう。断ったはずなのにまた振り出しに戻された気分だと俊永は苛立った。しかしこのまま無視してしまえば、何らかの懲罰を受けることは目に見えているので大人しく従うしかない。観念した面持ちでその場を後にした。

時間は来た。俊永は複雑な面持ちで会議室の端っこに座っていた。

ここには全部で数十人の生徒が集まっていた。その中には当然、あのシズクとザツ八の姿があった。

ザツ八は俊永を見るなりにこにこと笑顔で手を振っていた。それには愛想笑いでしか返すことしかできなかった。何で自分がここにいる？そんな疑問ばかりが思い浮かんで他のことを考えられなかつ

た。

そんな中で等の本人である水雲イズルは颯爽とその姿を現し全員  
の注目を浴びた。

凜とした姿勢と独特の雰囲気だけで皆の視線を集める。それだけで彼女のカリスマ性が証明され過去の功績を讃えているかのようだった。

しんと静まり返った室内でイズルは話す。

「よく集まった。本来ならこんな形を取ったりはしないのだが…まあ、皆を驚かす私のやり方だと思って考慮してくれ…それでだ、知っている者もいると思うが、九重俊永は私が一度勧めたのだが断られている。今日もこの場に呼んではいるがこの男以上の適任者がいればその者に是非弟子になってほしい。ただ…弟子になるということは授業でも話したが、生半可なことでは勤まらない。国を捨てるという覚悟がなければできないので、それが出来ない者は今すぐ帰るよう…」

真剣な表情でイズルはその場にいた者たちに話す。俊永は退屈そうに早く終わればいいのにと心の中で思っていた。ここには自分以上の存在がここにはごろごろしている。それなら決まるのも速いだろうとも考えていた。

「さて…選考の仕方だが…考古学に必要なことはまあ…いろいろあるが…大事なことは直感だな。地層を読むことも時代背景を知ることとも大事だが、運も必要ということだ。私を慕い集まってもらい申し訳ないが…まずは三人のグループに分かれてもらい発掘してもらおう。裏庭に私がいかにお宝を隠しているからそれを探してもらおう

か…」

そこまで話すと座っている生徒に降折りたたまれた紙を順番に回す。そこにグループの番号が書いてあると話し、それぞれが紙を開いて見る。

「一番早く探したグループから最終的な弟子の選考を行う。道具や必要な物は外に出してあるので…では、解散！」

簡単な説明を済ませ何もヒントを与えないと、イズルはそこからいなくなった。その場に残された生徒たちはすぐに動いた。紙に書いてある番号同士が集まりミーティングを始める。

やる気のない俊永も紙を見ると、『5』と書いてある。自分から動く気がなかったが、次々とグループのできる中で孤立していればかえって目立つ。だから残りの5を持つ二人が俊永の下にやってきた。

「え？あんと一緒になの？」

不満そうに俊永をじろじろと見ているのは何の縁なのか、あの日出シズクである。気の強さと人をゴミでも見るような態度がなければ最高なのにと不満を言いたげだったが抑えていた。

その後ろについて歩いていたのは、昨日会ったノエル・ザツハである。爽やかな好青年振りは健在で周囲の空気を清浄化してくれているような気すらする。

「俊永君…また会えて光栄だ」



シズクとは対照的な挨拶をすると、俊永も重たい腰を上げた。それから三人は周囲の人間同様に話し合った。

「時間勝負だからまずは外に出てから考えよう。ほら、ぞくぞくと教室を出て行ってる」

十五グループできた内の半分はもう外へと出ていた。それを見たシズクは焦る。早くしなさいよ！と一人動きの遅い俊永の尻を叩く。そして裏庭に出ると全員が驚愕する。草木が無数に生え、裏庭というよりも雑木林に等しかった。そんな中を何人も人間がスコップやつるはしを手に持ちうるついていた。この壮大な宝探しゲームの範囲は数百平方メートルと気の遠くなりそうな広さである。

「さあ、私たちもぐずぐずしてられないわ。早く道具を持って！」

シズクは周囲の雰囲気煽られ、二人を急かすが二人の気持ちはシズクに追いついていない。ザツハはあちこちを眺めながらいろいろ考えていた。俊永は何も考えず黙って立っていた。

「何してるの！早く！」

スコップを手にしたシズクは勇んで林の中へと入ろうとしたが、ザツハがそれを制止する。

## 12話

「待つて…無造作に進んでも意味がない」

「はあ？すぐ行動に移さないと見つからないのよ？」

直情的なシズクに呆れた様子でザツハは答えた。

「君は馬鹿なのかい？あのイズル先生がただ漠然とこのお題を出すと思ってるのかい？」

「どういう意味？」

「ただの運任せではなく洞察力も含まれてると考えた方がいい。探す前の会話で不自然に強調した先生の言葉…私を慕ってくれると話した後すぐに私が隠したとも話した。となると自分の特徴を考えて探せってことだ…」

「特徴って？何のよ？あんた人のこと馬鹿って言うけどそこまで賢い訳？」

「君のようなガサツな女よりは賢いと思ってる。僕は自分の能力に見合っていないのに威張る人間が大嫌いなんだよ…」

明らかかな敵対心丸出しの行為に俊永も戸惑った。まさか温厚そうなザツハが喧嘩腰でシズクに迫ると思わなかったからだ。このままでは選考会どころではなく戦闘会が始まってしまふ。そう大して上手くもないダジャレが思い浮かびながらはらはらしていたが、シズクはそんなにむきにならなかった。

「あつそ…私も別にあんたに気に入られようなんて思っていないから…」

そんなシズクの態度に俊永は何故かほつと胸を撫で下ろしていたのだが、シズクの会話はそこで終わらなかつた。

「さぞかし賢いあなたのことだから、ちよちよいのちよいでお宝探してくれるんでしょう？ねえ。ならすぐにやっつてよ。ほら！ほら！」

あろうことが火に油を注いでいた。俊永もその時ばかりは気が気ではなかつた。

「本当に下品な女だな…選考会とか関係なしに本気でぶちのめしたくなつてきた…」

ザツハの導火線にも火がついていた。何か黒いオーラが彼の背後に現れ一種即発の状況になっていた。そんな気まずい空気を打破しようとしたのはあろうことが俊永だつた。

「ちよつ…ちよつと待つてよ。今はそんなことしている場合じゃないでしょ…早く探そうよ」

元々争うのが嫌いだつた性格なのでひきつりながらも二人の仲を取り持つことを進んで行つてしまった。しかし効果はあつた。いがみ合う二人でも目的を思い返して冷静になつたのだ。

「そうだつたな…濟まない俊永君。君を無視して勝手な行動を取つて…」

素直に俊永に謝るザツ八だったが、シズクは謝る気などなかった。それでも一人が冷静になったことでその場がおさまったので俊永はほっと胸を撫で下ろした。

それからザツ八は自分の観察眼を生かして会話をする。

「イズル先生はあえて痕跡を残している…これはきつと考古学に通じているのだと思う。彼女の手のひらのサイズは十八センチ、足の大きさは二十四センチ、体重は不明だけどそれを表すものがある…」

「え？どこによ？」

シズクはきよるきよる辺りを見回すが、同じような木々ばかりで分からなかった。それを見ていたザツ八はため息をつきながら一つの木を指差した。

「その木の幹を見てもよ。微かだが明らかに女性の手で握られた跡が付いている」

二人がザツ八の指差した木の幹を見るとそこには人の手の型がくつきりとくつきついていた。色つきなのは分かりやすくしてくれているのだろう。しかし木の幹と近い色の手形だったので目をよく凝らしてみないと気づかないことは事実だった。

「そして…それだけだとイズル先生のものかは分からないものが多数存在するが木の根元にある足跡と照合すると…あっちの方角に進んでいるのが間違いない」

ザツ八が指を差したのは林の奥の北東の方向だった。

「よりによって鬼門の方角とは…イズル先生の考えそつなことだね」

とりあえず判断材料を手に入れた三人の動きは機敏だった。周りではあてもなくあちこちの地面を掘り返している者の姿ばかりだった。まるで数打てば当たるとでもいうように乱暴にあちこちを掘り返している。そんな奴らを欺くかのように俊永たちは木の幹と地面についているイズルの痕跡を淡々と追いかけた。

途中までは順調に進んでいたのだがその終わりも速かった。七つ目の情報を最後に手がかりは忽然と姿を消してしまったのだ。ザツハの足が完全に止まったことで異変を感じたのだが、それと同時にシズクは何かを微かに感じていた。

「ここからは先はイズル先生の痕跡がない…ここら辺がお宝の場所なのかも知れないが確信は持てない…」

現状を伝えるザツハだったが、それを聞いたところで俊永にはぴんとこなかった。どうしたものとザツハが悩んでいると、シズクは意識を集中させ黙っていた。

「どうした？」

俊永は気になり声を掛けたが静にしると逆に怒られた。そしてそんなシズクの姿を二人は黙って見ていた。

「魔法の力を感じる…それも特異な感じの…意図的なものかもしれない」

全身の神経を集中させ肌を分子レベルまでの感覚まで研ぎ澄ます。

魔法の力は自然と一体化しているがゆえに並みの人間には違いが分からない。しかしそれを使いこなせる人間からすると僅かな変化も感じ取れるのだ。

これにはザツハも口出しする余地はなかった。ただ黙ってシズクのすることを見ているしかできなかった。

「あっちの地面に薄く広く力を感じるわ…」

指差したのは雑木林の中に存在するオアシスのようなぽっかり空いた原っぱだった。範囲はかなり広い。しかし重要な手がかりとも思えた。だからザツハは否定することなく動いた。

「なら…あそこに何かがあるに違いない」

使うことのないと思われたスコップを握り締めると真っ先にそこに向かった。俊永は黙ってそこについていくことしかできなかった。しかしそこを見るなり全員が肩を落とす。

範囲にして十メートル四方のエリア。これを全て掘るとなると数時間掛かってしまうのが目に見えていた。しかも深さも分からない。時間制限がないとはいえ、翌日まで掘っているほどきちがいでもない。

折角見つけた手がかりなのにザツハは頭を悩ませていた。するとシズクは前に出た。

「ほらほら…ここを掘るよ！絶対にここにあるって分かってるんだから掘らなくてどうするのよ！あんたもここまで連れて来たんだから責任果たさないよね」

先ほどまで敵対視していたザッハに文句を言うこともなく率先して土を掘り始めた。それを見てザッハも動いた。

「そうだな…ここにあるのは間違いないからな…」

俊永は二人に先を越され黙って見ていた。自分はどうしたらいいのだろうか？本来ならこんなこと巻き込まれたくもなかった。しかしシズクもザッハもこの選考会に全てを賭けているのがあらゆる面での気迫で分かる。

二人はざくざくと何もしない俊永を気にすることなく土を掘っている。未来を夢見て、真っ直ぐな瞳で夢を追いかけている。

俊永はそんな二人の姿を見て動くはずのない心を動かされていた気分だった。このまま傍観者気取っていたらただの駄目人間のままだらうな…

やりたくない反面、手伝わなくてはという気持ちもあり普段やらない力仕事をやることになった。

それから三人で一時間の間黙々と地面に向かって何度も何度もスコップを振り下ろしていた。春先とはいえ、気温もそこそこ上がっているので汗も大量に噴き出していた。じわりと滲んだ学校ジャージを脱ぎ捨て、ズボンの裾も上に巻く利上げるとTシャツ短パンの軽装になって掘り続けた。

更に一時間経つと手にはまめができ、次第に手には感覚もなくなる。腕もぱんぱんに張り最初のように軽やかにスコップを持ち上げることができなくなっていた。俊永は諦めそうになった。もういい



んじゃないか？ここまでやったら上出来だよとみんなに話したかった。しかし二人の気迫は衰えることを知らない。

何がなんでも探してやろうという気持ちが前面に押し出され、文句の一つも言わない。手には血が滲んでいて顔中は土にまみれていたがお構いなしだった。そんな姿を見て俊永には理解しがたかった。ここまで水雲イズルの弟子になりたいものなのか？あっさりと誘われ断った自分が申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

だからかもしれない、あっさりと諦めることが日常茶飯事の彼も挫けそうになった心を奮い立たせ、離しそうになったスコップを握ると再度穴を掘り続けた。

掘り始め、二時間半が経った頃である。三人の体力は流石に限界に到達した。気持ちは掘りたくても体がついていかないのだ。腕は上がらないで、血と土の混ざった色をした手のひらは小刻みに震えていた。シズクは地面を思い切り蹴り上げ、不甲斐ない自分の体に腹を立てた。ザツハも肩で息をして立つことしかできなかった。一番体力のない俊永は立つこともままならずその場に座り込んで動かなくなっていた。

三人が掘った範囲は五メートル四方、深さ一メートルと全体の半分だった。これはこれで凄いことなのだが、肝心の物が見つからなかった。いくらたくさん土を積み上げて結果が重要で、どれほど頑張った過程など言い訳にしかすぎないのだ。

ここにあると確信に近いものを感じていたのに探すことのできないことは歯がゆいもので、ザツハもシズクも諦めきれないでいた。そんな中、極限状態で体も動かない俊永が顔を上げた。

「ん  
…」

不意に体が何かに反応する感覚に襲われた。それは感じたことのないもので、一つの光が地中に留まりその姿を見つけてほしいと話してかけているかのようだった。暖かく、やさしい。母体に存在する胎児のような感じすらした。

俊永は疲れすぎておかしくなってしまうのだろうか？とも思った。しかしその自らの身に訪れた不可解な力は自分の意思とは無関係に働く。掘っていない硬い地面の中に黄金色の光が埋まっているのがはつきりと見える。

これは幻なのだろうか…

俊永はふらふらとその光の見える場所に歩いた。他の二人もその様子をただ黙って見ていることしかできなかった。そして俊永はそれに導かれるようにその光のある場所に座り込むと手で土を掘った。指先に激痛が走るがそんなことを気にしてはいなかった。何故かそこにあるものを手に入れたいという衝動に駆られたのだ。こんな経験は今までない。臍に見える光を追い求め無我夢中で掘り進める。

地面を掘ること数十センチ。俊永の指先はがつんと何かにぶつかった。

「これは…」

指先に当たったのは古びた木箱だった。様々な模様を掘り込まれ宝石のようなものが散りばめられた装飾が施されたその箱はただの箱ではないことが一目で分かる。

他の二人の視線もその箱に集中しまさかという表情をした。

「ねえ…それって…」

「やっぱりそうなのかな？」

近づくと二人に俊永は見せた。するとシズクは歓喜の声を上げる。

「やったわよお！これよ！これに違いないわ！」

俊永にはこれがその目的の物かなど分からない。そうなのかもと疑うぐらいだったのだが、シズクだけは確信していた。

「そうなの？これが…」

「そうよ。微かに魔法の力も感じられるわ…こんなの感じたことないけど、絶対そうに決まっている。はは！やったよ。やったあ…」

満面の笑みを浮かべ跳ね回るシズクだったが、ザッハも嬉しそうだった。

「十中八九間違いないね…ダミーにしては出来すぎている代物だよ。時代も相当古いものだ…最低でも千年以上の物に違いない」

目利きがある程度できるらしく、その箱の装飾様式、宝石の種類、木の材質を分析して時代背景を導き出していた。これは科学国家出身の彼らしい分析力である。

「へえ…あんだ…なかなかやるじゃん！」

ばんつと力強く背中を叩かれ俊永は前に倒れ地面に顔を思い切りぶつけた。

「あらら…本当に弱いわね…」

そんな俊永にザツハがやさしく手を差し伸べた。

「君は思ったとおり何かを秘めていたようだね。あのイズル先生が目をつけるだけあるよ」

「そうかなあ…」

顔の土をはたき落としながら実感は湧かないといった様子だった。それでも三人が見つつけたこの木箱は紛れもなくイズルの出した問題の答えだったので、その時点でこの試験は終了した。

「さて…残ったようだな、俊永…」

自分の思惑通りにことが進んだとでもいいそうにイズルはみやみやと笑みを浮かべていた。他の者たちが悔しそうに帰って行った教室はとても広く感じてしまう。がらんとした殺風景な場所に四人が固まって話をしていた。

「おかげさまで…」

皮肉のような言葉を口にする、イズルは続けて話した。

「どうしてこんなことしたか分かるか？…その賢そうなお前！」

ザツハのことを知らないようで名前でも呼ばずに指差した。

「そうですね。先生のことだから意味がありそうですね。うーん…まず最初の組み合わせです、これは科学国家出身と魔法国家出身、そして中立国家出身で全部組みませましたね」

「え？だって紙をばらばらに渡してたはずじゃ…」

俊永がそこで突っ込んできたが、その答えもザツハは用意していた。

「先生からの手渡しだから好きなように出来るじゃないか…そしてその三つの国家出身に分けたのにも意味があるんですよ。科学国家出身の者が洞察力で大まかな隠し場所の特定をして魔法国家出身

の者があの箱にかけられた魔法を感知しもつと細かく場所を特定する…それで分からないのは最後なんですけど中立国家の人間は何のために組まされたんですか？」

今までの自分たちの流れを思い返してそんな風に話していたが、分からないこともあったのだ。そこまでの分析についてはシズクはお見事と素直に褒めてくれた。そして最後のザツハの質問にも答えてくれた。

「中立国家の人間には魔法国家にも科学国家にもない未知の可能性を秘めている者が多いことを知っているかい？」

「えっと…その…突然変異とかそういうことですか？」

「まあ…その話は後々にしておこう。しかし…俊永が見つけたということはさっきの言葉の答えにもなっていると思うがね…」

みんなで俊永の方を見るが当の本人は何のことを話しているのかわく分からなかった。そうなの？と、とぼけた顔を試してみた。

それからイズルは本題に入った。弟子選考試験を行った本当の理由について語る。

「先ほど賢そうなそいつ…えっと名前は…」

「ザツハです」

「そう、ザツハの話したことにもあるが、考古学に大事なものは洞察力、観察力、そして直感だ。それは外せない要因である。しかしそれ以上に大事なこともある。何か分かるか？シズク…」

「えつと…目的の物を傷つけずに掘り出すことですか？」

「そんなことは初歩で当たり前だ。これはお前に最も必要なことなんだ」

「え？」

まるで分からないと秀才のシズクが頭を捻っていた。するとイズルは分かりやすく答えた

「チームワークだ。考古学とは一人でやるものじゃない。それぞれの分野に長けたものが自分の能力を存分に発揮し、一つの目的のために皆で意見を交わしたり、議論したり、助け合ったりするんだ。」

私は確かに選ばれたアールキオロジストだが、現場に出ればたくさんの人間も使うこともある…踏ん反りかえってあれこれ指示を出したところで誰もついてきてはくれないだろう…だからその時にいる人間に瞬時に対応し、気配りすることも必要なことなんだよ。シズク…お前にそれが欠けてるんだよ」

「イズル師…そうかもしれないませんが…」

自分が選考から外されてしまうかもしれないという危機に晒され焦って弁明をしようと試みたがイズルに遮られる。

「優秀すぎる人間は、自分の中で勝手にいろんな人間に優劣を付ける。それは傲慢にしか過ぎない…あらゆる人間を毛嫌いすることなく接することができてこそそのアールキオロジスト。お前はまだまだ半人前だな」



そんな言葉にシズクは今の自分と重ねてしまい衝撃を受けた。が  
つくりと肩を落とし気持ちも萎えて何も言えなくなってしまった。

「っていうか…私から見たら残りの二人も同じように半人前だけど  
ね。頭でっかちの科学者気取り。ぐうたらでやる気のないニート予  
備軍。でも…今はそれでいい。私だって昔から一人前じゃないんだ  
から…それでだ…」

イズルは羊皮紙でできた高級な紙を取り出して三人に渡した。そ  
れぞれがその紙に書かれたことを見て驚いた。

「これって…」

「そう…三人とも私の弟子の称号を獲得したってこと」

「でも…三人の中から決めるんじゃないんですか？」

それを聞くなりイズルは笑っていた。

「あれ？知らないの？国選人は弟子を三人まで持てる…それに誰も  
最初から一人決めるなんて話してないしな…」

イズルは選考試験の勝利グループをそのまま弟子にすると決めて  
いたらしい。短い間でもチームワークを瞬時に組み、その中で最高  
の結果を出すことは経験豊富な大人でもかなり難しい。だからその  
難題を乗り越えた者を素直に評価している。

「明日からは、通常授業ではなく弟子専用の特別授業が組み込まれ  
るからそのつもりで…弟子の申請はこれからやっておくが…安易で  
軽率な行動は控えるように。卒業するまでに中立国家の法律を守れ

なければその時点で契約は解除、懲罰もそれなりに受けてもらう」

最後の言葉には特に力が入り冷たい目で三人を見た。それだけでイズルの言葉の重さが伝わりそれぞれが悪寒を感じながら気をつけようと考えていた。

「今日はお終いだけど…俊永」

「は…はい」

「これあげるから持って帰りなさい」

そう言って古びた万筆のような物を投げて渡した。

「何です？これ…」

「あんたが見つけたんだろ？今日の戦利品だよ」

「あの木箱の中に入っていた物ってことですか…でも…どうやって使っんです？」

「さあ？それは私にも分からない。これが何なのか、どういう風に使うのか。でも数千年前の物だということだけは分かる。発掘された古代の代物なんだよ…」

そんな貴重な物を宝探しのために使ったのかと呆れてしまった。しかし価値のあるようなものには見えず、俊永ももらった物をただ眺めていた。

木製の小さな棒にしか見えないその代物は、表面には漆でも塗っ

であるかのような気品のある光沢があり、木箱同様に見事な装飾が施されていた。

「これから考古学を学んだ…お前も過去の産物を研究してみるんだな」

イズルはそのまま教室を出て行ってしまった。他の二人は羨ましそうに俊永を見ていた。

「いいなあ…どうして俊永ばかりイズル師に可愛がられてるわけ？」

「知らないよ…」

「でも…俊永君が見つけたのは事実だからね。しかし…どうやってそれを探したの？」

「どうやって…えっと…言葉で上手く説明できない…自然と体に入り込んでくるような感覚がして…その場所が見えて…」

自分にしか分からないといった様子で上手く説明することができなかった。しかしシズクは自分の魔法探知に似ているとも話した。

「私も同じような方法で魔法を感知している。だからあの箱の場所を大まかに特定したときの感覚に似ていると思う…私のよりも精密なのが憎らしいけどね！」

悪態をつきながら話すが、俊永もそれを聞いて否定はしなかった。心の中で納得する部分もあった。それから三人は今後の話を少し話すこととした。

俊永とザツハは同じ寮なので帰り道も同じだったが、一方的に話すザツハの話を俊永が聞きながら歩いていた。どうしてここまでザツハが自分に接してくれるのか分からなかったが、初めて出来た友人のような気分だった。

## 16話

水雲イズルの弟子に認定された三人の生活は一変した。

まずは大幅の授業の免除。弟子の修行の方に時間を大幅に割かれることになった。次に学生でありながら両国を行き来できる権利を得た。そして最後に渡された一枚のカードに三人は驚いた。

国選人の弟子を証明する黄金色の認証カードだった。これがある  
と一般人の入れない場所にも自由に行き来もでき、買い物も無料で済ませられ、状況に応じて人民を従わせる効力を持っている。こんな万能なカードは国選人も当然のことながら持っているが、弟子を含めて世界で五十枚も存在しない。だからこそ世界の中でも優位な立場に自分が立っているとも感じてしまう。三人の中でも俊永は一番興奮し、いろんなことを想像していた。

「凄いよ…これ…これで何でも買えるんだろ？なら…好きなもの食べれて、好きな服着れて、住むところも豪邸にでも住めそうだ…」

そんな妄想を膨らます俊永と違って残りの二人は違った。家柄が共に良いので物欲は全くといってよいほどなかったのだ。だから俊永の気持ち理解できなかった。しかしどんどん自分の世界の深みにはまっついていく姿を見てシズクが現実に戻した。

「あんなね…学生の内は寮を出ることはできないのよ。それに考古学と無関係な物ばかりこれで買ったりしたら私たちの恥になるから止めてよね。自分の趣味の物は自分で買いなさい！」

「そんなあ…折角金持ち気分を味わえるのにそれはないだろ…」

「諦めた方がいいよ…それにお金は持ちすぎると人を変えるって言  
うしね」

ザツハはしょうがないよと俊永を慰めていた。

「お前らは育ちがいいから俺の気持ちなんか分からないんだろうな」

俊永は一瞬だけ味わった金持ち気分をなかつたことにされてふて  
くされていた。

するとすぐにイズルが自分の研究室に三人を呼び出した。

軽くノックをして三人が部屋に入ると、そこは足の踏み場もない  
ぐらい散らかっていた。部屋の広さは相当の物で、個室トイレ、洗  
面台、クローゼット、が揃っていて一人の人間の使う仕事部屋にし  
ては十分すぎるものだった。流石国選人の人物の待遇は違うと思わ  
せたのだが、床や来客用ソファ―が研究書類やら発掘した物やら分  
厚い本やらで埋まっていたので広さが全く分からなくなっていた。  
そして窓際に大きな木製の机が置いてありイズルはその前に座つて  
いたのだが、机の上も同様にいろんな物でごちゃごちゃしていて、  
ドアを開いた人間から座っている姿が見えなかった。

「必要な物は貰ったか？」

事務手続きを終えたことを見計らって呼び出したようで、入つて  
きた三人にそんなことを話したのだが、三人には物が邪魔でその姿  
が見えなかった。

「え…っと…先生。これは…」

三人の中でも几帳面なザツハはこの状況を説明してくれと言わんばかりで姿の見えない主に話しかけた。

「これはって…何のことだ？」

イズルはザツハの質問の意味が分かっていないようで、立ち上がって三人の前に姿を見せた。

「いや…いいです。手続きは済みました」

「そうかい…ならいい…」

イズルは机の上に置いてある煙草の箱に手を伸ばし、中から一本取り出した。そして火をつけるとふうつと煙を吐き出すと俊永の方を向いて話す。

「俊永！先に釘を刺しておくけど…国選人用カードを手に入れたからって身分不相応な変な物買うんじゃないよ」

俊永はどきつとして、やっぱりかぁ…と自分の欲望を打ち砕かれるため息をついていた。

「さて…早速だけど、簡単に弟子についての説明をするよ」

そこら辺に座れと指示を出す、汚すぎてどこに座ったらいいのかわからない。適当にうろつろつして足の踏める場所を探してそこに立っていた。

「この一年で行うことは、考古学の基礎知識の学習、各々の能力の飛躍、後は身体の鍛錬かな…とりあえず最終的には卒業までに結果を残す発掘をしてもらう。私が評価をして及第点得られるようなら合格、春からは堂々と弟子を名乗ればいい。そして…その逆の可能性もあることを忘れるなよ」

「解任されることもあると…」

「当然だ。国家は何もできない人間を無償で養ってくれるほど寛容ではない。他人にない何かを持ち合わせ国家のために働くからこそその代価を受け取れるんだ。私だって使い物にならなくなったら鞍替えされる可能性は十分にある。肩書きだけの存在は今の時代にはいらない。実力が無いものは淘汰される世界なんだよ」

自分を奮い立たせるためにもそんな風にこれから起こるかもしれない事実の話をした。崇められる人間で終わってしまう時代は終わりだということなのだ。

「あの…考古学の勉強やら能力やらの話は分かるんですけど、身体の鍛錬？これって必要なんですか？」

俊永はそこだけが気になっていた。元々体を動かすのが苦手な彼にとって、身体の鍛錬など聞いただけでやる気がなくなる。そんな俊永を見るなり、シズクは良い機会だと思いはっきりと話した。

「自分の身を守るためだよ」



「何からです？」

「バロだよ……」

「バロって…あのバロですか？」

声のトーンが大きくなってしまいがらもザツハも恐る恐るその話題に触れた。その様子だけで目に見えない恐怖を感じているのが分かった。

「ああ…そうだよ…お前らは国家に守られている人間だから外の世界を知らない…だから教科書で習ったあのバロも見たこともなければどんな存在かも知らないだろ？」

「先生は会ったことがあるんですか？」

「外を行き来するっていうことはそういうことだからな…出会うこともあれば全く出会わないで半年を過ごすこともある。しかし自分の身を守れなければ殺されるな…確実に」

ぞぞぞと三人は悪寒を感じ、教科書でしか見たことのないバロを自分たちなりに想像する。

バロとは、この大陸に存在する大三国から外れた場所に生息する人間たちのことである。別名は自由の民。名から見ればそんな恐ろしいものではないのだが、実際は違った。三国から自ら出てしまった者や追い出された者といったならず者ばかりなので行動も枠外である。生きるためなら何でもする。それこそ強盗、虐殺はお手の物だった。

彼らには法律は存在しない。だから三国でも禁忌とされている行為ですら平気で行ってしまふ。魔法だろうが科学だろう…自分たちが強くなるためなら、楽に金を稼げるためなら何でもした。

そんなバロは数百年前から増加を始め、今では数万人という数まで膨れ上がっていた。大陸全体の人口から換算したら微々たる人口かもしれないのだが、その個々の恐ろしさは数百倍の人口にも匹敵してしまうのだ。だから三国は警護を強化し認証コードを持たせたり、簡単な魔法認識の印をつけたりした。

「バロは決して誰かに統率されているわけじゃない。だから残忍な者もいれば穏やかな者もいる。そして…毎回穏やかな者に出会うとは限らないだろ？だからそのための鍛錬なんだよ。最低でも科学も魔法も関与しない状態で戦えるようにならないとこの先生きてはいけないから…」

「ええええ…」

俊永の表情はどんどん暗くなっていく。そこまで危険なことに巻き込まれているとは知らなかったことが大きかった。喧嘩をしたこともない者がどうやって命の危険に晒された時に対応できるのだろうか？努力すればそんなことも補えるのだろうか？そんな疑問ばかりが浮かんでいた。

「いきなり外には出ないが、いずれは出るんだ。このことを考えて自己防衛だけはしっかりとしろよ」

他人事のように振舞うイズルを俊永は鬼だと思ったが、外を自由に行き来することにはそれなりの代償が必要な世の中だということである。三人はまだ外の世界を知らない。外界から遮断された世

界を当たり前のように過ごし、外の世界は教科書の出来事なのだ。  
だから広い世界にも見える自分の国家は意外に狭くも感じた。

学生食堂の中で三人は同じテーブルで食事をしようとしていた。

今日の見習い修行が長引き、三人は学校にある食堂で夕食を取っていた。ここは職員が利用するものであったが、弟子見習いも権限がそれなりにあつたのだ。

三人がそれぞれトレイの上には好きなおかずを乗せていたが、タイプの違うだけに盛り付けもその人間の色が出ていた。

俊永は草食系だけあつて少量のサラダ、しょうが焼き、ご飯である。ザツハは和食中心で魚、お浸し、味噌汁、ご飯だった。シズクはお嬢様だけあり、洋食が選択されパン、サラダ、スープ、メイソンのステーキ百五十グラムといった様子である。

広い食堂で大した会話もなく黙々と食べているので食器の音だけがカチャカチャと響いてしまう。そんな中で俊永が珍しく会話を求めた。

「あのさ…聞いときたいんだけど…お前ら弟子になるってことは家を捨てる覚悟ってことなの？」

二人の手がぴたりと止まった。

「どつという意味よ」

「俺は…孤児だから別にどつとでもなるけど…将来を有望視されているんなら何もこんな不利な選択しなくてもいいのかなって思っただけだけど…」

俊永なりに気になっていたので今の内に聞いておきたかった。するとシズクは馬鹿じゃないの？といった態度で答えた。

「曖昧な気持ちでこんなこと選ぶ訳ないでしょ？ねえ、あんたはど  
うなのよ！」

ザツハに答えを求めたが、ザツハはシズクとは少し違う答えを出す。

「僕は…こういう道もありかなって思っている…家を捨てるっていうのは大げさな気もするけど将来自分の国の役には立つんじゃないかな？それなら胸を張ってできる役職だよ絶対に…話を返すけど俊永君はどう思ってるの？」

「俺は…その…」

自分に話題を振られて困っている俊永を見るなりシズクはイラつきながら横から口を出した。

「優柔不断のそいつに答えを求めても無駄よ。どうせ楽な生き方しか考えてないんだからさあ…どうせ辛くなったら逃げるんでしょ。俺には不向きでしたって…」

シズクの発言は的を射ていたから俊永は自分の弱い部分を見透かされてしまい困惑していた。黙っている俊永とは違いザツハがシズクに反論した。

「そんな言い方はないんじゃないか？みんなが辛いことに立ち向かえるはずがない」

しかしシズクは勢いのまま話を続けた。

「はあ？誰が万人の話をしてるのよ。私たちは選ばれた三人なのよ。なりたくてもなれなかつた人間が何十、何百っている中の三人なのよ。それを辛くなつたから止めますって、どう考えても言えるはずないと思うけどねえ…私なら恥ずかしくて他の人に顔向けできないわ。死んでしまいたいくらいよ」

「随分な言葉だな…君はそこまで強い人間なのかい？」

ザツハはシズクを睨み付けた。

「さあね…でも周囲の人間の期待に応えられるだけのことはしてきたわ」

まるで何もしていない俊永と一緒にするなといった感じだった。

「二人は怖くないのか？教科書でもあつたけど…バロつてのは捕まえた魔法使いや科学者とことん自分の糧にするために…解体したり人体実験に使うつて。そんな…そんな残忍な奴相手に殺し合いなんて出来るのか？」

俊永が一番聞きたかつたことはこれだった。自分よりも優秀で能力があり強い人間は得たいの知れない恐怖にどうやって立ち向かうのか。どう対処するのか。

「殺し合いなんて…私だつて未経験よ。そんなの怖いに決まつてるじゃない。出来るかどうかなんてその時にならなきゃ分からないわよ！それを承知で弟子になろうつて頑張ろうとしてるんだから当たり前のこと聞かないで」

「俊永君…怖いってことは恥ずかしいことじゃないと思うよ。それを受け入れられるかだ。僕だって怖いよ。知識だけは豊富にあっても経験はゼロなんだからね…だけどこれから強くなればいいんだ。イズル先生を信じよう」

ザツハは優等生の解答を出すのが、シズクはそれも気に入らないように弱い奴は勝手につぶれてしまえばいいと豪語していた。

「まあ…始まったばかりなんだからあんまり考えない方がいい。明日からまた頑張ろう」

全てをまとめるようにザツハがそんなことを話すと三人は食事を再開した。

## 19話

弟子の選考を決めてから早一ヶ月が経過していた。

三人の毎日は、学校の課題、イズルの課題、身体鍛錬と自己の能力鍛錬の繰り返しだった。優秀な二人は問題なく短時間であらゆる課題をこなしていたが、俊永は常に長丁場だった。

今まで努力をすることのない男が急に次々と与えられた課題をこなすなど無理に等しかった。だから自分の自由になる時間はほとんどなく、学校に行き、帰り、寝るの日々だった。

身体鍛錬は体術専門の師範があらゆる攻撃に対する受け方、確実に戦力を奪う戦い方を教えた。頭もそうだが、肉体面でも劣っている俊永は受けを間違え攻撃をまともにくらって気絶することが何度もあった。筋肉痛は当たり前、打撲、切り傷、擦り傷は日常茶飯事となってしまうた。

自己能力の鍛錬は、シズクなら魔法強化である。シズクの持つ属性の魔法を精密に操ることを意識し自然に扱えるように集中力を高めていった。これは容易なことではなく時間をかなり必要とする。

魔法には突発的な成長は存在しないからじっくりと肉体と精神の強化をしていかなければならない。そうしないと魔法という大きな力に対して未熟な体が追いつくことができずに体内を魔法の力が暴走して駆け巡る。早い話が自滅するのだ。

一方ザツハは科学国家に存在するアルケーエナジーの扱いを確実なものにしなくてはならなかった。アルケーエナジーを武器化した



ものでエナジーエミッションという武器が存在する。これは魔法を人工化させたものと言ったもので、アルケーエナジーを特定部位に放つことのできる精密機械だった。

衛星を利用し座標を決め、その場所にピンポイントで魔法の力を食らわせる優れものであったのだが、弱点も存在する。

近接戦闘に弱いということだ。座標コードを打ち込むことに多少の時間は掛かる。その間に相手に襲われることだって十分にあるのだ。それに瞬時に座標を特定することはどんなに頭の良い人間でも不可能だった。六桁のコードを数秒で打ち込むには大陸の詳しい座標を頭の中に叩き込んでおかなければできない。

しかも初めて見る場所ではそれもままならないだろう。だから自動座標認識装置を併用して扱うことが普通だった。自動座標認識装置はデジカメのようなものでその風景を写すとその場所のコードが表示されるようになっていた。

つまり座標検索、コード打ち込み、エネルギー発動、と三段階になるので魔法とは違い発動までに時間が掛かるのだ。しかしエネルギーは無限に等しいという利点はある。魔法はどうしても術者の体力と精神力が必要になるから底があるので、その点では科学が勝っていた。

そんな感じで近接戦闘に不向きでも座標コードを数秒でできれば魔法に匹敵する強さを持つことができるので、ザッハはこの大陸の座標を全て覚えることから始めていた。

そしてエナジーエミッションの扱いも全てを把握できるほど単純なものではないので、同時に解明と分析も進めていた。

最後に俊永であるが、中立国家在住の彼にできることはほとんどない。いや皆無と言ったほうが早いかも知れないのだが、この前の選考試験で見せた不思議な力のことはイズルも目を付けていた。だから毎日あの時に発掘した物に触れ、意識を集中させ探した時の感覚を忘れるなど話した。

俊永にはこれが何に繋がるのかなど理解できなかった。しかしイズルの話すことには意味があるのだと思い、言いつけを守るように毎日数分の瞑想状態に時間を割いていた。

それぞれがそれなりに動きだしていたが、まだそれは種の状態に過ぎなかった。それがどのように成長するかなど本人も知らなかった。

さらに一ヶ月経ったある日、イズルは実戦の練習をすると言い始めた。被害が出ないように校舎の庭園の一部を利用した。ここなら小規模の爆発程度なら誰も巻き込まれないし、それぞれの実力を考えるとイズルの想定内で収まることになっていた。

「いいかい。バロは魔法を使う奴もいれば、エナジーを利用した武器を使う奴もいる。その時その時で状況が常に変わることを意識しなければならぬ。マンネリ化した戦いなど存在はしない。自分が生き残るためには生きるための最大限の努力をする、それが第一だ。基礎練習はこなしているな？」

全員が返事をする、イズルはザツハとシズクに前に出るように話した。

「なら：今からお前ら二人で戦ってもらう：と言っても模擬戦みたいなものだ」

「え？いきなりですか？」

「魔法と科学の衝突が分かりやすいだろ？それに俊永の手本にもなる：それに安心しろ。ここで魔法の力を使おうが、科学の力を使おうが許可はとってあるし、私も結界を張っている。だから自由に自分の力を解放していいんだぞ：」

それは魅惑の言葉であった。今まで使えても使うことを許されないので自分の力がどのぐらいのものか知りたい気持ちはあった。血気盛んな若さゆえに力に対するあこがれは相当のものである。

シズクは魔法をの力をザツハはアルケーエナジーの力を自分なりに研究していたのだ。それを試す機会を与えられたことには心も揺らぐ。

「今から自分の持ちうる力に対する慣れも必要だ…だから思う存分相手を殺す覚悟で望めよ」

二人に断ることなどできなかつた。寧ろわくわくする気持ちでいっぱいだった。

「あんな…死んでも怨まないでよね」

シズクがそんな軽口を叩いて挑発しているかのようにだったが、ザツハも怯むことなどしない。

「僕はザツハだ。何度も言わせるな。上等だよシズク…お前の天狗になっている鼻を折るのには良い機会かもしれないな…僕も手加減する気はさらさらない」

犬猿の仲のような二人には相手を気遣う気持ちは一切なかった。いつでも開戦してくれという様子でじりじりと相手の動きを伺っていた。すると開始の合図はイズルによってあっさりと出される。

「はい…なら始めて」

## 21話

二人の中央にいたイズルがすつと身を引き後退すると、シズクが真っ先に飛び出した。疾風の如く大地を音もなく走ると、たったの三步でザツハの目の前に現れた。軽やかな身のこなしはまるで猫のようだった。

「う…」

相手の姿が視界に映るのと同時に鋭い蹴りが腹部に襲い掛かっていた。シズクの得意技の一つ横蹴りである。回し蹴りとは違い一直線に放たれるその威力は凄まじくまともに入れば悶絶は間違いなかった。

だが…その蹴りをしっかりと見極め同じ衝撃に近い力を持って左手でいなした。加速の付いた蹴り足はそのまま別の方向に力を流される。そのままシズクが体勢を崩しそうになると、ザツハは空いている右手の掌底をシズクの頭目掛けて繰り出した。女性相手に拳は握れないし、顔も狙えないと思った判断からその攻撃を選択していた。

そんな僅かな配慮が迷いに繋がったのか、コンマ数秒相手に守る時間を与えていた。

シズクはその攻撃を左手で防いだ。そしてそのまま相手の視界から消えるような鋭いフックをザツハのコメカミに叩き込んだ。

「ぐう…」

がくんと膝が落ちそうになるが、そこはどうか踏ん張っていた。そして自分のいる場所がまずいことに気がつき、大きく後ろに飛び後退する。逃してはならないとシズクはすぐに前進して距離を詰めようとした。しかしザツハは既に手に武器を持っていたのだ。腰のホルダーにつけてある拳銃にも似た近代的な武器。その中心にはアルケーエナジーが装着され赤く輝いている。

ザツハは後退すると同時に引き抜き、構えていたから前進したシズクは格好の標的である。座標特定を行わなくても単純な攻撃ならただトリガーを引けばできる。ただし座標特定をすることが力の増幅にも繋がるので、ただ引くだけでは殺傷能力は大してないしあらぬ方向に飛んでいくこともあるのだ。

ザツハは宙に浮いている状態のままシズク目掛けて引き金を引いた。すると銃口からは赤い光が高速で飛び出す。

シズクは直感だけで避けるしかなかった。どうにか上体を捻ると赤い光は頬をかすめて湾曲しながら空に向かって飛んでいった。そんな攻撃でもシズクの足を止めるのには十分だった。かわすことで精一杯のために転んでしまったのだ。

「ちっ……」

ザツハは着地すると今度はすばやく座標コードを打ち込んだ。この界隈の座標コードはすでに頭に入っていたから打ち込むのに二秒も掛からない。そのまま引き金を引くと今度は先ほどとは比べ物にならないほどの大きさの赤い光が銃口から飛び出した。しかも狙いがシズクから反れることはないことを感じさせるほどに直線的だった。直撃は免れないことは明白でシズクも動かなかった。

標的にぶつかる衝撃音と共に炎の柱が上がった。まさに火の銃弾そのものだった。アルケーエナジー火の属性の武器の威力をこの場で初めて示して見せた。

周囲に燃えるものは何もなかった。火はそのまま自然鎮火したが、俊永はシズクがどうなったのか心配だった。まさか消し炭になっってしまったのではないだろうか。と煙の立ち込める先をじっと見ていた。

するとそこには煙の中から立っているシズクが見えてきた。周囲の地面はえぐれているのにシズクの立っている場所だけは元のままだった。何が起こったのか俊永にはわからなかったが煙が晴れていくとその理由が分かった。

水がシズクを守るように全身を覆っていた。

「これは…」

半透明であったがシズクの体は確かに水に包まれている。長い髪の毛がゆらゆらと揺れ、シズク自身も光の屈折でおかしく見える。そしてシズクがそのままずっと右手の人差し指をザッ八に向かって突き刺すと、

「飛び出せ、水の弾丸」

そんな一言を口にした。

号令を受けたかのようにシズクの体を覆っていた水が一斉にザッ八に向かって無数の飛礫のように変化し襲い掛かった。水も高圧で押し出されると武器になり、殺傷能力もそれなりである。その全て

が凶器となりザツハの周りを取り囲むような形となる。

ザツハはその状況を冷静に対処した。自らの場所の座標コードを迷うことなく打ち込むと発動させた。そうすることで相殺を図ったのだ。

属性がそれぞれを打ち消すことも幸いしていた。だから先ほどのシズクのように襲い掛かる水属性を火の属性で打ち落とす。

水と火がぶつかることで早々簡単に水が蒸発することはない。しかし威力は激減するからまともなダメージを受けることはなかった。

どうにか自分の取った行動が成功したことに胸を撫で下ろしながら、ザツハは次の策を練っていた。相手が水の属性の魔法を使うなら…そう思いながら懐から土の属性を持つアルケーエナジーを取り出した。

すばやくエナジーエミッションに付け替えようとしたのだが、それを阻むかのようにイズルが間に割って入っていた。

「十分だ…これ以上は怪我だけじゃ済まなそうだからな…」

ものの数分のこの戦いはこうしてあっけなく幕切れをしてしまった。両者共に不完全燃焼といった様子だったが、戦いを見ていた俊永からすれば別世界の出来事で何が起こっていたのか全く理解できなかった。

イズルは一つ一つの動きを見て分析をしていた。

「さて…どこから指摘すればいいか…」



困った表情を見せてイズルはどこから話したらよいのか考えた。それからそれぞれの問題点を話した。

「シズク：お前の身体能力が素晴らしいことは認めよう。しかしだ…それに驕り高ぶっている部分が未だに拭えない。その証拠にほら、お前も気がついてるだろ？大きな隙を何度も作っている。そうだな…実戦なら二度死んでるよ。水属性の魔法をそこそこ扱えるようだが、強度も威力も見習い魔法使いに毛の生えた程度だ」

「うっ…」

憧れのイズルにそんなことをずばずばと言われては流石のシズクも沈んでしまった。

「それから、ザツハ：エナジーエミッションのバリエーション少ない。それにお前は近接戦闘にまだまだ慣れてないな…これでは武器を落としたりすぐ殺されるぞ？武器ばかりに頼っていないで体術も磨きをかけろ」

「は…はい…」

ザツハもシズク同様に沈んでしまった。あれほどの模擬戦を繰り返してもイズルからすればまだまだらしい。そんな二人を見たところで俊永には何もできなかった。

「いいか。バロは攻守共に出来上がった者がほとんどだ。近接戦闘、遠距離戦闘、魔法、科学を何でもありでな…もう一月したら今度は外へ発掘を兼ねて出るからそれまでに今日言われたところを重点的

に鍛えておくように……」

「あの……先生……俺は？」

俊永は自分にだけ何も話さないのてつい口が出てしまった。

「ああ……お前か……忘れてた。お前は……うーん……そうだなあ……  
……特に何もしなくていいや。今まで通りで……」

「えええ！」

「そういうことだから今日はここまで。後でこの前出した課題を提出しておくように。それじゃあね」

イズルは言いたいことを一通り言い終えてそのままいなくなってしまう。残された三人は痛い所をつかれていたのですぐに動くことができなくなっていた。

## 22話

俊永は一人部屋で毎日の日課である発掘物に触れ瞑想する行為を行っていた。何度も繰り返し返しているうちに俊永には変化が訪れてきた。微妙ではあったが発掘物に触れるとそれが物体なのにどこか意思があるように感じる気がしていた。そしてそれと同時にその物全体が透けて見えるような感覚もあった。

薄っすらとだが、その構造が見えるような…脳内に勝手にイメージが出来上がってしまう感じだな。

一人でそんなことを思いながら、木の棒にも似た万年筆のようなものをいじくり眺めた。

これがどんな目的の物なのかは分からないけど、いずれは分かるような気もする。

自己の能力の開花まで時間は掛かりそうだがそんな確信が心のどこにはあった。こと遺跡物関係に関しては俊永は相性が良かったのかもしれない。だからどこかでそんな信頼関係を物に対して勝手に築き上げていた。

ザッハとシズクの模擬戦を見て少し不安になっていた。自分に比べたら説教されていても二人の方が良かったです。自分は何の役に立つのかさっぱり分からなかった。

以前ならそれでも良かったのだが、必死な二人を目の当たりにして不感症を気取ることはできなかった。どこか心を動かされる衝撃を感じてはいた。

三国の歴史もそうだが、考古学についても勉強を自らの意思で進めていた。これは変化なのだろうか？自分でも分からなかったが自然と学ぶ態勢になっていたのだ。そして今日も深夜までばらばらと教本を手に机に向かった。

イズルは研究室で一人資料を見ながら煙草をふかしていた。近々発掘できそうな現場の調査をしていた。だから三人にも可能な場所をと思ひ難易度の低い場所を選んでいった。

無造作においてある書類の山の中からいろいろ引つ張り出してにらめっこをしてみるが、なかなか決断には至らない。

「どうしたものか…」

未だに実力の伴わない三人に対して現場は速すぎるのだろうかと考えていた。そんな矢先に資料に埋もれている電話が鳴った。

イズルは邪魔な資料を下に落とすと受話器をどうにか探し出し手に取った。

「もしもし…」

呼び出し音七回目が出た電話の主は国選人審査委員会の人間だった。これは国選人の管理、サポート、監視をする部署で国のために働いているか審査をする所でもあった。もしも規定の活動をしていない場合は即解任の対象となってしまう。そしてこれを運営するのも民衆から選ばれた人間だった。特別な力を持っている訳ではなく

民衆の意思を代表しそれが必要かどうかを判断するのだ。

「イズル先生。ごきげんはいかがですか？」

「はい…まあ…いつも通りですが…」

「それは結構。流行病も出やすい季節ですから気をつけてくださいね」

まるで会話の掴みとでもいった他愛もない話題を振ってきた。それから本題に入るのはきつと相手を驚かさないための配慮だろう。

「弟子三人の育成はどのようになっていますか？」

聞きたかったことはこれなんだろう。なら最初からそう聞けとイズルは思いながらも答えた。

「順調ですよ。私の後を継げるぐらいの逸材ではありますから…しかし…どうしてまた今の時期に弟子のことを？育成検査はまだまだ先ではないのですか？」

弟子を持つと、必ず行われるのは育成検査である。それは年末に行われ師匠によつて的確に指導を受けてこれた

か国選人審査委員会が見て判断を下す。莫大な予算を与えているのだから何もしていませんでは済まされない話なのである。

自由に金や権力を使えるのには理由があるのだ。他人以上の努力をし、成しえない能力を身に付けているからその代価として一般人以上の暮らしができる。そしてその努力を怠った者は全てを失うのだ。

「ええ…そうなんですが…つい先日ですね、委員会の中でも面白い意見が出まして、それを元に練り上げて作った法案がありまして…」

「法案…ですか…」

「ええ…弟子同士の能力大会を行おうかと…三国の親睦を深める意味でも良いことだと思いますよ」

そこまで話を聞くとイズルは裏があるとすぐに察した。

「その能力大会は…あなた方が審査なさるんでしょうね」

「勿論です…それを見て弟子もそうですが、その弟子の師に対する評価も判別します。場合によっては年末を迎える前に解任していたたくつもりですが…基準値を満たしていれば大丈夫なのでそう深く考えないで下さい。体育祭みたいなものだと思いますだけはいいで…」

「ふーん…これは義務なんですよね」

「そうです。最近は民衆の意見が厳しくなっています。無駄に多い国選人とその弟子を自分たちの税金で養うのはおかしいと思っている人間も出ているんです。だから我々としても何かしらの形で民衆に働きかけなければなりません。今までなされなかった人員削減も徐々に行われると思います…そもそも弟子を三人まで持てるという制度にも疑問を持っている人が多いですから。まあ…それでも弟子を三人も持つ人はそういませんがね…あ…その…気を悪くしたらすいません。イズル先生のことを話している訳ではありませんから」

電話口から聞こえてくる声に悪びれた様子はさらさらなかった。寧ろ嫌味たっぷりといった感じでイズルも不快感を押し殺していた。

「分かりましたよ…私としても弟子の成果を見ていただかないと申し訳が立ちませんから委員会の意見には従いますよ。お金を出してもらってますからね」

皮肉たっぷりで返すが相手は淡々としていた。

「はい…では後ほど詳しい資料を送りますのでよろしくお願いします」

そこまで話すと電話は切られた。イズルは冷静ではいらなかったらしく受話器を乱暴に置いた。

「まったく…考古学の重要さが分からない馬鹿どもが…」

愚痴をついこぼしてしまった。

## 23話

三日後、電話で話した通りの内容がイズルの部屋まで届いていた。そしてそれを読むなり三人の弟子を呼び出した。

しばらくすると三人はイズルの部屋にいつものように入ってきた。

「何ですか？」

ザツハは相変わらず汚い部屋だと思いながらイズルに用件を聞いた。

「そこにある紙をみてください」

シズクはソファアの上に無造作に置いてある紙を指差した。

「どれのことです？その…紙が…多すぎるんですけど…」

俊永は散らかった書類を見てイズルのお目当ての書類がどれか分からなくなっていた。もったきれいに整頓してくれと言いたそうだった。

「その青い紙。国選人審査委員会から届いたやつだ…」

「あ…これですね…」

たくさん書類の中に紛れた色つきの紙を取り出し、三人で見た。そしてその内容を見るなり目が点になっていた。



「これは…どういふことですか？」

「書いたままのことだ」

「いや…しかし…三国全員の弟子が出ることなんてあるんですか？  
僕は聞いたこともないんですけど…それに一週間後って…」

「私が経験している限りは…そんなことはなかったね…まあ、委員会としては無駄を省きたいそうだからこんな法案が出た。単純な話、弟子を三人も持つ私と考古学が気に入らないことが本音だろうがね…無駄に金を食い尽くす存在だと思ってる」

「そんな…だって考古学は魔法国家にも科学国家にもなくてはならない存在じゃないですか…先人の文明が少なからず未来に繋がるはずです。それにイズル先生だって独自の理論を打ち立てて評価されているはずですが…」

「委員会はそうは思ってくれていない。結果が全てだからね。私自身の能力は置いておいてここ数年考古学が低迷しているのも事実だ。ただただ予算を食いつぶす無駄な存在は潰したいんだよ。それに私が弟子を三人も持ったことにも腹を立てている様子のようだ…」

「それでふるいにかけるって訳ですか…勝手な話ですね」

「そうだ。けど従わなくてはならないのも事実。お前らがそれなりの評価を得ないと考古学部門も危うい存在になってしまう…あいつら…考古学が一朝一夕で成り立つと思っっているのかね…たく…腹が立つのは私も一緒だよ」

「先生…話の事情は大体飲み込みました。しかし…具体的にどうす

ればいいんですか？」

「どうするもこうするもない…他の弟子よりも優れている所を見せるしかない。しかし…時間がないという現実でもある…」

イズルはそもそも今回の法案を自分にだけぎりぎりに教えたのではないかと疑問を持っていた。法案を通して発表するには早急すぎるからだ。

「とりあえず…自分たちにできることを今まで通りにやってくれ」

イズルは席から立ち上がると、これまた無造作に置いてあるジャケットに袖を通し出て行く仕度をしていた。

「ザツハ…そのケース取って頂戴」

「はい…」

皮製の四角い大きなカバンを手渡した。

「先生…どちらに？」

「気分が悪いから外に行ってくる…一、二日は留守にするから自習  
つてことでよろしく」

イズルはそのままどこに行くとも告げずにさっさと出て行った。

## 24話

いよいよ弟子能力検査が行われる日がやってきた。会場は中立国家の多目的競技場だった。ここは自然を利用した構造になっているので、石と木と草で作られていた。そんな自然庭園のような場所に三国の弟子が集められ競技と言う名の審査を受けることになる。

三国全員の弟子を集めても総数百人にも満たない。広い競技場も閑散としてみえてしまうのだが、そんなことは関係ないといった感じでそれぞれが手続きを済ませていた。

国選人はいろんな職種の間がいた。学問が様々な分野に分かれているのと平行しているのだ。それに魔法国家と科学国家では根本的な部分から違うので、学ぶものも違う。

ここに集まった者は畑違いのものばかりなのだが、自分の腕を隠すことなく試せる場でもあったので半数以上の人間は自分とは違った能力や技術を惜しみなく見ることができると期待感を膨らませていた。情報交換は今の時代にはなくてはならないものである。昔は自分の能力や技術を狭い間柄でしか受け継がせなかったのだ。それが文明の進歩に人間の進化に歯止めをかける。しかし魔法国家も科学国家も強協力し合い中立国家を作り上げたことで人間としての進化を踏み出した。

情報を公開し良いものは皆で学ぶべきという精神はこの百年の間で広まった。

「さて…僕が手続きをしてくるよ」

ザツハは受付らしきものを見ると、二人を残して駆けていった。

俊永はこういう場は初めてなので緊張していきよるきよると周囲を見ていた。そんな姿を見てシズクは俊永の尻を蹴った。

「恥ずかしいから止めてよね。びしっとしなさい！仮にもあのイズル師の弟子なんだから」

シズクは堂々としていた。誰も私には勝てないという自信もあったのだろう。そして敬愛するイズルの顔に泥を塗るようなことは絶対にしたくないという強い信念もあった。

周囲の人間もシズク同様に皆自分が一番だと思っているようで、俊永のおどおどしている人物は誰もいなかった。そんな様子を見て自分が一番場違いだということを感じさせられてもいた。

「はい…これナンバープレートと今日の予定」

帰ってきたザツハが二人に資料を手渡すと、三人はぱらぱらとその資料を捲って読んだ。

「え？今日やることってたったこれだけなのか？」

俊永はその内容を読んで驚いた。表紙の次のページには『能力対決』と大きく書かれていた。詳細には近い存在の者たちを一对一で競い合わせる単純なもので、魔法使いは魔法使いと、科学者は科学者と純粹に戦わせると書いてあった。判定は審査員が途中で下すか、どちらかが相手に適わないと認めたら終了となる。

「しかし…どうして戦わせる必要があるんだ？筆記試験や個々の能

力の試験じゃないのか？」

珍しくまともなことを話す俊永にシズクはちよつと驚いた。

「へえー…意外なほどまともな答えね」

「うるさいな！」

「純粋な闘争でこそ真価が問われるのかもね。魔法にしる科学にしる、選ばれた人間は使いこなせてこそ意味がある…しかも苦しい状況でこそ扱えて一人前ってことだよ」

「そんなもんかねえ…」

「国家の危機になった時に真つ先に駆り出されるのは私たちってことなのよ。バロにしてもいつ強大な力を持って国家を揺るがすか分からないし、内部からだって何が起こるか分からない…自衛の組織を作らない変わりに私らがいるのよ」

「ってことは…俺たちは国民のために真つ先に戦わなくてはならないのか？そんなことも聞いてないぞ！」

「先生が言うはずないじゃない…これは暗黙の了解でもあるんだから…人よりも優れた力を持つことはそういうことなのよ。まあ…あなたの能力には大して期待もしてないけどね…」

「全く…次から次と聞いてない話が飛び出すよなあ…」

「ほら！そろそろ始まるみたいよ。えっと…私の出番は…」

三枚目の紙に組み合わせと時間が書いてあった。それを見て三人は動くことにした。

「俊永君、君は最後の方らしいから僕らの様子を見て参考にするといいよ」

「お前ら超人と一緒にしないでほしいな…この前だって参考になるどころか戦慄を覚えたよ…」

「はいはい…愚痴は聞き飽きたわ…何もしないで負けるのだけは止めてよね」

最初の段階で舞台上がらなくてはならないシズクはそのまま待機場所まで移動した。

十時から試験が開始されるのだが、舞台は三国ごとに三つに分けられていた。時間の短縮もあるのだが、それぞれの分野の勉強に集中するためにもこのように分けたのだ。審査員は手に審査過程を書くための書類を片手に持ち場についた。

そして三つの闘技場でそれぞれの審査が始まった。

## 25話

魔法使いは自分の持つ属性を生まれつき持っている訳ではない。神下ろしなる儀式を行うことでその力が目覚める。

魔法とは神の力。神の力を借りることで成せる不可思議な技なのだ。そのためには神と繋がる回路を開かなくてはならない。それが神下ろしである。しかし神下ろしをしたからといって万人が魔法を使えるという訳ではない。

遺伝的要因もその中に含まれているが、神に選ばれし者だけがその力を手に入れることができると言われていた。だから神下ろしの時に失敗する人間もいるのだ。そして五大元素の回路が開かれた後はその属性を本人の意思のままに操ることができる。個人の努力によりその力は強大に、形を変えることも可能となるのだが、無限に使うことはできない。その人間の生命力を削る行為そのものなので精神力と体力を同時に奪い去る。もしも自分の体に見合わない力を使うことになれば、それはすなわち自殺行為となる。だから何もできないで死ぬことすらあるのだ。

一方で科学国家の進めるアルケーエナジーにはそういったリスクはない。そして魔法と似ている部分もある。誰にでも魔法のような力を武器で使えるのだが、個人認証コードが必要となり、これを申請して得られないと使用はできないのだ。そしてこの個人認証コードも体内に埋め込まれるから人体改造といった所では神下ろしにも似ているとも言える。武器を扱うからには凶器にもなるということだから制限や監視をすることは必要である。

認証コードを得られると、それに反応しエナジーエミッションが

使えるようになる。しかも自分の武器は自分にしか使えない。だから他の人間がそれを使おうとしても無理だった。そんなエナジーエミッションは自分なりにカスタムをしたり形を変えたりできるのでこの点も魔法と酷似しているかもしれない。科学の努力を惜しまなければ他の人間が思いも付かない武器ができあがるのだ。

そして蚊帳の外とも思える第三の国中立国であるが、何もできないということではない。この人間は自らの肉体の意義を重点的に考える思考が強い。人間という存在についていろいろ研究しているのだ。人間の隠された潜在能力についてや、五大元素や四大元素との関わり、生身の肉体での能力開発、いろいろ試していた。元々人という生物が持っている力を突き詰めて、自らの糧にしていた。だから体術において他の両国とは比べ物にならない位の技をもっていた。

そんな感じでそれぞれが持ち味を出すことで刺激し合い、成長を促進させていた。



## 26話

「あら…シズクさんじゃないですか？」

待機場所から離れた場所にいたシズクに一人の女性が話しかけてきた。シズクより少し年上で気品のある顔立ち、長い髪は尻に届きそうだった。顔だけ見れば美人なのだが、口調は上から目線で性格にどこか問題がありそうに感じられた。

「あなた、誰？」

「嫌だわ…五年前位でしたが魔法国家で行われた魔法議会でお会いしているはずですが…」

「魔法議会？あなた…どこかの名家の人間？」

魔法議会は魔法国家の名のある魔法使いの一族が集まり意見交換をする場である。当然名家の出であるシズクも連れてこられていたのだ。

「水無月ヒカルです。父は言わずと知れたあの水無月カズチ…」

その名を聞いただけでシズクは嫌なことを思い出した。そういえば五年前に魔法議会で集まった時に高飛車でよくしゃべる人間がいたなと…しかしあまりにもうるさいから無視して聞かないふりをしていたので名を聞くまで思い出せなかった。

「そうそうあなたのお家大丈夫？あくまで噂ですけど、霜月家はいささか魔法の力が遺伝的に薄まっているって話を聞いたものですか

ら…」

そんな言葉にかちんときたのかシズクも突っかかった。

「何それ？家の父があちこちに愛人をたくさん作ってるって聞いた訳？」

その目つきは恐ろしいほどの迫力を持っていたが、天然で空気の読めないヒカルには関係ないようだった。さらっとそんな話を流し自分勝手な話を続けていた。

「何もそこまで話してませんわ…それよりもあの水雲イズルの弟子になったそうですね。それこそが愚の骨頂です…」

「はあ？何であんたにそこまで言われなきゃならないの？」

「アールキオロジストなど何の役に立つんですか？所詮はゴミ漁りみたいなものでしょ？魔法使いは自らの分野である魔法の能力を高めなくてどうするんです。まあ…あなたのことですから魔法も中途半端でそちらの道に進もうと決めたのかもしれないがね。それにあの異端児とまで呼ばれたイズルの元に入っているなんてどうかしてますわ…一緒に魔法国家の秩序を乱して欲しくありませんわ」

シズクの怒りは頂点に達しそうだった。お家柄とか関係なく目の前の女をぼこぼこにしたい気持ちでいっぱいだった。しかしそれを現実でやってしまえばそれこそ弟子失格となってしまう。ぐっと堪えて耐えていたのだが、ヒカルは追い討ちをどんどんかけてきた。

「私は大魔法使い長月クウヤ師の下で弟子をしています。あなたの師とは大違いなぐらいの人格者で高度な魔法も扱えますわ。水雲イズ

ルなんかの元で学んでいては魔法そっちのけで何も得られないのでは？」

「大きなお世話だ。お前に私の何が分かるんだよ」

「仮にも霜月家…十二月士じふごにげっしの名家のひとつでああなたは長女でもあるんですから自覚を持ってと言うことです。魔法国家でも重要な位置にありながら自由奔放な道を選ぶなど裏切りにも等しい行為ですわ…あなたはどう思っているかは知りませんが、ご家族が嘆いていることでしょうね」

十二月士は古くから存在する魔法使いの名家であり、多大な影響力を持つ系譜でもあった。だからその血筋は濃く、受け継がれる能力も一般人を遥かに凌駕していたのだ。そして血筋を根絶やしにしてはまずいので、いろんな形を取って家を守ってきた。

そんな中でのシズクの行為は正に反逆罪のようなものであった。だから安直に自分の道を決めてしまったシズクをヒカルが責めた。

「しかし…あなたのような無粋で品行の悪い方がこのまま宗家の顔になるのも霜月家の恥というもの…それなら潰れてしまった方がよろしいかもしれませんね」

シズクはぎりぎりの状態を保っていたが、流石にここまで自分のみならず家のことまで批判されて堪えてはいられなかった。飛び出す覚悟で体全体に力が入っていた。

「上等だよ！お前にそこまで言われたら私だってもう引き下がれない。身の上をわきまええず愚弄するのなら覚悟はできているんだろくな！」

「慌てなくても…ふふふふ…ここであなたとの格の違いを教えますわ」

そう言っつて闘技場を指差した。そこでシズクは理解した。自分の相手がこの女だということ。

「嬉しいね…ここまで挑発してもらえると俄然やる気が出てくるっ  
てものだよ」

シズクは飛び出しそんな気持ちを抑えて、後の楽しみに取っっておくことに決めた。今ここで暴れた所で自分には何の利点にもならない。しかし公の場でそれができるのならこのにつくき相手を完膚なきまでに叩きのめし、能力も認められ一石二鳥なのである。

瞬時にそんな計算が頭の中でできていたのでまだ自分は冷静さを保っているのだと改めて感じていた。

## 27話

闘技場では二度目の開戦が繰り広げられていたが、お互いにその様子など目に入っていないかった。相手を見つめあい威嚇しているかのようだった。

そして三度目の戦いが終わった時に運命の時は訪れた。シズクが他人の目を気にすることなく暴れられる時間が来たのだ。全身には力が入り、頭の中には相手をどのように倒してやるうか様々な思考が飛び交っていた。そんな思考の先には自分が相手をぼこぼこにしているイメージしかない。戦略や相手の動きを読んでの攻撃のパターンなど組んではいなかったのだ。

戦闘においてイメージはかなりの重要性を持つ。相手の動きに対しての幾つものパターンの返しを用意しておかなければ自らを危険な状態に晒してしまう。力や能力も大事だが、所詮は扱うのはその人間の思考なのである。だから思考を読んでこそ一流であり、あらゆる危機から身を遠ざけられる。しかし感情に身を任せてしまったシズクはそれを完全に怠った。だから全身に力が入りすぎ、怒りが体を突き動かす。そんな中で開戦の合図は我を忘れた状態で出された。

押さえ込んだ力を一気に開放する。シズクの周囲から水が勢いよく噴き出すと、ヒカルに向かって襲い掛かった

。まるで蛇を思わせるかのように柔らかく不規則な動きを見せた。そしてヒカルはそれを全て見切っていた。だから水と言う名の生き物がヒカルの体を捕らえることはいつまで経ってもできなかった。空を切り、地面にぶつかり、互いにぶつかり水しぶきを巻き上げながら空しい動作を繰り返していた。

ヒカルは口だけの女ではなかった。その動きには鍛錬が必要であり、経験も必要だった。そして遂に反撃に回った。指先に意識を集中させると、炎の弾丸を三発放った。これは以前シズクも見せた水の弾丸と同じ要領で比較的簡単な魔法である。しかし高度な技術を持つ魔法使いになればなるほど単純な魔法でも違いがはつきりとする。圧縮する力をより大きなものにできればその威力は二倍、三倍にもなる。大魔法使いになればこんな技でも半径数メートルを吹き飛ばすことができる。

三発の赤い弾丸は水の合間をすり抜けシズクの体に迫っていた。

「くっ……」

攻撃にばかり頭がいつていたので、その先まで読めない。ここまですべてが相手に攻撃をかわすことも想像できなかったのだ。

自分を守るための防御壁を水で作ることで精一杯だった。しかしシズクにはまだまだ余裕があった。それは水と火では相性の関係上でも自分の方が勝っているという安心感のよいうなものがどこかにあったからだ。だがシズクの予測とは裏腹に防御壁はあっさりと貫かれる。

高密度に圧縮された炎の弾丸は薄い水の壁などあっさりと蒸発させながら進路を変えることなく突き進んだのだ。慌てたシズクは防御壁を瞬時に四枚、身体すれすれに追加する。

一枚は張る前に破られ、二枚目、三枚目を順に貫く。四枚目に到達しかけた時によろやくその威力を半減させられた。

一瞬止まったかのように速度が急激に落ちたことで、どうにかそ

の弾丸を肉眼で確認することができた。今しかない。そう判断して勢いよく弾丸よりも前に飛び出すと三発の攻撃を避けられた。

「ふう！」

その直後シズクの背後で爆音が響き渡った。避けた炎の弾丸が的を外して外壁にぶつかったのだ。その威力は激しく厚さ数メートルの壁がえぐれていた。もしも直撃していたら身体はばらばらになっていたのかもしれないことを物語っていた。

シズクはそこで初めて自分が浅はかだったことに気づいた。こいつは…想像以上の実力の持ち主だ、口だけじゃないんだと。

気持ちを改めようとしていたが、ヒカルはそんな間すら与えない。先ほどの攻撃と同時に距離を一気に詰めると、四層に張った水の防壁をまるで存在しなかったかのように炎の壁でかき消す。無防備なシズクの姿がはっきりと見えるとにやりと笑った。

一方でシズクは目を大きく見開き自分の魔法がこんなにも脆いかと自信を失いそうになっていた。そしてヒカルはシズクのお株を奪うように前蹴りを放ち突き飛ばした。その攻撃の重さをシズクは直に感じ再び驚いた。体術でも実力の差がかなり開いている…

大きく態勢を崩したシズクに反撃の余地はない。経験のあるものなら何手か先を読んで不測の事態に対応できるのだが、シズクはまだその組み立て方を知らない。ただヒカルの追撃を許すことしかできなかった。

「煉獄！」

たった一言の詠唱で炎の竜巻がシズクの身体を包み込むと、ずっとんという重低音と共に炎柱が天を突くように上がった。そして熱風と爆風、爆煙が観戦者に向かって流れ込み、その魔法を食らった張本人の安否を気遣わざるを得ない状況になっていた。

まさか…消し炭になってしまったのではないだろうか？審査員すらもそう思ってしまったが、最悪の状況だけは避けられていた。闘技場の中央にはシズクの姿がかすかに見えていた。

蒸気を身に纏いながら大きく肩で息をしていたが、身体に以上は



なかった。属性結界防御というもので、自らの属性を体内から瞬間的に張り巡らせることで対属性を元素レベルで相殺する効果があった。しかしこれは万能ではない。効力時間は短く範囲も狭い。そして魔法能力が相手の方が圧倒的だと相殺できないぐらいの物量の相手元素にやられてしまうのだ。

「ふふふ…そうでなきゃ…半人前以下ですわ」

シズクがそこにいることが当たり前とばかりにヒカルはシズクの様子を伺った。そして追撃をするわけでもなくゆつくりと近づいた。

「属性結界防御は魔法使いの基本中の基本…私の焰ほむ式か式し式きぐらいの魔法は弾いてもらわないとこれから先の楽しみもなくなるというもの…それにしても…雑な魔法ばかりですね。もつと繊細なものはないんですか？」

呆れ顔でそんなことを要求してみたが、シズクに怒り狂う余裕はない。頭を切り替えて相手をしなないと大怪我では済まされなさそうだった。

「あなたの実力は認めるわ…私もあなたのこと見くびっていたからね…伊達に長月クウヤ師の名に恥じないものを持っている…」

「あらあ…そんなに素直に褒められると照れますね。けど…だからといって手加減はしませんけど？」

「そんなのこつちから願ひ下げだわ。私はねえ…見下されるのと同情されるのが大嫌いだからさ…」

「口だけは達者のようね。なら…全力でやらせてもらいますけど？」

「じつちもね」

今度はヒカルから仕掛けた。両手を左右に大きく広げると、手の平に力を込めた。

「焰式式…焰玉！」

両方の手のひらからは無数の真っ赤な球体がプラズマのように飛び出し、シズクに向かって一斉射撃された。誘導段のようにシズクに向かって湾曲しながら突き進む。先ほどの炎の銃弾とは比べ物にならないぐらいのエネルギー出力で、球体は渦を巻きながら全てを無に返そうとしていた。

「くそお…こんなところで…こんな上級魔法を…嫌味にも程があるつての…」

シズクは下半身にぐっと力を込めると身構え、迫り来る圧倒的な力を目の前にしても怯まない。神の力をより一層引き出すための詠唱を始める。

「水の理を統べる我が契約せし者よ…我が身を依り代とし…我が血を糧とし…万物の力の源の力を我に与えよ…」

体が青白く光だし神の力を自らの体に引き下ろす。魔法の詠唱は二つに分けられる。一つは突発的な力を引き出す短言詠唱。そしてもう一つは持続性のある、より強大な力を引き出す長言詠唱である。これには得意不得意が存在するので、ヒカルは短言詠唱を得意としていた。一方でシズクはどちらが得意とかは言えないのだが、長言詠唱をよく練習していた。ちなみに実戦は初めてである。

「その力は姿を、形を我が意のままとし…目の前の敵を打ち落とす…」

時間にして十数秒であるが、戦闘において相手に与える時間が長いほど寿命を縮めるといものだ。そして詠唱が完成したのはヒカルの攻撃が触れるか触れないかのところであった。最後の単語を勢いよく吐き出す。

「アクア…インペトウス…スクトウム！」

そのワードをきっかけにシズクの前にずらつと並ぶ透明な水の盾ヒカルの放った全ての攻撃とぶつかり合うとその攻撃が無効化されるように飲み込まれ消えてしまった。

「くっ…」

ヒカルの表情が険しくなりその魔法の力を認めていた。あの水の

盾はいつものような柔な防御壁とは格が違う。神の力を直接下ろさなくとも成せる小手先の自身の能力程度とは訳が違い神の力そのものなのだ。これが魔法の本質…それを今初めて実戦で出した。

全ての攻撃を吸収した最強の盾はこれだけでは終わらない。これは呪文詠唱の中のワードにも存在しているが攻撃の盾なのだ。

「カエルレウス・ロサ・ケンティフォリア」

シズクの詠唱と共に水で出来た青い薔薇が咲くと、その花弁が攻撃物に変わる。百枚もの花弁がヒカルに向かって高速で襲い掛かったのだ。

闘技場を破壊しながら突き進む百もの攻撃は正に予測不可能だった。ヒカルも属性結界防御は張れるが、圧倒的な物量の差でそれも押しつぶされてしまうのは予測できた。

シズクが長言詠唱をできることを知らなかったとはいえ相手の力量を見誤ってしまったのかとも少々反省はしていた。そんなことを考えられるからまだ余裕はあるのだ。

「焰参式…火之迦具土神」

迫り来る無数の花弁に対しての對抗策を発動させる。それは最高温度の炎の一刀の攻撃そのものだった。全ての原子を気化させる七千度を超えるその熱は、無数にも思えた花弁をことごとく蒸発させながらシズク本人に直接襲いかかった。

攻撃は最大の防御。そう証明したかったのかもしれない。ヒカルは攻撃に重点を置いていたのだ。しかも出すとは思わなかった最大

攻撃をさらけ出ししてもシズクには負けたくなかった。

「流石…名家の出だ…これだけの攻撃とは…」

しかしシズクも負けてはいない。実戦経験はなくとも積み重ねた努力はそこらの魔法使いに負けてはいない。更なる力を加えることを決断した。その身がおかしくなっても構わないこいつにだけは負けたくない、私は強い魔法使いなんだという心構えで目の前の膨大な圧倒的な力の前で魂から叫んだ。

「フォルティッシムス・アクア・ランス！」

シズクの持つ最強の一撃であるこの魔法を開放した…かのように思ったが、シズクの底力はそこで尽きていたのだ。

「う…ああ…」

がくん…

魔法を扱うものに不可欠なあらゆるエネルギー源が空っぽになってしまっていたのに本人が気づいていなかったのだ。精神力、生命力その他もろもろが初の実戦で本人の予想とは裏腹に凄い勢いでそぎ取られていた。

だから…リミッターオーバーで本人の意思や力とは無関係に不意に意識を失ってしまい木偶人形のように地面に倒れた。  
あれほどヒカルを倒すと心の中で決めていたのに…

それを見た審査員はすぐに終了の合図を出す。と同時にヒカルも「浄化！」と命ずるとあの膨大な力はなかったかのように荒れ狂った姿を一瞬で消してしまった。

しん…と静けさがそこには響く。

「……………」

爆音につぐ爆音だっただけに沈黙がより一層引き立ってしまった。ヒカルは余力を残して余裕の勝利という感じではない。後味の悪い感触と相手が何を出そうとしていたのかとても気になっていた。

それでもそこに立っていたのはヒカルである。ヒカルの思惑とは関係なく審査員はヒカルを評価し採点を付けていた。

「何ですか…この歯切れの悪さ…」

破壊しつくされた闘技場に一人立っているヒカルは空しさを感じていた。切り札を見てみたかったという気持ちでいっぱいだったことと、完膚なきまでに叩きのめしたかったのが本音だったからだ。

戦闘中に諦めることを一度もしなかったシズクはイラつく存在以外の何者でしかなかった。自分の圧倒的な力を見たら誰もがひれ伏すか、逃げるという行動を取るのだから。

「くそ…霜月シズク…今度こそは…」

そう言い残して闘技場を去っていった。

各ブロックでそれぞれの戦いが行われていた。

ザッハの出番ももう間近だった。緊張感はたいしてなかった。科学者という立場からすると互いに技術を見せ合えればいいのだという安全策を互いに取っていると身勝手な思考が存在したからかもしれない。

前者の戦い方を見てもそれを表すかのように相手の作り上げた武器が優れていて勝ち目がないと分かると負けを認めていた。

「まあ…根性論はここにはないからな…」

そんな感じでザッハも認めてはいた。力の差を感じて無謀に突っ込むことは科学者としてはあるまじき行為である。玉砕覚悟というものは無意味な死でしかない。そこに勝利の確率が存在しないなら逃げるのが得策なのだ。

「さて…」

自分の番になった時にいつものように自然体を装ってはいた。そして闘技場に上がると知った顔がそこにはあった。

「シーク…」

あまり驚くことをしないザッハでもこの人物を見た瞬間は自分の気持ちを隠すことができなかった。

「んん…あれあれ？…君は…えっと…ザツハか？」

対峙する人物は名をシーク・ドラルドと言い、ザツハとは違い科学国家での家柄はあまり良いものではなかった。年齢は十八歳でザツハの一つ上なのだが飛び級に次ぐ飛び級で学問は十三歳の頃に全て済ませていた。だから中立国家にはたったの一年しか在籍せず科学国家に戻るのも早かった。

金髪の長髪がなびき、前髪が長いので目が隠れてしまっていた。着ている服はあまり気にしないようで科学者特有のワイシャツにスラックス、その上に白衣といったお馴染みのもではなく、ジーンズに白い首の伸びたTシャツ、靴ではなくサンダルを履いていた。まるで部屋着のような格好でリラックスしているかのようにだった。

「まさか…あなたが…誰かの弟子になったのですか？」

こんな場に出てくるはずのない人物だけにザツハの口調も激しくなる。

「そうだけど…」

「あなたは…誰かの下につくことを何より嫌ってたじゃないですか？…どっという風の吹き回しで？」

シークは天才であるがゆえに奇人とも捉えられていた。人付き合いが恐ろしいほど苦手で、些細なことでも気になったことに夢中になると数週間寝なかつたりもした。

「ん…と…レクスト教授が…どうしても言うから…」



「そんな単純な理由ですか？」

「だってさ…好きなことだけしてていいって…何でも揃えてくれた…」

まるで子どもが喜ぶことをしてやっているようにも思えるが、シークに限っては効果絶大であった。そんな子どものような男はザツハを相手にしようとするのに無警戒そのものであくびをしていた。

やる気があるのだろうか？ザツハはそんなことを考えたが、目の前の男は仮にも天才。侮ることはできなかった。しかも個人的にもコンプレックスを感じてもいた。

ザツハも成績は優秀、それなりの地位を築き上げてきたが、所詮は凡人であり努力の結果にすぎなかった。しかしシークは天才。何もなくても何でもできる。しかも凡人がいくら努力してもたどり着けない場所というものがあるのだ。常に付きまとうのはシークに比べたら…彼には適わない…の言葉ばかりだったからザツハに限らず、そのほかの優秀な子どもたちの成すことは霞んでしまうのだ。

「レクスト教授も思い切ったことをしましたね…科学国家史上類を見ない天才を飼い犬にするなんて…」

「飼い犬？随分な言葉だ…でもそれは…君も同じじゃないのかい？」

感情がないようにも思われたが、そんなことはなかった。シークは挑発気味のザツハの言葉にすっかり反応した。

「いえ…僕は…自分の意思で弟子になってます。でも…あなたは違

う。ただの気まぐれじゃないですか？しかもエサ付きで…それを飼  
い犬と呼ばずして何なんです？」

「なるほど…それも一理あるな…でも…今はそんなことどうでもい  
い…さっさと始めようか」

そこで会話は絶たれ、開戦を要求した。そして科学者の弟子二人  
は見つめあつとすぐに動かなかつた。

### 31話

ザッハはシークがどんな武器を持っているのか検討もつかないの  
で、迂闊に攻撃するのは危険だと思っていた。相手の出方をみてか  
らそれから動くころそう考えていたが相手も動く気配がなかった。

どうする…自分から仕掛けるか？しかし…相手は天才。何を持っ  
ているのか…

力の予測が全くつかない相手に悶々としていると、

「あのさあ…僕から攻撃するよ。だから防いでくれよ」

あっさりとしークが攻撃宣言をした。それにはザッハも戸惑った。  
しかしそのことが嘘じゃないといったようにシークは尻ポケットか  
ら携帯電話のようなものを取り出し開いた。そこでもう一度髪の間  
隙からザッハの目を見た。

「覚悟はいいかい？なら…行くよ」

細かい動きでボタンを連打する。するとザッハの立っている大地  
がいきなり盛り上がる。硬いはずの地面が粘土のように柔らかくな  
った。

「何！」

不安定な足場ながらもその場所から離脱をしながら自らの武器を  
取り出し叫ぶ。

「BG1020」

すると銃口から炎のレーザーがシーク目掛けて飛び出した。以前のザツハの武器は座標コードを打ち込まなくてはならないタイプだったのだが、改造を施し本人の声紋を認識させ声での座標確認ができるようにした。そうすることで時間を大幅にカットできるから展開も広がるのだ。

しかしシークは慌てることなくかたかたと携帯のボタンを打ち込んだ。

するとシークの目の前に空気を圧縮した見えない壁が出現し炎を防いだ。

「何！」

ザツハはただ驚くことしかできない。同時に二つの属性を操ることもそうだが、携帯をいじるだけでアルケーエナジーが出現していることがおかしいのだ。武器はどこだ？これでは魔法ではないか？そう感じていた。

「さあ…続けていくよ」

携帯を打ち込む速さが増してくる。しかも複数の座標を的確に打ち込んでいく。

シークが何をしているのか分からない以上、ザツハは下手に動けなくなってしまう。そんな迷いが生じている内にザツハは追い詰められていた。

自らの側に不意に現れる炎の塊。全てを斬ってしまいそうな高圧水流。そして極めつけは大気中の元素を使って行われる水素爆発。全ての属性のアルケーエナジーを使いこなしていたのだ。

直撃は免れてはいるものの自分の周りの座標を守ることで精一杯だった。攻撃に転じることもできずに亀のようになっていた。しかも異なる属性をいろいろ使われては守る方も厳しい。偽りの虚勢がはがされるが如く徐々に守りが壊されていく。

それでもザツハは諦めない。頭の中で座標の計算をしながら属性を変えた防御を繰り返す。相手の属性を読みながらそれに対応した属性で相殺をする。ぎりぎりのラインを保ちながらもどこか突破口がないか探し続けていた。天才に勝るものはどこかあるのだと信じていた。

しかし相手の方が一枚上手だった。ザツハの逃げる方を完全に読みきり先回りのように追撃を仕掛け、寸分狂わぬ座標指定によって追い詰める。

「三手先で…チェックメイト…」

ザツハが二つの攻撃をどうにか、かわしたその先に隠れていたもう一つの攻撃。

爆風で視界を殺され、張った防御膜も壊され僅かに開いた穴を的確に狙っていた。直線状に飛び込む氷の弾丸。大気温度を調節することで水属性での可能になる新たな技。言わば二つの属性の融合である。

飛礫は岩のように硬く、数発がザツハの胸にぶつかり呼吸を一瞬

止めた。

「かつ…」

飛礫の大きさが小さかったのが幸いしたのか、ザツハの胸骨は折れることはなかった。しかし激痛が全身を駆け巡り意識はあるものの倒れるしかないのは明らかだった。

「くそ…」

それが理解できるだけに腹を立てていた。仰向けに倒れ青い空が視界に飛び込む。この時はなぜかはつきりと空が見えていた。雲ひとつない空を鳥が一羽泳ぐようにすつと飛んでいる。

「ん？」

それと同時に何かに気が付いた。

### 32話

「あれは…」

審査員もその状況を見て早急に止めようと判断したのだが、ザッハはすぐに立ち上がり続行を要求した。

「僕はまだ大丈夫です…あと少しだけやらせてください」

本人の意識もはつきとしていて出血も見られないので、審査員はそれを許した。その時点でザッハは千載一遇の機会を手に入れたとその時感じていた。もしもこのまま止められていたなら何もできずに終わっていた。まだ運がある…

「君もしつこいな…いい加減負けを認めてくれよ…」

「嫌ですね。僕は見た目と違ってしつこいんですよ。それに…何も見せてないじゃないですか！」

話しながら座標コードを打ち込んでいた。ザッハは座標コード認識を二パターン用意していたのだ。

シークの立つ地面が鋭い槍のように変化すると襲い掛かる。

「くっ…」

それに対してシークは地面の水分を抜き去り、地面の硬質化を無効にしていた。槍のような姿をした土はさらさらと崩れて大気を流れる。

一瞬でもいい。シークの気が逸ればそれだけで十分。ザッハの  
思惑はまだ先にあった。

「RH5029」

今度は音声認識で座標を指定する。すると上空に向かって赤いレ  
ーザーは勢いよく放たれた。

シークにはザッハが何をしたのか粉塵でよく見えない。しかし直  
後に何をしたのか理解した。上空で聞こえる爆発音。ザッハの放っ  
た攻撃が何かにぶつかったのだ。そしてばらばらと地面に部品によ  
うなものが降ってきた。

「流石…天才…まさか武器を上空に隠しているなんて思いもしませ  
んでしたよ。携帯の遠隔操作で上空に仕込んだ武器からエナジーが  
放出されていたんですね。無音でしかも全身鏡のようにコーティン  
グしているから気づきもしませんでした。でも…仰向けに倒れたお  
かげで気づきました」

「へー…」

「一瞬でしたが鳥が一羽だったのに二羽に見えたんです…反射した  
んでしょうね。でもそれがなければ全く気づかなかった。物体を無  
音で浮かせる技術など聞いたこともないから…」

シークの技術の謎解きをするとシークは感心して拍手をした。

「うん…凄い…そこまで理解できたのは君が初めてだよ…まあ…運  
があったっていうのもあったけど、それも実力のうちって言うからね」



「なら…負けを認めますか？武器がなければもう手も足も出せない…あなたは肉弾戦っていう感じでもないですし」

「いやー…まだまだ…だって…君は半分しか正解してないからね」

「え？」

するとポケットに隠した手で携帯を操作し座標をしていた。その動作にザツハは全く気が付かなかった。

だから不意に襲い掛かった水素爆発に対応もできない。

威力を抑えたその一撃によってザツハの意識は刈り取られた。そして今度は意識のないままに空を仰ぐことしかできなかった。

「残念だなあ…空だけじゃなく地面にも隠していたんだよ…そうだなきゃ四大元素をあんなに使い分けられないって…」

シークは二つの携帯を持ち操作していたのだ。実際に見せていたのは一つの携帯だったが、もう一つはポケットに隠していたので見えないように操作していた。

### 33話

俊永は二人が負けたことを知った。その話を聞いても信じられなかった。学園でもトップクラスの人間が二人もいたのにそれを上回る実力の持ち主が更にいるなど想像もできなかった。しかしそれだけ自分たちが未熟だということも知った。

だから二人のように技術も能力もない自分はきつと無様に敗北するのかもしれない。そんな風にマイナス思考になっていた。

何もない自分がここで無意味に虚勢を張ったりしてもしょうがないので、策もないままにいつものように闘技場上がった。

目の前には同じ中立国家出身の女がいた。名前を不知火綾香しらかい あやかとい、い、どうも俊永のことを知っているようだった。俊永よりも若く見えるが弟子なら年齢は俊永と同じがそれ以上だということであった。身長は低く、黒髪の長髪で目は大きく美人というよりも可愛い系の顔だった。

「こんにちは…俊永君。お久しぶりね」

「え？つと…」

覚えていない俊永は記憶の糸を手繰り寄せこの女性が誰なのかを必死に考えていた。しかしいくら考えても符合する人物が思い浮かばない。そんな俊永とは対照的に綾香はにこにこして機嫌がよさそうだった。

「綾香よ…不知火綾香…」

相手が名乗ってくれたのに俊永はまるでぴんとこなかった。分からない。いつの知り合いなのだろうか？　いつそ尋ねた方が速いのではないかと思っただが綾香の態度が一変し凍りつく。

「まさか…覚えてない…の？」

今まで春のような優しい雰囲気が漂っていたのに、俊永が覚えていないことを何となく察すると真冬の猛吹雪のような冷たさを感じた。

「ははははは…いやだー…俊永君…」

声で笑っていても顔は笑っていない。殺気に似た赤いオーラが綾香の背後から沸きあがっているようだった。

「死にたいのかしら…」

ぼそつとそんな一言を話すものだから俊永の背中が凍りつく。

「いや…その…」

俊永がおろおろしている内に審査員が闘技場中央に立つと、実戦開始の合図を出した。

「え？」

気持ちの整理もできないうちに目の前の女性と戦う羽目になってしまった俊永は、どうしたらいいのか分からなかった。

「あの…」

いつの知り合いか聞こうとしたが、相手は完全な戦闘モードに入っていたようだ。挨拶とばかりに迂闊に近寄る俊永の前髪を回し蹴りでかすった。

「うう…」

この時点で話し合いは無理だと決断した。俊永は逃げることの許されない状況に必然と追い込まれた。

「過去の話は…終わってからにしましょうか。でもね…私…俊永君が覚えていないっていうのは…ちよつと腹が立ったかな？痛いことしちゃうかもしれないけど…許してね」

にこにこしているが絶対に自分を許していないと思った。

中立国家の人間は魔法も科学も使えない者がほとんどである。だから体術が秀でている者が多い。人体の構造を知り尽くし、力の流れを感じ、自然とも調和を図る。男女の違いは大してないから綾香のような女性でも相当の実力があればのし上がれるのだ。そしてここに立っている以上はそこの人間に負けるような力ではなく、恐ろしい力を持っていることには違いない。俊永がそのことに気づいた時には、もう綾香は動いていた。

### 34話

「あ…」

しなやかな低空移動で足音すらしないその動きはまるで猫のようだった。俊敏さと柔軟さを兼ね備えた獣そのものである。

不意に俊永の目の前に現れると、足腰から力を連動させ全身の力を加えた掌を腹部にめり込ませた。

「おう！」

背中にまで力が貫通する。それは単純な攻撃では有り得ない体感で、体内に存在する氣を利用した発勁のようなものだった。

見た目はかわいいのに達人顔負けの攻撃をする少女の前に俊永は倒れないように必死だった。意思とは反し膝が、がくがくしていた。

「倒れないだけ凄いわ。流石ね…」

どうも綾香は俊永のことを高く評価しているらしく、尊敬の念を込めてそんなことを口にした。しかし俊永は踏みとどまることで精一杯であり、綾香の会話など耳に入らなかった。

綾香は再度襲い掛かり、鋭い前蹴りを放った。しかしそれは空しく空を切った。俊永がどうにか見切ることに成功したのだ。避けやすい前蹴りだったことも幸いしていたが、綾香の動きにどうにかついていけていた。

それを見て綾香は好敵手だと喜びながら攻撃の手を緩めない。

左右に氣を込めた掌底を繰り出し、その合間に横蹴り、回し蹴りも加えリズムを読まれないようにしてみた。

俊永はお世辞にも格好良く避けているとは言えなかった。だが、攻撃がまともにも当たることはなかったのだ。かすめたり、先が当たるだけで致命的な一打をもらうことはなかった。

俊永は目が良かった。何も取り柄のない彼が先天的に持っていた武器と言えよ今のところこれしかなかった。一度見た相手の動きに同調して不恰好ながらにそれを先読みに繋げていたのだ。とはいえず馴れた武人からすればまだまだの動きにしかなかったが、付け焼刃の状態にしては上出来と言えるところだった。それに俊永本人もどうしてここまで自分が動けるのか理解できていなかった。

たくさんの攻撃を繰り出しても綾香が息を切らすことはなかった。無駄な動きがなく余計な力を加えていないのと普段の鍛錬の成果で持久力もかなりあったのだ。

逆に戦闘経験の全くない俊永は緊張感の漂う中、避けることだけで大幅に体力を消耗していた。

「はあ…はあ…」

心臓が激しく動き、肩で大きく息をして、汗をびっしょりとかいていた。

「俊永君…まだ思い出さない？私とのこと…」

そこが大事らしく綾香は一旦動きを止めて再度確認を試みた。し

かし返ってきた言葉は優柔不断の俊英らしく歯切れが悪い。

「あの…その…よく…覚えてない…」

「あつそ…」

もはやそこまでだと綾香は判断し、それ以上しつこく聞くことはしなかった。

「次は骨が砕けることになるかもしれないけど…許してね」

そんな怖いことを話すと、先ほどまでの小手先の攻撃を止め、重圧感のある構えを見せた。どっしりと重心を下に置き、両足を大きく開くと半身の状態で俊永を見る。

武道を徹底的にやりこんだ人間の構えはそれだけで威圧感を感じる。綾香がそれだけの経験と能力を持っている証拠でもある。

一撃必殺。それが実現される時でもあり、まずい…俊永がそう判断した時には遅かった。

先ほどの猫のような動きとは違い今度は肉食獣の動きそのもので襲い掛かったのだ。

力強く獲物に一瞬で飛び掛る俊敏さ。大地を蹴り上げた瞬間に地面はえぐれていた。綾香が視界に入りこんだ時には、鋭い肘が刺さるように的確に急所のみぞおちを捕らえていた。

「があ…」

まともに食らってしまった俊永は、なすすべもなく崩れ落ちその

まま動かなくなってしまうた。それを見た審査員はすぐに試合を止めた。

「私のことを迎えに来てくれるって約束忘れたのかしら？」

悶絶していた俊永を見下しながら過去の話を持ち出したが俊永は覚えていなかった。

「その…いつの…話？」

ふるふると震えながら綾香に聞いたが、覚えていないだけに綾香は不機嫌だった。

「やっぱり覚えてないのね。私はずっと信じてたのに…待ってたのに…いいわよ。別に…また別の機会に思い出してもらうから…弟子同士これからも会おうことも多いでしょう？ふふふ…じゃあ、またね。俊永君…」

そこで力尽きたのか気絶してしまった俊永を残して綾香は、不適な笑みを浮かべるとその場を立ち去った。これで水雲イズル陣営の三人目の敗北者が出てしまった。



### 35話

「それで…全員が負けたと…」

能力検査が終わりイズルの研究室を訪れた三人は沈んだ様子で結果報告をした。

きつと怒られるのだと覚悟を決めて、それぞれが神妙な面持ちでシズクの顔を見れずにいた。そんな三人をねぎらってか、シズクは感情的にもならずあっけらかんと答えた。

「気にするな…どうせ私を潰しかかっているだけだから…」

「それは…先生が以前話していたことが事実だということですか？」

「そうだな。能力検査は表向きの社交辞令…本質は邪魔な分野を処分する対象に仕立て上げるためのきっかけを作るものなんだよ」

「やはり…僕たちの分野が狙われたと？」

「ああ…お前らが対戦した相手を見ても一目瞭然だったからな」

新しい煙草の箱を机の上から手に取ると、ぴりぴりと包装を破った。銀紙をはがし、とんとんと軽く叩いて最初の一本を取り出すと、口にくわえマツチを擦った。

「お前らが対戦した相手は、弟子の中で最強と呼ばれた者達だよ。普通はこういう検査には近いレベルの者を競わせる…そうしなければ公正さもないし、検査のしようがない。調べる前に圧倒的な力の

差を見せ付けられ終わってしまうからな。」

ふつつと大きく煙を吐き出した。

「三人が三人ともこういう組み合わせになっていること事態が不自然。潰しにかかっているということだ。大怪我をさせてもいいし、最低点を付けられる理由もできるからな…まったく…審査委員会も自分たちが何でも決定できると、権力を持っていると勘違いしだしているから困る…」

「でも…結果負けたんですよ。やはりそれなりの処罰が下るんじゃないんですか？」

シズクは心配で仕方がなかった。自分の目指している考古学が自分のせいでなくなってしまうのではないかと。だが、イズルはまた気にするなと話すだけで半分まで吸った煙草をもみ消した。

「私だつてこんなことになるんじゃないかと予想はしてたよ…だから…ここ数日の間審査委員会の上役と掛け合ってきた」

三人はあの手紙をもらつて呼び出された日のことを思い出していた。イズルが鞆を持って出かけていったことを…

「頭の固い連中ばかりだから、話していてその頭をかち割りたくなつたがな…」

「怖いです…先生」

「まあ…それは大げさかもしれないが、近いことはした」

「喧嘩でもしそうになったんですか？」

「いや…脅してやった」

「ええ！」

選考委員会は最高機関に等しいものでありそこに牙をむくとなれば、ただでは済まされないと話だと思った。冷静なザツ八ですら驚きのあまりに取り乱していた。

「そそそそ…それは…どういう意味ですか？そんなことしたら…更迭とか裁判とか、国家追放とかになるんじゃない？」

「ザツ八…落ち着け。そんな状況になるように脅しをかける訳ないだろ。私は自分の武器を最大限に利用しただけだ」

「武器？先生の…」

まさか女の武器とか言うんじゃないだろうかと俊永は変なことを想像していたが、違う答えが返ってきた。

「戦闘能力の高さだ。俊永、今変なこと想像しなかったか？」

ぎくつと俊永は思わず目を逸らしてしまった。

「我々は自衛も任されているのだから稀に見る強大な力は残しておきたいものだろ？それに私は希少種みたいな存在だからな。魔法も科学も同時に操れる…それにバ口との戦闘経験も豊富だ。だから言っただけだよ。理不尽な方法で考古学を亡き物にしようと考えたのなら今後一切防衛の手助けをしないし、バ口に対する情報も提供しないと…それを話したら奴らは慌てふためいたねえ…まさか考

古学がバロの情報を得ていることに結びついていてるなど誰も知らなかったのだから。伊達に危険を冒してあちこち外へ出歩いていないって話だよ。だからかな…考え方をすんなり変えてくれた。今回の弟子の能力検査は一切関係はないと…」

「なるほど…それで考古学の危機は乗り越えられたって話ですね」

「いや…そうでもないぞ」

「どうしてです？」

「私は理不尽な潰しは許さないと話したんだ。もしも正式に考古学が必要ないと判断されたのならそこは潔く認める。そうだな…例えば、弟子が無能で全く育たないとか、私自身が研究結果をいつまで経っても残せないとか、続けていく上で万人が必要ないと判断したらそこは諦めるさ。だから、お前らも能力なり研究で結果を残さなくてはならないってことだ。昨日は他の分野の弟子に負けたようだが、次は勝てるようにな成長しなくては無意味なんだよ…」

「研究と鍛錬を常に怠ることなかれと…」

「そういうこと…」

言いたいことを話すと、イズルは再び煙草の箱に手を伸ばした。そして窓から外を眺めながら二本目の煙草に火をつけた。

「次の週には外で発掘の実技練習だからそれまでに怪我を治し、課題をこなしておくように。もう行っていいぞ…」

イズルはそこまで話すとさっさと三人を部屋から出した。

「ふう…」

一時の静けさが流れてからシズクは思い出したかのように机の脇においてあるお気に入り革の鞆の中から書類を取り出した。一度は目を通していたのだが、再度確認の意味でもう一度ぱらぱらとめくりため息混じりにこぼした。

「雲行きが怪しくなってきたか…」

そのまま書類を投げて机の上に置くと物思いにふけていた。

この書類はイズルの独自のルートで手に入れた情報で、書類には選考委員会の内部事情のことが書かれていた。そしてその中でも特に目がいったのは、改革派が生まれているということだった。

世界を変えようとする者が出るのは長い歴史で何度もある。それが時代時代の鍵となり論争や戦争を作るきっかけとなる。それを未然に早い展開で解消してきていたからこそ大きな戦争はなかったのだ。そこまで大きなものになるかは分からないのだが、無視できる存在でないことに違いはなかった。

不必要に大きな力を持つイズルを追放することも改革派の目的の中に含まれていたらしく、今回の一件で書類に書いていることが嘘ではなかったことを実証した。

今後どのように動けばいいのか今の時点では明確に分からない。全てはこれからの動きを見てからだともイズルは判断していた。

そのためにも後継者を育てることを急がなくてはならなかった。

### 37話

三人は敗戦に沈んでもいたが、そこから学ぶことも大きかったよ  
うで、それぞれの弱点を克服しようともしていた。

しかし俊永だけが取り残されていることを実感していた。知り合  
いだと名乗る女の子にあれだけ圧倒的な体術の差を見せ付けられ叩  
きのめされては、ないプライドも傷ついてはいた。それに数ヶ月も  
掛けて行っている発掘物に触れる行為も結果に結びつかず何を意味  
しているのか分からなくなっていた。先の見えない自分の力と、こ  
こに自分が必要であるのかその二つで心が揺れていた。元々心の強  
くない人間で流されるタイプだったので、ここまでやったら十分だ  
という妥協もどこかにあったのだろう。

イズルの部屋に通じる長い木製の廊下を歩きながら、自分に対し  
ての言い訳とどのように切り出し自分の気持ちを話すか悩みながら  
イズルの元を訪れた。

「何の用だ？私は私で忙しいんだがな…」

汚い部屋が更に汚くなっていて言葉通りの忙しさを表していた。  
書類の山で机はすっかり見えなくなり、床は地図やら発掘物で埋め  
尽くされ、ソファーはイズルの脱ぎ捨てた数日分の衣類が山盛りにな  
っていた。だから俊永がイズルの前に立つことはほぼ不可能でド  
ア側から話しかけることしかできなかった。

俊永の言葉には力がない。普段もそうだが、今は感情の入り交ざ  
った重みのある声のトーンと独特の間を使って話しかけたのでイズ  
ルも無視できなかつた。

俊永の顔をどうにか書類の山からのぞいていたイズルは、その表情から何かを察していた。

「お前…まさか…この前の敗戦で辞めたくなつたか？」

話しづらいことならこちらから聞き出してやるうかと思いい、イズルがそう話した。すると俊永は「まあ…その…」と目を合わせることなく答えた。

「ふう…」

イズルは重い腰を上げて保温しておいたコーヒーをカップに注いだ。そして一口飲むと黙って立っている俊永に話しかけた。

「自分ひとり取り残されているとか考えているのか？力も技術も…周囲の期待に沿わないと…」

「その…」

「確かに…お前が今やっていることは何も生んでいない。私自身もお前の能力については不可解な点が多いからな」

「なら…ここにいない必要ってないでしょうが。俺は二人と違い魔法も科学も全然駄目なんですよ。体術だって自分よりも華奢で小柄な女の子にすら子どもと大人ぐらいの差がある…所詮、駄目な人間は頑張ってみたところで駄目なんですよ」

数ヶ月間我慢していた不満が一気に噴出したようで、俊永は全てを終わらせようと考えていた。しかしそれを引き止めるかのように



イズルは俊永の隠れた能力について話始めた。

「辞めたいのは分かった。だが…お前は自分の力について何も分からないからやきもきしてるんだろ？それなら教えてやるよ。お前の力はな…おそらくエンシエント・アビリティー…古代人の産物だ…」

「え？それって…」

「古代には科学とも魔法とも違う力があることは何度も話したろ？その力だよ。現代でも遺伝的に残っている可能性はあるということだ。しかしこれは、私の専門分野だから知りうることできたが、きっと私以外の奴は誰も気がつかない能力だろうな…だが貴重な力であることには違いない。だからお前は選ばれた人間なんだよ。これが無意味な力なのか意味のある力なのかは私も知らない。でもな、何の能力も持たないでもがき苦しんでいる奴らとお前は違う。力を持たない者からすればお前は憧れの存在なんだよ」

「先生…俺の力って具体的に何なんです？俺は…全然分からないことだらけなんです」

「今の段階で言えることは、お前の力はまだ未開封という所だ。単純に古代の産物に共鳴する力を持っているようだが、それだけではないようだ…しかしお前のそのマイナス思考が能力の伸び悩みの一因だとも思える。人間ってのは、こうなりたいとか、こうしたいとか前向きに考えないと体の細胞レベルまで能力が低下する。他の二人を見てみる常に前向きだ…」

確かにその通りだと思った。

「だからだ…もっと知りたい、得たい、という気持ちが必要だ

な。それから…お前の力がいずれ必要になるのも私は断言できる」

「どうしてです？」

「勘だよ…私のはな、意外と当たるんだよ。じゃなきゃこんな宝探しみたいな商売してないからな。それにだ…私にもしものことがあつたら頼むな…」

「そんな縁起の悪いことは止めて下さいよ」

「なら、もう悩むのも止める。それから…私の弟子を辞めるつてもなしだからな…っていうか弟子の解雇は師匠にしかできない。だからお前の意思では辞められないんだよ。それでも辞めたいっていうなら犯罪行為にでも手を染めて捕まってもらわないとなあ…」

「それなら…俺のしたことって…」

「まあ、無意味だな」

「はあ…そうですか…失礼します」

そして俊永はドアを閉めて立ち去ったが、言いたいことを言えたことと自分の能力はまだまだ活でできることを知り気持ち少し晴れていた。それに…こんな自分を必要としていてくれたことが一番大きかったのかもしれない。何となくなってしまった弟子だったが、互いの絆が深まってきたからこそ知った喜びでもあった。

「まったく…俊永の奴…相変わらずネガティブだな…」

「それはそうですね…あいつの歩んできた人生が常に後ろ向きなんですから…」

イズルの背後からそんな声が聞こえた。

声の主はシズクだった。俊永よりも前にイズルの元を訪れ、参考資料を届けていたのだ。しかし俊永が入ってきたから咄嗟に奥の部屋に隠れていた。だから先ほどの話は全て聞いていたのだ。

「お前も趣味悪いなあ…仮にも同僚の弱音を隠れて聞くんなんてね…」

「先生も早く見切った方がいいですよ。あいつはきつとまた同じように弱音を吐いて来ますから」

「ふふふふ…俊永のことになるとむきになるのがお前らしいな…そんなに気になるのか？」

「ききき…気になるはずないじゃないですか！何を言って…私はただ、これから先のことを考えてですね…」

大きく取り乱すシズクの姿を見てイズルは喜んでいた。

「分かった、分かった…でもお前もあいつはちょっと変わってるって思ったんだろ？魔法を扱う者からすればあいつの雰囲気は異質だからな。高位な魔法使いとも形容しがたいがそ

れに近い物を感じるだろ？」

「…ええ…そこは素直に認めますよ。だからムカツクんです。私以上の素質を持つているのかもしれないのにそれを早々に諦めようって根性が…」

「お前もそのように認めてくれるのなら私の勘は間違っていないってことだな。それでだ…お前はあの力を魔法使いの視点から見えてどう思う？」

俊永の力について話すことは少し癪に障るがイズルから答えを求められては素直に答えるしかなかった。

「五大元素の全ての色が混ざっているような感じですか？先生もそれに近い気がするんですけど…」

「ふむ…やはりか…だから雰囲気も掴みづらい。今度は科学者の視点での意見も欲しいところだな。そうそう科学の話で思い出したが、ザッハはどうしている？一人で研究か？」

「そうですね。ここ三日はこもりっぱなしらしいんで、何かしてると思います」

「そう言うお前は大丈夫なのか？長月クウヤの弟子に負けたんだろ？水無月家の跡取りだったか…」

「大丈夫ですよ！今度会ったらあの高飛車女…ぎったぎたにしてやりますから」

「それは頼もしいな…」

「あの…イズル師。聞いていいですか？」

「何だ？」

「イズル師は魔法国家の出身なんですか？イズル師の逸話はいろいろ残っていますが、血族の末裔ではないことははっきりしています。まさか科学国家の出身者とか？」

「……………」

「言えないことなんですか？」

イズルはどうしようか悩んでいたが、良い機会だから話しておこうと決めた。

「ま…お前ならいいか…口も堅そうだしな……………」

「ええ！是非！」

目を爛々と輝かせているシズクを見ると少々不安そうな表情を見せながら話した。

「私は孤児だ。そして十八歳のとき中立国家から魔法国家に籍を移したんだよ。神下ろしを経験したがその時にちよつとした能力で周囲を沸かせた…三つの属性を扱えるということだな」

「え？ちよつ…それって…一人の人間は一つの属性しか扱えないはずじゃ…」

「それが定説。でもね生まれつき私の体はそうだったらしい。だから…そこらの魔法使いには負けなかった。その力で国家の危機にも何度か手を貸し、特務を与えられ科学国家への派遣隊も経験した。そこで科学も学んだんだよ。魔法の知識とアルケーエナジーはよく似ている。だからあちらの研究にも手を貸してやったんだ。そうする内に両国を頻繁に歩き、三国の通行許可をもらえる存在にまでなった。考古学に目覚めたのはその辺りからだ。古代文明にはバロとの因果関係もあるに違いないとも考え、独自の研究を進めることにしたんだ。私の試みを認めてくれた人間が数人いて、援助も受けそれから具体的な学問として立ち上げることに成功した」

「凄いですね。流石イズル師です。私が憧れる存在そのものですよ。だって…女性の魔法使いでそこまでの快拳を成し遂げたのは先生が初めてですから」

「褒めてくれるのはありがたいのだが…現状は見ての通り厳しい」

「それでもイズル師は私の目標ですから！」

「全く…お前は自分の気持ちに素直な奴だな…ここまでくると清清

しいよ。しかし…これだけは覚えておいてくれ。私は自分が特別な  
ど一度も思ったことはない」

自分の力を真つ向から否定したイスルのことを不思議そうな顔で  
シズクは見ていた。

「どつという意味です?」

「運命って言葉を信じるかい?」

「それは…信じるか信じないかで聞かれたら…信じませんね。だつ  
て、自分の未来は自分で切り開くものと信じてますから」

「うーん…現実主義者の立派な回答だな」

「なら…イスル師は信じていると?」

「まあな…お前と私とで違うのは生きている年数と経験、更に万物  
の流れを感じ取れる敏感は感覚なんだ。物事には偶然つてもものは存  
在しない。そこにはそうあるための流れが必ず存在するんだよ」

「回避できない出来事ということですか?」

「自然の流れと言う奴かな?それを必然とも言つのだらう。そして  
私の力も必然のものなんだ。力を持つ意味が必ずあるということだ  
…」

「ならイスル師は運命の下でその力を手に入れ、それを使うざるを  
得ない状況にあるってことですね」

「分かりやすく話すとそうなる。だからだ…私は特別ではないんだよ。この星の数多にある意思の元に存在する一つの流れにすぎないってことだ」

自らの存在意義をそんな風に語るイズルは説法のようにそんな持論を持ち出した。そしてシズクはそれを黙って聞くことしか出来なかった。

「自らの力が特別なものと勝手に判断し驕ればそれは自分に跳ね返る。だが、その力が万物の流れの一部に過ぎないと考えればそんな慢心も出ることはない。だから私が一番言いたいことは、むやみやたらに力に捕らわれ過ぎるなってことだよ…シズク、お前はまだ若い。力を欲する気持ちも試したいという気持ちも理解できる。しかしだ…そればかりではないことを学べ」

シズクの欠点を突くようにイズルは、はっきりとそんなことを口にした。シズクもそんなイズルの言葉の重みを感じ取っていたのだろう、大人しく聞いていただけだった。

「小難しい話と説教はこのぐらいにしておくか…さあて…お前も用事が済んだろ？それならそろそろ出て行ってくれ。私もまだ仕事が残っているからな」

「はい…でもイズル師もほどにしてくださいよ。二日ぐらい寝てないんじゃないですか？」

溜まっている洗濯物や食器類、煙草の量を見てそう判断したが、返ってきた答えは別のものだった。

「四日目だ…私のことは気にしなくていいから、課題しっかりこな



しとけよ！」

シズクの方を見ないで書類を眺めながら話すと、シズクはそのまま部屋を出て行った。

## 40話

俊永はいつものように部屋で例の発掘物と向き合っていた。

こんなものに触れているだけで本当に自分が何かできるのか疑問に思っていた。前々から感じていたが萎えた気持ちのせいでそう思う気持ちが一層深くなったのだ。

「はあ……」

ため息ばかりをこぼしながら集中していた。

見えるものはこの棒が細部まで精密に作られたような機械の構造をしているということだ。それにしても……何かスイッチのようなものも見えてきたな……

俊永は内部に今まで感じることもなかったものを発見した。触れる回数を重ねることにいろいろ見えてきたから六十数回目にしてこの物体の構造が全て見えてきたのだ。

内部にあるスイッチか……どうやって押すのだろうか？まさかこの棒を叩き割るとかか？そんなこととして何になる？

様々な思案が飛び交いながらも今日の日課を終えることにした。

「俺……本当にこのままで大丈夫なのかな？」

そんなことを愚痴りながら電気を消して床に就いていた。

本格的な発掘作業に取り掛かることができたのは三人の怪我が完全に治って数日たった日だった。

空は雲ひとつない晴れ模様で絶好の発掘日和といっても過言ではなかった。

シズクは三人をまず所定の位置に集めると、話を始めた。

「いいか：今日から発掘作業を実際に学んでもらう。まず基本ができてるか聞いてみようか：ザッハ。発掘の第一段階は何だ？」

教科書にはないことを急に振られたがザッハは戸惑うこともせず自分の調べた知識を頭の中で検索していた。

「まず：古代物の埋まっている範囲を絞る行動を取ることですよ。科学国家の方式ですと探知機：そして魔法国家の方式だと結界ですか？科学国家の方の探知機の理論は分かりますが：魔法国家の結界は良く知りません…」

「いやいや：そこまで答えられれば上出来だよ。科学国家では古代物に反応する探知機を使うし魔法国家では古代物特有の元素に反応する結界を使う。両者は似たような技を用いて発掘の手助けをするのだが：こちらには人間探知機が存在するからな」

俊永の方を見たが、本人は何のことか分からないといった様子だった。

「どうだ？俊永。外の世界で何か感じはしないか？」

全員の視線が集まる中、どうしたらいいのか戸惑っていたが俊永はイズルの言葉通りに不意に何かを感じた。

「これは…」

果てしない大地に点在する古代物の気配…それは無数の星のように地面の中で光り輝いているようだった。意識を集中させればさせるほど見えるはずのないものが現実に見えてきた。まるで自分を探し出してくれと言わんばかりに。

そんな物が見えてしまう自分に驚きながら俊永は呆然と立っていた。シズクとザツハには俊永の身に何が起こっているのかさっぱり分からなかったが、イズルはやはりといった顔を見せた。

「どうやら…感じてるようだな…日々の修練が身を結んだんじゃないのか？」

「え？これって…その…」

目をこすりながら再確認をする。

「紛れもなくお前の能力の一部だ。古代の産物の気配を具現化して感じ取れる…」

「え？そうなの？俊永のくせに！」

シズクはうるさく騒ぎたてたが俊永は自分の力に確信を持つことができていないので、どのように答えたらいいのか分からなかった。

「二人にはないものをお前は持つてる。それがこの広い世界に出れば生かされるのも事実ということだ…だからもっと自信を持つんだな。それで…そのように見える？」

「えつと…青白い光や赤い光や黄色い光が地面から出ているような感じで、その大きさも様々ですね。俺なりの見解ですが…大きさによってその物の大きさも違うのではないかと…」

「ほう？なら小さい光は欠片のような物だということか？」

「ええ…あまりにもまばらに小さいものが広がりすぎるので、そうだと思います」

「色の違いは？」

「それは…掘ってみないことには分からないかと…でもここから辺には大したものはないと思います。僅かな小さな光しか見えませんので…先生が行った選抜試験の時に見つけた光はこれの数倍もありましたし…」

「そうか…お前がそこまで話すならそうなんだろうな。それに…やはりその能力は本物のようだ。私の課題も見事にこなしたようだし」

イズルの言葉の意味が分からず三人はどういう意味か聞いたただした。するとイズルは笑いながら答えた。

「実は…ここに何も無いのは私自身が知っている。大きな発掘物はすでに掘り出したからな…だからここに残っているのはその残りかすなんだよ。それを承知で俊永の能力を試してみたんだが…本物の

ようだったな」

「なら、今日は俊永の力を見るために出たってことなんですか？」

「まあ…そうだな。しかしこれだけではその力の立証にはならないだろ？俊永。お前の見える僅かな光を指差してくれないか？」

すると俊永は言われるがままに近くの光を指差した。

「この…すぐ下にあります」

「そうか…ならシズク掘ってみる」

シズクは命令され半ば信じない気持ちでその場所をスコップで掘ってみた。するとそこには小さな欠片が埋まっていた。金属片のようなものだったが、不思議な文様も入っていて現代にはないものであった。

「何です？これ…」

「これは、今から数千年前に作られた金属だ。魔法大国が生まれたのが今から千年と少し前…それよりもずっと前の話だな」

「先生…この金属片…何でできてるんです？」

科学国家出身のザツハは見たことのない金属片に興味を示し、イズルに聞いた。するとイズルははつきりとした答えを出すことはできなかつた。時代背景を探ることはできて物質そのものを明らかにすることは専門外であったのだ。しかし現代に精製できないような金属であることは間違いないと付け加えた。

「すごいな…古代文明は今を凌駕していたということですか？どうみても現代にはないような比重の金属ですよ。軽くてしかも強度が優れている」

金属片をいじくりながらそんなことを話した。

「何度も話すが古代に関する知識を知る上では我々はまだまだなんだよ。今という時を重んじすぎてしまった結果が招いたことでもあるが誰も知らずとなかったからな。でも…だから面白いんだよ。とりあえず俊永が私が思った以上の結果を出してくれたことで今後楽しみになったよ」

「そうなんですか？」

「ああ…お前のような特異な能力は私にとってかなり貴重だ。機械でも魔法でも数日を要する手間をたったの数分で片付けてくれるのだからな」

そこまで話すとイズルは煙草を取り出し火をつけた。

「さて…これからが本番だ。もう少し緊張感の漂う場所へ移動しようか…」

これが前座だとも言いたげな様子でイズルは三人を引き連れて違う場所へと動いた。

イズルの発見した発掘場所を転々と回り発掘の技術とコツを学び、個々の能力を高めていた。幸いだったのはバ口に出くわすこともなく数日間を無事に過ごすことができたのだ。

イズルは万が一も予測していたので、出くわさないことには  
たことがないとほっとはしていた。



## 41話

「水雲イズルの件はどうなった？」

初老に近い風貌の男が暗い部屋の中で若い男に向かって話しかけた。その男は眼光には鋭い圧力があり、激しい爆発に巻き込まれたかのような無数の傷が顔には刻まれていた。

身長はゆうに百八十を超え、体重は百キロ近い巨漢の持ち主で髪の毛は白髪 of 長髪だった。生ぬるい環境で日々を過ごしているという感じではなく独特の緊迫感のある雰囲気を身に纏っていた。

ぴりぴりとした張り詰めた空気が常に存在し、目の前の若い男もその気配に圧倒されていた。

「それが…圧力を掛けられました。強制的に排除する気なら国政や防衛体制に協力はしないと…」

「力を誇示するか…」

「しかし…彼女の今までの実績と功労を考えるとその言葉も本当のことだと…」

「馬鹿が！たかが数人力の一人の人間の力がなくとも国は動く。そんな子どもだましのような脅しに乗るお前も情けない…」

「彼女の崇拝者も多いのです…敵をたくさん作ることもつながりまずし、確たる理由がない状態での強制排除は他の研究者や魔法使いに示しがつきません」

「全く…使えない。そんなことはどうとでもでっち上げればいいだろうが。あいつに崇拜者だ？笑わせてくれる…」

その男の目はまるで憎悪の炎で揺れているようだった。流石に話していた男もついていけないといった様子で半ば呆れていた。

「差し出がましい忠告かもしれませんが、水雲イズルからは手を引いた方が良くかと…このまま深追いしても痛手を負うのはこちらです。それに選考委員会も僕がおかしな動きをしていると察するの時間の問題だと思うので…関係はこれっきりってことにしてもらえませんか？残りの金も要りません」

「俺を見切るといふことか？」

「いえ…あなたのことは話しませんよ。そんなことすれば僕の身も危ない…危険を減らしたいだけです」

「あれだけ金を貰っておきながら仕事は途中で放棄か…本当に屑で最低だな…子どもでも小遣いをもらえばもっとましな仕事をするのに…」

そこまで言われれば流石に男も表情が変わる。きつと睨んで反論をする。

「あなたにそこまで言われる筋合いはない。こっちはこっちで大変だったんだ。能力検査の大会を開くのに莫大な時間と費用を裂いている。水雲イズルの弟子に上手く最強の弟子が当たるように怪しまれないことも慎重に慎重を重ねた…ここまでやっておいて屑とは心外だ。あんたのような裏方の人間は裏方らしく日陰で仕事をがんば

つてればいいんだ」

「ほづ…」

「水雲イズルとは何があったのかは知らない…しかし僕ができることはここまでだ。後は勝手にやってくれ…」

そう強気に話しそこから立ち去ろうとする男を初老の男は呼び止めた。

「なあ…お前は体重はいくつだ？」

「はあ？」

いきなり何の話をしているのか分からない男には答える気はなかった。

「俺の見立てだと…そうだなあ…五十三キロ前後ってところか…」

自分の体重をぴたりと当てられ、気味が悪いと感じたが無視をしようと思った。だからそのまま足を進めた。

「まあ…それぐらいなら運ぶのも楽だな。細切れにしてしまえば…」

「え？」

ぴたりと男の足が止まり、その言葉を最後に男の体は何十という肉塊に姿を変えてしまった。

「弱い奴は強い者に従う…これはどの時代も定説だ。餌を与えてい

るのだから黙って食ってればいいものを……」

人の形をしていない物にそんな言葉を投げかけてみたが、ただの  
独り言のようにしか聞こえなかった。

## 42話

発掘作業も手馴れてきた数週間後三人は五キロの道のりを黙々と歩く。普段の鍛錬の成果があつてか、そのくらいの移動では息が上がることもない。そもそも発掘をする者にとって持久力は必須だった。それを踏まえてイズルは三人に基礎体力の向上を促していたのだから思惑通りに体が出来上がつていたのだ。

そして一時間もしない内に目的の場所へと移動が完了していた。

見渡す限り土と岩ばかりの何も無い荒野。雨が降らないせいか地面が保湿を求めるようにひび割れていた。もち

ろん植物など生えてはいなかった。照り返しもあるので立っているだけで体内の水分が奪われていくようだった。

「先生、ここが目的地なんですか？」

「歴史の背景と私が今まで行つてきた発掘の跡から考えて、ここに大きな遺跡があることが予測される…しかしだ。これだけ見晴らしがよく同じような景色の場所では特定も難しいんだ…」

「遺跡つて…何が眠つてるんですか？」

「地層の関係上地下に存在すると思われるが…古代の大きな施設のようなものかな？でも…はつきりと断言はできない。あくまで研究上での憶測だからな…なあ、俊永何か感じないか？お前なら一発で分かると思うが…」

数日を要して完璧なまでの仮説を立ち上げていたからか、かなり

の期待を寄せて俊永にそんなことを話しかけたが、俊永は首をかしながら聞いていた。

「先生…ここは何も感じませんよ？っていうか不自然なくらい空っぽといった感じですよ」

「空っぽ？」

「ええ…はつきりとは言えませんが、変な感じですよ…つい最近に感じる気配…いや…ほんのさっきといった感じなのか…あったのになくなった…そんな感じで…」

今までに感じたことのない様子だと俊永が話したことに対して、イズルは何かを察した。

辺りの状況を見回し、地面の足跡、大気の流れ、はたまた匂いまでも五感を鋭く研ぎ澄ませて感じ取る。

俊永の言葉通りに嫌な空気が流れている。これは…まさか…

嫌な予感が的中しないでくれと心で願いながらも表情が険しくなり真剣な眼差しで周囲を見回した。

「まさか…奴らか？」

先ほどまでの雰囲気と違うイズルを変に思ったのかシズクが問いただした。

「先生…何かあったってことですか？」

シズクの問いにどう答えていいのか分からなかったが、イズルは

正直に答える。

「お前らよく聞け。ひょっとしたらだが…バロに囲まれている危険性がある」

「え？」

「は？」

「ええ！」

三人が言葉にならない声を上げる。

「すまん。私のミスだ。ここには奴らは立ち寄らないという確信があったのだが、その全てを覆された。気配は感じないが…不穏な空気が立ち込めていることを肌で感じる」

イズルがそんなことを口にしては三人もどうしていいのか分からなかった。ただ強がってみるのか、本心のままに怖がるか…

しかしまだ現物を見ていないからどういふ態度でいればいいのかも表現できなかった。緊迫した時間だけが無常にも過ぎていく。

## 43話

それだけでイズル以外の三人の心は変化する。冷静でいられるか…押しつぶされてしまわないだろうか？

余計なことを考えてしまうことと、極度の緊張感で反応が鈍くなっていた。そんな矢先にじりじりと僅かに動いた俊永の地面から矢のような鋭利な物が飛び出した。

「うお！」

頬をかすめて上空に飛び上がり直撃は免れたものの俊永は唐突の出来事にしりもちをついていた。その瞬間、イズルは他の二人にも動くなと叫んだ。

「トラップが仕掛けてある…それにだ…囲まれてるな」

「バロですか？」

「ああ…あいつらは的確にトラップの場所を知っているが、こっちはまるで知らない。となると分が悪いな…ザッハ…熱反応の探知はできるか？」

「えっと…はい…」

「すぐに半径百メートルを探知しろ。そしてシズク。私以外の者の身を守ってやってくれ…結界を最低でも三枚…圧縮率を最大限に高めて張れよ…」



「それは可能ですけど…イズル師は…どうするんです？」

「あのなあ…私が戦うに決まってるだろ。おい！ザッハ！特定できたか？」

「はい。簡単に話すと五名に囲まれてます。岩陰と地面に潜んでいて等間隔で詰めています…」

「そうか…何メートル先にいる？」

「二十五メートルという所です。正確な座標を教えますか？」

「いや…いらん。そこまでなら私の範疇だ…それよりもシズクさっきの言いつけをしつかり守れよ」

そこまで話すと、イズルは神経を研ぎ澄ます。まるでソナーのように一瞬で敵の位置を感覚で絞り込んだ。それと同時に明らかに感じる殺意に敵は自分たちを生かしておく気はないだろうとも判断した。

バロの性格は様々で、自らの力を証明したいがために死体は無残な状態でわざと晒す残虐性の高い性質のものも

いる。そんな奴らに当たらないことを願ってみたが、そんなのは実際に対峙してみないと分からない。しかしイズルは相手が姿を見せるのをいちいち待っていられなかった。

「右の手に埴安神<sup>は</sup>、左手にボレアース…宿主の声に応える…」

イズルが呟き大きく右腕を振りぬいた。すると、円を描くように地面が爆発する。

まるで地中から間欠泉が出るが如く凄まじい勢いだった。堅い地面を粘土のように扱う様は正に魔法の力だった。シズクは防御の結界を張り衝撃から三人を守っていた。

そこでシズクは理解した。先ほどイズルが話したことは自分の技で巻き込むから気をつけるという意味なんだと…

そんなイズルの右腕には土の神が宿っていた。文様のような刺青が腕に刻まれ青く光っていた。そしてその効力の元に地の硬質を自由に変化させ意のままに操れる。それから土竜が飛び出すように潜んでいた五人の姿が土にまみれながら晒された。

「くっ…」

土煙と砕けた岩が降り注ぐ中でバ口の五人は必死にイズルの姿を探した。全員が武装を手にしていった。一人は刀

を持ち、一人はアルケーエミッションを手にし、残りの三人は拳銃や見たことのないような武器を手にしていった。闇雲に動けば同士うちになることも知っていたので、飛び道具の類の武器は使わないようにした。

そんな五人とは別にイズルは惜しみなく左手の力を解放した。

「ゼラチン・アニマ」

詠唱すると左手が光り輝き手のひらからは絶対零度の凍てつく風が吹き荒れる。極寒のブリザードなど生易しく感じさせるほどの風圧と寒さであった。そしてまるで生き物のように的確に五人の体を

包み込むように捕らえたかと思うと、五人はそのまま何もできずに凍り付いてしまった。

五人の気配が一気に消えたことを確認したことで、肩の力を落としイズルは大きく息を吐き出した。

「くっ…はぁ…」

大技を立て続けに二発も出したことで大幅に体力を削がれ少々眩暈がしていた。

「年かなあ…」

自分の両手を握り締めてそんなことを口にした。

それから少しして、シズクたちは土煙が晴れてからようやく自分たちを襲おうとした人間の姿を見ることができた。凍った姿で。

当然初めての出来事だった三人は目を見開いたまま言葉を発することなどできなかつた。

「先生…これ…」

シズクが真っ先に声を上げてイズルに確認する。

「ああ…こいつらがバロだ…っていつても氷の彫刻みたいになつたからよく分からないでしょうけど…でも、こいつらは本気で私たちを殺す気だったよ。反撃の間を与えなかつたことが幸いしたようだし…中級クラスってところだ。肉体改造もされてないようだから助かったよ…」

「肉体改造…ですか？」

「ああ…あいつらは魔法と科学をごちゃ混ぜにしたようなオリジナルの技術を持っているから平気でそんなこともするのさ…私の聞いた話では脳だけ残して不老不死の体になっている奴もいるらしい…」

「そんな…玩具みたいな…」

それからイズルは煙草を取り出し口にくわえながら周りを見渡しながら歩いた。何故この遺跡が先回りされたのか原因を探るために情報を集めていた。

「ここには何が眠ってたんですか？」

「私の予測では…古代研究施設がここにあつたんだ…古代文明の要と言われる『万物の神』とやらがここに眠っているらしいのだが…それも別の奴に持っていかれたようだ。しかし…解せないのは、あいつらが待ち伏せしていたことだ。まるでここに誰か来るのを分かっていたかのように…」

「鉢合わせになっただけなんじゃないんですか？」

「トラップまで仕込んでいるんだぞ？鉢合わせならそんな余裕もないだろうし、等間隔で詰める戦闘方法など取らない…事前に我々が来るのを知っていたとしか思えないだろうが…」

表情が険しくなりながら煙草に火をつけるとそのまま白い息を吐き出す。

「そんなことよりもまずここから立ち去るぞ…追っ手に来られたら面倒だ。今日の授業はここまで…」

そのようにイズルが促すと、慌てるように三人はその場から離れていった。

## 44話

その日の夕方三人は同じ場所で夕食を取っていた。珍しく外食をしようというシズクの提案に他の二人が乗ったのだ。

「気味が悪いな…シズクから誘うなんて…」

「うるさいわね。今日の反省会がてら意見交換もしたいのよ!」

「へー…そういう所は勤勉なんだな」

まるで他人事のようにザツハはシズクをからかっていた。

三人が入ったのは中立国家に数店展開する大衆用食堂。いわゆるファミレスである。

それぞれが食べたいものを注文し、料理が運ばれると早速主催者であるシズクが本題に入った。

「今日のことだけど…その…あんたちどうだった?」

「どうだったって…何が?」

「につぶいわねえ…怖くなかったかってことよ!」

「そりゃあ…少しは…」

「俺も…」

「私も正直怖かったわ…バロの気配には押しつぶされそうだったからね。模擬戦闘は何度もやってるけど実戦はまだ経験ないからなあ…」

シズクは自分の弱い気持ちを吐き出すかのようにそんなことを話した。しかしそれを使い越えなければイズルの跡を継ぐことなど無理なものも承知だった。

しかし弱い気持ちの自分と強がっている自分の二人がごっちゃになつて訳が分からなくなっていた。

「バロだつて殺す気できてるんだ…それならそれに見合う心構えを持たなきゃこの先矢つていけないんじゃないか？」

ザツハはいつものように冷静だった。確かにここを乗り越えなければ進めない話だったので腹をくくっているように思えた。

「そんなこと…分かつてるわよ…ちょっと愚痴つてみたかっただけ。私だつてその時になればやることはやるわ。そんなことより俊永は大丈夫なの？あんたは何もしないでばーつとばかりしてるけど…魔法でも科学でもスキルを伸ばした方がいいんじゃないの？」

「お…俺かよ。無理だつて…科学はちんぷんかんぷんだし、魔法は神下ろしをしなくてはならないんだろ？どちらも不向きだつて」

「ならあんたは何の役に立つのよ！」

「遺跡探し…とか？」

そんな返答にシズクは怒りを覚えた。お前まで守っている余裕な

どないと言いたかったようである。

「どうしてあんたがイズル師のお気に入りのか未だに理解しがたいわ…」

シズクの持っているフォークが曲がる勢いで握られた。

「シズク…ちよつといいか？」

「何？」

「イズル先生のおの魔法の能力は何だ？僕は科学国家出身だから魔法については無知だ。それでも他者を圧倒させる…いや、脳裏に絶望しか与えないようなものを持っていた。言葉では説明できない何かをな…」

ザツハは人間の本能として感じたことを話した。するとシズクもどこから話していいのか分からない素振りを見せたが魔法について話を始めた。

「魔法は…神の力を借りて行われる現象であるけど、大きく分けて二種類ある。和式魔法と洋式魔法…それによって呪文の詠唱の仕方も違つし、神も異なるわ…」

「それならイズル先生は…その両方を使っていたような気がする…その…魔法の詠唱だったか？の仕方が異なっていた」

「その通りよ。あれは三つの属性を…いや、三人の神と契約しなければ成せない技なの。しかも和式と洋式の魔法では仕組みも違つからその二つを同時に操れるなんて正気の沙汰ではないわ…体がその



負担に耐えられないし、魔法自体もその効力が現れるかも分からない」

「なら…どうしてイズル先生はそれができる？」

「それが理解できるなら苦労はないわ。これは前例がないから彼女に勝てる魔法使いを私は知らないし、彼女以上の魔法使いを知らないわ」

「正に雲の上の存在なんだな…でも…それだけの実力があいながらもバロを軽視はしてなかったな…圧倒的な勝利だったのならもう少し慢心してもいい気もするけど…」

ザッハはそんな勝手な人間分析を始めていたが、シズクは違った。

「シズク師がそんな愚かな人間なわけじゃないじゃない。あの人は自分の力に振り回される人じゃないもの…」

そういうものかとザッハはシズクの話に黙って聞いていた。それとは別に俊永は違うことを話した。

「俺の勝手な憶測かもしれないけどさ…あの人は、自分の力を嫌っている部分もあると思うけど…」

「え？どこからそんなこと思っの？」

「いや…その…説明しろと言われても難しいんだけど…その…時々悲しい表情してるし」

ザッハとシズクはそんな顔をしていたのか？と互いに顔を見合わせ確認していたが、思い当たることはなかった。

「あんたの話すことはあてになんないわよ…そもそも女心の何たるかも分からないんだからさ」

知りたくもないといった様子で俊永は曇った表情をしていたが、話題を変えて話し掛けた。

「そんなことよりもさ…次の授業はどうなる？また同じようにバロの出現お構いなしに遺跡探しに出かけるのかな…」

「それはないと思うよ。何だかんだ言ってもイズル先生は僕らを危険な目にあわせたくないみたいだしね」

「流石、私の憧れの存在だわ」

「お前の予想はあてにならないがな…」

そんな俊永の言葉にシズクが噛み付いたが俊永はいつものように流した。

## 45話

次の日イズルの授業は休みだった。イズルはまた一人で行き先も告げずにどこかに出かけていたのだ。

その出来事をイズルの部屋のドアにしてある張り紙で知った三人は、仕方なく学校から出ると各々別行動を取った。

一方でイズルはというと、科学国家に足を運びもう一人のアールキオロジストの元を尋ねていた。

「久しぶりです…レイファンさん」

イズルは軽く頭を下げ、目の前の人物に挨拶をした。するとレイファンは椅子に腰を掛けることを進めてきた。

「相変わらずきれいな好きなんです…私の部屋とは大違いだ…」

通された部屋はレイファンの仕事部屋であったが、イズルの部屋とは真逆そのもので十二畳のスペースの中に家具が点在しているような状態である。そんな中で自分の部屋と大して変わらない広さなのにこつとも広く感じるのはどうしてなのだろうかとイズルは疑問に思っていた。

「あなたからの誘いは珍しい…」

イズルの目の前にいる男は、高いダークスーツに身を包み眠そうな顔をしていた。科学国家の人間はスーツに白衣といったスタイルが多いのだが研究者ではない男に白衣は必要なかった。細身の体にそのスーツが体のラインを引き立たせるかのようにぴったりと張り

付いているかのようだった。

男の名前はレイファン・ドルイエで、年は三十代前半、未婚の科学国家唯一の考古学者であった。彼もイズル同様に科学国家では尊敬のまなざしで見られることが多い。その理由として、あらゆる武器を一瞬で解読、使いこなすというシンクロの達人だった。

その実力があるからこそバロともやりあうことのできるのだ。そして考古学というジャンルにも科学者目線から興味があった。古代の兵器はどのようなものだったのだろうか…ここまできればただの武器マニアになるのだが、レイファンはそれだけ武器と呼応することが好きだったのだ。

「一年前の定期報告会以来ですか…」

「そうなりますね」

差し出された紅茶を飲みながらイズルは相槌を打った。

「最近の発掘状況はどうです？面白い物でも見つかりましたか？」

「大した発見はありませんね…それよりも今は弟子を育てることで手一杯なものでして…」

「あなたが弟子を？これは意外だ…私と同じように持たないと決めている側の人間かと思っていたものですから…」

「面白い逸材に出会ったから…とでも言いましょうか…陳腐な言葉で話すなら運命かもしれませぬ」

「ほう…あなたの琴線に触れるとは…大した人間ですね」

「恐縮です…それよりも今日は聞きたいことが二、三ありまして…  
よければ情報交換をと…」

「それは構いませんが…交換条件って訳ではないのですが、イズル先生の発掘状況と発掘ポイントを的確に教えてくれませんか？以前のようによろしく終わりでは困るのでね…」

「ええ…構いません」

二人の中で取引が済まされると、イズルは本題に入った。

「選考委員会のことですが…何か圧力を掛けられましたか？間接的とか…」

「私個人にですか？」

「はい…」

「それはないですね…私は弟子もいませんし…私自身もこれといった不祥事も起こしていないので」

「そうですか…」

そのことを聞いてイズルは、選考委員会は考古学を排除したいのではなく、自分自身を排除したいのだと理解した。

「発掘は頻繁に？」

「ええ…時間があれば出かけてます。まあ…これといった有力な物は手に入れてませんが…」

「バロには出会いますか？」

「いや…最近では危険区域では行っていませんからねえ…専ら近場での行動が多いです」

その返答を聞きイズルは反応した。昨日も危険区域ではない比較的安全な場所に向いたのに出会った。これはどういうことなのか…昨日の出来事を話してから続けて質問する。

「バロの最近の動きはどうですか？」

科学国家の住人ならバロを補足する機械などお手の物である。だから魔法国家の人間に比べるとこっちの人間の方がバロに出会わない確率が高いのだ。

「特に際立った動きは…三国からもかなり離れた場所に密集しているようにも見えます」

最近のデータの書かれた紙を見ながらそう話した。

「しかし…彼らも統率の取れた民衆ではないから、疎らに存在する輩もいますよ…イズル先生が出会ったのはそういった奴らかもしれないが…」

「だといんですけど…どうもきな臭い匂いが拭えなくて…」

「裏があると？」

「ええ…最近、選考委員会には嫌われているようで…」

それでかとレイファンは最初の質問の意味を理解した。しかしあの冷静なイズルが自分の下を訪れてまで情報を欲しがるということとはただならない出来事だとも思った。

## 46話

「煙草…いいですか？」

レイファンに断りを入れるとイズルは胸ポケットから箱を取り出し、煙草を中から一本引き抜いた。それに伴いレイファンも灰皿を差し出した。

「それで…選考委員会の動きはどうなっています？もしかして私にも関わりが？」

「いえ…先生は心配しなくても大丈夫です。話し口調から考えても私個人を狙っているようなので…」

「委員会全体がそのことに関わって？」

「いえ…個人的判断だと思えます。いくらなんでも無茶なやり方でしたからね…恨みを買うことはたくさんありますから思い当たることを探したらきりがありません。でも…弟子だけは守ってやりたいんです」

「…」

「まだ駆け出しの半人前の奴らばかりなんですが、私の道を引き継いでくれそうなんですよ」

嬉しそうにそんなことを話して聞かせたが、レイファンは他人の話をしてこんな表情もするのだと驚いた。それはイズルが何でも一人で出来てしまう人間だからこそ他人に全く興味がないのだと決め



付けている部分があったからだ。

「それは頼もしいですね…先生にそこまで言わせる人間はそういはいはずです。今度は一緒に連れて来て下さい。歓迎しますよ」

特別な感情を抱くことなくそんなことを話したが、イズルは次の会話を切り出すのに時間を掛けた。少ししか吸っていない煙草をのみ消し、じっとレイファンの目を見た。

「あの…非常に言いにくいのですが…もしも私に何かあつたら、私に代わってあいつらに教えてくれませんか？考古学の全てを…我々が目指そうとしていることを…」

頼みごとなど滅多にしないイズルの口から出た本題はこれだった。情報交換は名目で本当は自分の跡を引き継いでもらいたいがための懇願である。レイファンもすぐに返答するはずもなくしばらく考えていた。それから慎重に言葉を選んで話した。

「イズル先生。まずあなたに聞きたいのですがそれは自己犠牲からの言葉ではないのですか？まさか…自分だけが死ねばいいと思っていないでしょうね」

「それは…」

「あなたは今まで一人だったから何でも自分ひとりで解決してきたはずだ…だからこのことも弟子に話さないで背負い込むつもりでしょう」

「…」

正論だったので何も言い返せなかった。

「あなたは弟子のことを信頼していますか？」

「はい……」

「本当に？」

「ええ……」

「なら……もつと腹を割って話すべきだ。あなたの弟子になったのなら危険は覚悟の上のはずです。こんな信頼関係を築き上げない状態であなただけ一人守る形で亡くなったら弟子は不憫だ。結局自分たちは頼られていなかったと知ってしまうのだから……守ることも大事ですが、一緒に歩むことはもつと大事だと思います。だから……申し訳ないが私はあなたの提案を飲むことはできません」

しんと重苦しい空気が流れる。イズルは人から意見されることがまずないので、久しぶりに怒られた感じだった。それがどこか懐かしくも感じる。

自分は何でもできると思い込んでしまい、驕り高ぶっていたのではないだろうか？そんなことを自問自答していた。

「確かに……虫の良すぎる話ですよ。すいません。」

自分の間違いに気づかされたことで反省しながらも少し吹っ切れた部分もあった。その表情は暗いものではなく明るかった。すつと立ちあがると身支度を整えると、鞆の中から数百枚の分厚いレポト用紙を取り出した。

「ここに…私の発掘現場と発掘物…その解釈と分析結果が書かれています。良かったら参考にしてください」

「ありがとうございます。後で私の研究結果と照らし合わせいろいろ仮説を立ててみます。その時にはもう一度お会いしましょう。その時は先生自慢の弟子も連れてきてくださいね」

「ええ…是非」

見送りにドアまで一緒に歩くと、去り際にレイファンは一言漏らした。

「選考委員会については私も探りを入れておきましょう」

「ありがとうございます」

そのままそこで別れを告げた。

イズルは帰り道を歩きながらここを訪れて良かったと思った。人との繋がり生きていく上で必要なだとも再認識させられた。

## 47話

数日後、イズルはレイファンと話したことを早速行動に移していた。

教室内に三人を呼び集めると自らが狙われている話を素直にした。全ての話が終わるとザツハが真つ先に口を開いた。

「それで…先生はこれからどうするつもりですか？もしかして…僕たちを解任すると…」

「できればそうしたい…しかし…私の本心は違う」

そこからイズルはゆっくりと話す。格好付けるわけでもなく体裁を保つこともせず。

「考古学という学問を目指してくれる人間を失うことは辛い…私の今生きる全てがこれなんだ…だから正直な気持ちは跡を継いでほしいのだ。三国の人間が手を取り合うことで実現できることも多い…お前らはその礎のような存在になるとも私は思っている…俊永は中立国家の…シズクは魔法国家の…ザツハは科学国家の…生まれた場所は違えども未来は共に歩める」

「しかし…危険も覚悟しろ…」

「そうだ…この先私に付いてくるということとは、命を落としかねないことが多発する。正直な気持ちだが、お前らを完全に守れるという保障はどこにもない。つまり…自分の身を守れなければ…死ぬと言ふことだ」

死という言葉に反応できないほど鈍感ではない。三人はそれぞれにいろんなことを覚悟し考えた。だが…三人の決断はイズルが自らの気持ちを正直に話した時に決まっていた。

「すまない…いきなりこんな話をされては訳が分らないだろう…しかし無理強いすることはしない…すぐに答えを出すことも難しいだろう…だから…」

そこまで言いかけるとシズクは割って入った。

「何言ってるんですか？そんなの最初から覚悟してましたよ。先生の教えに従うにはそれなりの代償が必要だってことは承知の上ですし…魔法国家の人間を舐めないで下さい。先生だけじゃないんですよ、優秀な魔法使いは！」

強がっている訳ではなく、当たり前のことだとシズクはそう話し、イズルを安心させた。するとザツハも続けて話した。

「僕も同感ですね…他の誰にもできない物を得ようとしているんです。危険もつきものですから…それに何もしないで死ぬほど愚かではありません。その熱血女とは違った形でそれなりの対処をします」

そして最後に残った俊永はというと、優柔不断な返答をすることもなければ曖昧な形で濁すこともなかった。今までの自分を振り返りながら真面目に話す。

「俺も…今まで目的が見えずただ漠然と生きてました。でも…先生が俺を認めてくれて道を指し示してくれたとも思います。だから…」

俺なりに不器用に前に進みますよ」

感傷的になって勢いに任せた言葉ではない。それは俊永が自ら選んだ道をはっきりと指し示すための言葉だった。

それぞれが自らの正直な想いと覚悟を口にした時イズルは、こいつらなら任せても大丈夫だと確信した。心のどこかに自分が何とかしなくては…そういう考えもあった。しかしそんな余計な考えを払拭させるだけの力があつたのだ。

数ヶ月前まではまだまだ学生気分抜けない子どものような存在がこつとも変わるとは…

そんな風に成長を感じ嬉しくも思っていた。

「そつか…」

肩の荷が下りた感じで力を抜くと、イズルの目には活力が生まれた。

「そこまでの覚悟ならこれ以上私から話すことはない。お前らなら十分やれる」

激励にも似た言葉を三人に掛けると、ザツハは最初の話に戻した。

「その先生を潰そうとしている連中に心当たりはあるんですか？」

「いや…それが…今のところないんだ。しかし…変な胸騒ぎがするんだよ…上手く説明できないが私の細胞が危険信号を発しているかのように…」

自分の感覚を信じているかのように話したが、確証もない話であった。しかしシズクはそれは間違いではないと共感していた。

「イズル師は三つも属性を扱えるほど自然と調和しています。それなら…人の持つ悪意を敏感に感じる事ができてもおかしくはありません。勘というよりもイズル師に向けられた思念を感じ取ったんだと思います」

「そんなこと人間に可能なのか？」

「人間も多感な自然の一部…しかし余計な知識を持つてしまったことで元々持っていたものをたくさん失ったというのが定説。しかし中にはそのまま残っている人間もいるの…だからイズル師の話も全て間違いじゃないと思うわ」

そんななシズクの後押しもありイズルは身に迫る危険をはっきりと認識し考えた。

「そうかい…なら早めにその元凶を探るかあ…」

「どうやってそれを？」

「選考委員会が絡んでいるのならそこを調べればいいだけの話だ。これから出向いて少し話を聞いてこよう…そうだ…お前らも付いて来い」

「いいんですか？」

「ああ…お前らの覚悟も知ることができたし…お前らは立派な弟子

だよ。だから知る権利もある。それにだ…選考委員会にはこれから  
も世話になるのだから内部事情を覚えておくことも良い経験になる」

今までのイズルなら足手まといになると思い連れては行かなかつ  
ただろう。しかし信頼関係が出来上がった今ならそんなこともない。  
三人を連れて選考委員会のある場所へと移動を開始した。



中立国家は、魔法国家と科学国家を取り入れた生活様式で、街の作りも風変わりであった。それはまるで自然と科学の調和のような不可思議な世界にも見えた。

建物は鉄筋コンクリートでビルも多数存在する。しかしその間に植物が生い茂り、まるでジャングルの中に飲み込まれた都会そのものである。それに川も町の中に流れていけば小高い山も存在するのだ。

極力自然を壊さない場所に建物を建設し、アスファルトをしかないようにした結果がこれである。電気も通っているし、家電もいくつがあるのだ、基本的な生活は科学国家に近い。しかし自家用車のような個人的乗り物は存在せず、生活に必要な作業車の類しか見ることができなかった。

そんな中を四人は歩き選考委員会の入っているビルを真っ直ぐ目指した。

一時間もしないで中枢部のその場所までたどり着いたが、初めて足を踏み入れるこの場所にイズル以外の三人は不安を感じていた。目の前に広がるのは周囲と変わらない十階に満たない普通のビルであった。選考委員会といえば、国の主要機関であるのだがそれにしてもスケールが小さいとも思っていた。

そもそも選考委員会には国を動かすような力などない。魔法使いや科学者の監督役を担っているので事務作業が主である。だからこの程度の規模で十分なのである。そして権力が一つに集中すること

が国家を揺るがすことに繋がるので、こういった機関は多数存在した。

「さて…行くよ」

イズルの合図で中に入るとそこは普通の会社とは変わらないような感じでセキュリティが厳しいものでもなかった。受付に行つて話をするとすぐに案内され、選考委員会の上層部の人間に会うことができた。

「久しぶりですな…水雲イズルさん…」

「ええ…ご無沙汰してました」

目の前にいる六十代の男にイズルはお決まりの挨拶をすると、早速弟子を紹介した。

「この者たちは私の弟子でして…これからご迷惑をいろいろお掛けすると思いますが、よろしく願ひします」

三人は男に向かって会釈をした。

「ほう…イズルさんも弟子を取る気になったのですねえ…私の勝手な見解かもしれませんが、あなたは一人で生きていける強い人だと思っていたのでね」

「こいつらは私の期待に応えられる逸材だと思つてますから」

「ほう…それはそれは…イズルさんの口からそんな言葉が出るとは相当ですね」

「恐縮です。それで無礼を承知でいきなりここに来た訳なのですが…短刀直入に話します。こちらの機関で私を潰そうと企んでいる者が存在するのです」

「ふむ…随分と物騒な話ですな…それで、その根拠は？」

「ここからは私の感覚と憶測で話すことなので信憑性はないかもしれませんが…しかし…選考委員会が意図的に私を排除しようとしているのは事実なんです」

「それは…公の場ということですか？それとも裏で殺そうと？」

「両方です…」

ただ事ではない雰囲気とその男もすぐに聞く態勢を整えた。

「私が弟子を持ったとたんによく弟子の能力検査が行われ圧力をかけようとなりました。そしてその後発掘先で雇われたであろうバ口に襲われました」

「ほう…もしそれが本当だとしたら、どちらも偶然とは言えないですねえ…」

「早く手を打たないと、私だけではすみません…バ口と手を組める者がここにいるとしたらまずいことです。内部から三国を揺るがす存在になってしまいます。私が出しゃばって話すことではないのですが、選考委員会も一度国民の審議にかけ身の潔白を明らかにするべきです」

「うーん…大きく出ましたね…」

「変わらない態勢っていうのは、心の弛緩にも繋がるということです。同じ環境に長く身を埋めると人は緊張感を失います…当たり前前の時間、当たり前前の対人関係、当たり前前の賃金…それらの全てが生きることの意義を鈍らせてもいるのです」

まくし立てるように話したつもりはないが、次々とイズルの口から出る選考委員会批判は流石に男にとっていい気分ではなかった。身内を批判されることで穏やかな気分でいられるはずもなく、多少ではあったが口調が強気なものに変化していた。

## 49話

「あなたがさつきから話しているのは、端から我々の中に裏切り者が存在するということですね。しかも国を裏切る程の大罪を犯していると…」

「ええ…」

「その話を信じると？」

「物的証拠は何もありません。こればかりは私の勘を信じて欲しいと言っしかありません」

そこまで話すと会話が急に途切れ、男も黙り込んだ。曖昧な勘を信じると言うイズルを信用していいのかどうか分らなかったのだ。

「正直…難しいですね…物的証拠がなければ国民の審議に掛けられるだけの材料にはならないのはあなたもご存知でしょう。三国を納得させるだけのものがなければ虚偽罪であなたが逆の立場になってしまう恐れもある…」

イズルに身を引くように柔らかく話そうとした結末がこの会話に現れていたのだが、イズルは引く気はなかった。逆に殺気を孕んだ空気を漂わせた。

「……………」

これには男も敏感に反応する。根負けしたかのようにため息をつきながら、イズルの意図を探った。

「まあ…いいでしょう…それで何が望みですか？」

「この前の能力検査を行う発案を出した者の名簿です。きっとそこに画策した者がいると思うので…」

「分かりました。数分待つてください」

そして男は部屋を出ると、五分も経たない内に戻ってきた。その手には短編小説ぐらいの厚さの資料が握られていた。

「これですが…くれぐれも私が差し出したことは内密に…それと…もしイズルさんの話したことが事実だとしてもその者に個人的に制裁を加えることは遠慮してもらいたいのですが…」

その言葉がイズルには引っかけた。組織内でもみ消そうとしているのではないか？そんな考えが浮かんだ。自分の言葉を信じていないくせにおいしいところだけを持っていこうとしている。こんな態勢ではこの組織もいずれは駄目になるだろうとも予見していた。

「何故です？」

睨むイズルの表情は厳しかった。男の思惑が簡単に想像できるだけに腹立たしかった。

「私は先ほど…あなたに国民の審議にかけ選考委員会の身の潔白を明らかにすべきだと忠告したはずです。しかし…あなたは私の声に耳を貸さない…それなら私がその者を探し出して、私がどうするか決めます」

眼光に力が入るだけで男の寿命を縮めてしまうかのようだった。それだけイズルも選考委員会という組織体制に幻滅してしまった部分があり、組織を立ち上げてしまった群衆の愚かさを呪った。

「ふうー……そこまで話すならそれなりの覚悟があると……もしもそこまで啖呵を切って何もなかったらその時はあなたの立場がどうなるかはお分かりでしょう？」

最後の抵抗とでも言いたげに男は苦しくもそんなことを話した。しかしイズルは取り乱すこともなくいたって普通だった。

「ええ……私をここまで過大評価してくれたことに何の未練もありませんよ。元々私は人々に崇められるほどできた人間でもありませんね……」

「いいでしょう……それならばあなたが何も結果を残さず次にここを訪れた時にはあなたの権利は全て剥奪します。それで……よろしいですね」

「はい」

迷うことなく返事をすると、そのまま四人はぞろぞろと部屋から出て行った。

## 50話

イズルは部屋に帰ってからもらった資料を眺める。

そこには能力検査を立ち上げた人間の名前が五名あったが誰も知らなかった。

「お前ら…こいつらの名前に何か覚えはないか？」

俊永たちにそんなことを話すとザツハが真つ先に一つの名前に食いついた。聞いた名前だと反応したのだ。

「先生…このリハエルド・ロツチって最近失踪事件の噂になった人じゃないですか？」

「ん？誰だそいつ？私は新聞を読まないから世間の事件つてのに疎いんだよ」

「何でも数日前から行方不明になったらしいです。痕跡も残さないで、忽然といなくなったから事件に巻き込まれたんじゃないかと話されてますが…本当に知らないんですか？」

問い詰められてもイズルにはさっぱりだったようであっさりと答えた。

「悪いな…自分のことで手一杯だからさ…」

ザツハも部屋の状態を見ていればイズルが手一杯なものも納得がいった。それからそれ以上の有力な手がかりがないので、そのリハエ



ルド・ロツチについて調べることにした。

「よし…それならお前らはこいつの素性を調べてくれ。もしも何もなかったら他の四人の情報も集めるように。それまでは授業は休講とする。その代わり他の授業はちゃんと出るよ…」

「先生はどうするんです？」

「私は…バロと接点を持ってそんな人間の情報を集めてくる…そっちの方が大事だからな。それと…お前からロツチって奴の情報が揃っても勝手に動くなよ」

バロを警戒してのことかそのように忠告をした。

それから三日、ザツハは科学国家らしくあらゆる情報をネットで検索し、シズクは魔法国家らしく魔法使いを通じて選考委員会の情報を集めた。一方、俊永は何もできない。コネもなければ技術もない。ただただ日課をこなすだけの日々だった。そしてザツハとシズクは有力な手がかりをそれぞれ手に入れてきた。

それから学校ではなんだからと中心部にある飲食店に集合した。

## 51話

「僕は彼の生活面での情報を集めたから、そこから話そうか…」

「うん」

「まず…金銭面で最近羽振りが良くなっている。これを見て…」

ザツハは紙を一枚取り出すとそこにはどこから調べたのか、ロツチの買い物明細が細かく書かれていた。

「三ヶ月を境にお金も激しく動いている。現金を通帳に入れてはいないんだけど彼の収入以上のお金を使っている。これってやっぱり…」

「裏金ってこと？」

「だろうね。公に知られたくないお金だね。と言うことは…何かあるってことだ」

「ねえ、これ、どうやって調べたの？」

「科学国家とまではいかなくても中立国家にもある程度電子機器も充実しているからねえ…」

「ここは自分の専門分野とでも言いたそうだった。それからザツハは通話記録やら雑費などの金の動き、定期的に行く場所を調べた紙を取り出して話す。」

「それと…ロツチは誰かと密会している可能性もある。きっとその裏金の相手だと思うけど…」

「誰かまでは分らないんでしょ？」

「僕が出来るのはここまでだ…データを集めてそこから可能性を推理する。しかし有力な手がかりであるとは思うけど…そういう君はどうなんだ？魔法使いの仲間から何か聞き出せたのか？」

「情報というか…今回の件を知人に相談したらちよつとした魔法を教えてもらったわ」

それが何の役に立つのか二人には分らなかったが、シズクは続けて説明した。

「残留思念って知ってる？」

「人の強い思念が留まって残っているっていうことだな。一般的に幽霊とも言われているけど…それが？」

「その残留思念を探して追跡する魔法を私は教わったの。説明すると長くなるから端的に話すわね…」

「そう願いたい」

「人の思念と言うものは生きていても死んでいても強く残ることがあるわ。それは電波のように波動を常に出していて人の脳にも反応を与える。そしてその思念は人によって様々で一人ひとり違うものな…でも私の教わったものは特定の人間の放つ思念を探し出して痕跡を追うっていうことができる魔法なの」

「まるで僕たちの国のように理論的だな…」

「うるさいな…魔法も科学と似ている部分があるのは昔から知ってるでしょ」

「無神論者になったらそのことに同意してもいいがね…」

何かとザツハはシズクに噛み付いたが、シズクはそれを無視した。すると俊永はシズクの魔法について聞いた。

「それで…その魔法でロツチの思念は特定できるのか？」

「勿論よ！彼の思い入れの強い身近な物さえあればね！」

「物？」

「そこから彼の思念を検出して同じ思念を追うってことよ」

「ああ…なるほど…犬みたいだな」

「い・い・犬って何よ！こっちは匂いで追ってる訳じゃないのよ。魔法を使ってるんだってば！」

偉そうに話しても俊永の話したことが分りやすかったので、ザツハもくすくすと笑っていた。そして怒りの矛先は真っ先に俊永に向けられ、鉄拳により俊永は地面に崩れ落ちた。

「ひびく…」

「人を獣扱いした罰よ。あんたも何かの役に立ってよね……たく……」

それでもシズクの教わった魔法は役に立つことは間違いなかった  
ので、早速三人はロッチの住む場所まで歩いていった。

## 52話

閑静な住宅が立ち並ぶ中に一つのマンションがあった。ここはそれなりの収入がなければ入ることも難しいような高級感の漂う造りであった。

暗証番号や鍵が必要なのだが、そんなものは何の障害でもないとばかりにザツハは三つのブロックをことごとく撃破した。

「これで中に入れるよ……」

「凄いのねあんた…泥棒にでもなったら？」

「無理だし、余計なお世話だ」

そのまま分厚い鉄製のドアを開けると靴を脱いで中に入った。

目の前には長い廊下があり正面に一つ左右にドアがつつあつた。それだけで広い間取りだということが想像できた。

正面のドアを開けるとそこには二十畳ばかりのリビングが目の前に広がった。

「うっわ…広いな……」

俊永の素直な気持ちがあるまま言葉に出た。すつきりとしたリビングにはゴミ一つ落ちていなかった。そしてきれいに整えられた洗濯物、雑誌、小物類を見ただけでロッチという人間が几帳面なのだということが理解できた。

「イズル先生に見習わせたいな……」

「同感」

部屋の景観だけでそんな話題になってしまった。それから三人はロッチの手がかりになる物がないか探った。

「これなんかどうだ？」

俊永はサイドボードの上にあつた埴輪を手を取った。

「センスゼロね。どう見てもそんな物に思い入れがあるはずないでしょ」

その物自体にロッチの思念を微塵に感じることもないシズクは却下した。

「こんなにきれいで何も無い部屋に想いの強い物なんて存在するの  
か？」

俊永は逆切れにも似た口調でシズクにぶつぶつと文句を話した。  
一方でザツハは棚の中に見えるように並べられた食器類を見てある  
ことに気づいた。

「ロッチは骨董品が好きだったのかな？」

「え？」

「食器類が分けられている。観賞用と日常用に……見てみて、あっちの

棚に並んでる食器類は使われた形跡がないけどこっちにもある…」

キッチンの引き出しにたくさん入っている皿やコップを見てそう話した。

「なら…試す価値はありそうね」

シズクは綺麗に飾られた高そうなコップを一つ手に取った。見れば埃一つ指紋一つついておらずロッチの扱いがどのようなものだったのか想像させられる。

「手袋でも履いて持ってたのかしらね…まあいいわ…」

そのまま意識を集中させるとコップからきいんと共鳴に似たような音波が飛び出す。それはシズクにしか聞こえない。他の二人は黙って見ていた。

それからシズクは小瓶を懐から取り出すと、コップから現れ出た白い煙のようなものを小瓶に吸い込ませた。すぐに栓を閉めるとそれを見て喜んだ。

「うん…上手くいったわ…」

未だに何をしていたのか分らない二人はぼかんとしていた。

「ふうーん…ずいぶん面白みのなさそうな男らしいわね…」

小瓶を眺めながらそんなことを呟いたので、俊永は聞いた。

「それで…それが…その…思念って奴なのか？」



「ええそうよ。人によって色が違うし大きさも違うわ。単色の人がいれば混ざり合っている人もいる。色はね…その人の全てを現すものでもあるのよ」

「へえー…ならお前の思念は絶対黒だな」

はははと笑っているとシズクの鉄拳がすかさず飛び俊永の顔面にめり込んでいた。

「冗談はさておいて…ここからが本番。この思念を使ってより大きな思念を探してもらおうのよ。小さな思念はより大きな思念に引かれるらしいからね」

そこまで得意そうに話していたが、ザッハはどこか解せないといった表情をしていた。

「おい…シズク。素朴な疑問なんだがどういう概念からそれが可能なんだ？僕にはさつきからお前の話がちんぷんかんぷんだ。そもそも人の思念が実体化するなど考えられないのだからな」

そんな科学者らしい質問にシズクはうんざりした様子だった。

「頭の固い科学者はこれだからねえ…そんな理屈私ができるわけないじゃないの。この世界はなんでも数字や理論で解決できないことぐらい覚えておきなさいよ。今までにだって不可思議な出来事は山のようにあるじゃない」

「そうなんだが…」

「人は何かしらの目に見えない痕跡を常に残しながら生活している。それでいいじゃない」

まるで全てを上手くまとめたような話をする、三人はそのままそのマンションを出た。そして彼の職場の側まで歩くと、痕跡を追い求める旅に出ようとした。

「手がかりがあるとしたらここからよ……」

「そう上手く探せるものなのか？」

「何もしないよりはましよ！」

「イズル先生には連絡は？」

ザツハは律儀な性格なのでそのことが引っかかっていた。しかしそんな心配をあしらうかのようにシズクは楽観的だった。

「まだ何も起こっていないから大丈夫でしょう」

こうして三人は何の気なしにロッチの失踪の手がかりを探ろうとし始めた。

## 53話

一方でイズルはバロとの繋がりを持つ者の元を訪れていた。

そこは中立国家の暗黒街とでも言うべき場所だった。見た目は普通の廃墟ビルの立ち並ぶ場所で時代を感じさせるところでもあった。

廃墟のビルはたくさんの植物に飲み込まれまるで元々そのような建物だったかのように思わせるぐらい馴染んでいた。石畳もコケでびっしりでそこには鳥のさえずりしか聞こえない。人の気配などは感じられずイズルの足音だけが響いていたのだが、イズルは急に足を止め叫んだ。

「いるんだろ？ ヴインセントよ」

誰もいない廃墟にイズルの声がかたまっていた。そしてその音に反応したのか何羽もの鳥がばさばさと飛び立った。それと同時にイズルは背後に違和感を感じてもいた。間違いなく誰かがいる。

その予想は正しく確かに誰かが立っていてイズルに話しかけた。

「ほう…これはこれは…久しいな…友よ」

気配もなく背後に立たれたのはそうそう経験するものではなかったが、声の主にはイズルは相変わらずだと驚きよりも懐かしさを感じていた。

「やはりここにいたのか…もうかれこれ三年振りだが未だにここに住んでいたのか」

イズルは振り返ると目の前の人物に話しかけた。

見た目は少女そのもので、人形のような透き通る肌、青い目、そして黄金の長い髪を持っていた。幾多の戦歴を持っているかを表すように自然体にも関わらず微塵も隙が感じられない。だからこそイズルと対等に話せているのかもしれない。

「面倒なんだよ…あちこち移動するのは…」

「まったく…お前らしい…」

久々の再会を嬉しくも思っていたのだろう、イズルからは笑みが自然とこぼれていた。

「イズル…お前からの用とは珍しいな。どういう風の吹き回しだ？」

「いやあ…私も結構切羽詰っていてな…少し情報が欲しいんだ。なに…空手じゃなんだからこれも用意している。久しぶりにどうだい？」

差し出したのは赤ワインだった。しかも数十年前のビンテージ物で価値もそれなりにあった。

「ほう？気が利くな…勿論、チーズもあるんだろうな？」

そう言うのが早いかイズルは銀紙に包まれたチーズを差し出していた。

「流石…なら時刻も早いが始めるか…」

まるで儀式でも行っかのように二人は焚き木に火をつけそれを囲んで食事をした。パンとチーズ、生ハムを肴にワインを飲んでいた。

「はあ…久しぶりの酒だ。ここらでは美味しい酒も好みのチーズも手に入らないからな」

「いつまでこんな生活を続ける？お前ほど優秀なら駆け引きでも何でもして元の生活に戻ればいいじゃないか…」

イズルは友人のぼろぼろの衣類を見ながらそんなことを気に掛けた。

「知ってるだろ？俺は国に失望したんだよ…だからこんな生活で十分さ…あそこにはもう居場所はない」

ヴィンセントはその昔イズル同様に中立国家の期待の星だった。バロについての研究を主に進めていたのだが、研究を進める内に国家に対する疑念が強くなっていた。

そんな状態だったので崩壊の危険はすぐに迫っていた。

きつかけはヴィンセントの親しい友人だったのだが、その友人は様々な観点から三国の組織体制に意義を申し立てた。ある程度の平穩も保たれ群集も納得をしていただけに、このような人間は反逆者と思われても仕方がなかった。その意見に賛同するものは誰もいなかったのだから。

煙たがられるだけでは済まず、存在そのものを否定される行為を幾度となく繰り返され精神的にも追い詰められてしまった。だから

身を引くしかなかったのだ。どの国にもいられない状況になってしまったので自ら三国を飛び出したのだ。

それを後で知ったヴィンセントは怒りを覚えた。自らも選考委員に訴えかけたり、同業者に話しかけたのだが誰一人聞く耳を持たなかった。

所詮は自分の身を守ることで精一杯なのだ分った。国家が大きくなればなるほど、生活は安定するが、権力がどこかに生まれてしまふことは必然だった。一見、民衆中心の国家作り思えるのだが、裏ではいろんな人間の欲によって国家が動かされてもいた。それを膿だとヴィンセントの友人は思っていたし、後に知ったヴィンセント本人も同意見だった。

そんな権力が存在することがヴィンセントはたまらなく嫌だったのだろう。だから自ら身を引くことを決意し俗世間から姿を消したのだ。

「あの時は…私も自分のことで手一杯だったからなあ…」

イズルは振り返るようにそう話した。

「お前はそのままでもいいんだよ。私に気を使うことはない。それぞれの思想は自由なんだ」

イズルの立場のことも考えて気遣うヴィンセントにイズルはつくづく感心した。

「ふ…やはり適わないな…私はまだその域に達することができない…未熟な自分が恥ずかしいよ」

「酔いが回ったのか？お前らしくもない。人の意見に左右されることもないだろうに」

「年を取るとい自分が正しいことをしてきたのが分らなくもなるのさ…純粹なままのあの頃が懐かしいけどな」

## 54話

昔を思い出していた。イズルとヴィンセントそして国家に大罪のレッテルを貼られた友人は同じ境遇で夢を見ていたのだ。いずれは人の役に立てる素晴らしい人間になるのだと。

「あいつは…本当に純粋な奴だったな…」

数年見ることのないもう一人の友人を懐かしく思う。

「私は結構好きだったんだ。異性としてじゃなく人間としてな…」

ヴィンセントからそんな本音がぼろりと飛び出しイズルは食いついた。

「お？何だその照れ隠しみたいな発言は…」

「うるさいな…素直な気持ちと話したただけだ。変な勘ぐりは止めてくれ」

「はいはい…」

空になったグラスにワインを注ぎながら空返事をした。

「それで？本題は何だ？まさか昔話に花を咲かせようとしている訳じゃないんだろ？」

「ああ…ちょっと困った事態になってな。どうも選考委員会のメンバーの中でバロと接触している奴がいるんだよ」



「ほう…それは興味深いな」

「情報がほしいんだよ…バロに詳しいお前ならばと思ってな…」

そこまで話すとヴィンセントは難しい顔を見せた。

「ここははっきりさせておきたいのだが…私は中立の立場だ。バロとも国家の人間ともな…そのことは承知のはずだよな？」

「ああ…重々にな。しかしだ…今はそんな体裁の話はどうでもいいんだよ。私はともかく私の弟子の命に関わる問題だからな」

「弟子だと？お前…まさか…弟子を持ったのか？」

「そつだ」

「自分主義のお前が？」

「悪いか？」

「いや…驚いたな…お前だけは絶対に後継者など求めないと決め付けていたからな」

まさかといった様子でヴィンセントは信じられなかった。

「だからだ。最近の情報を教えてくれ！」

滅多に下げない頭を下げてそう話す友人を目の前にしては流石のヴィンセントも断ることはできなかった。

「分ったよ…お前のその驚きの告白に免じて教えるよ」

ほっと胸を撫で下ろしながらイズルは進展できたことを喜んでいった。一方でヴィンセントは自らの情報を集めた端末の機械を取り出すと、イズルのお目当ての人間をワードで探し出す。

「ん…どうやらさっきお前が話していたきな臭いことは実際に起こっているようだ。選考委員会のメンバーの一人はバロと密接関係にある者と癒着がある…そしてそのバロとの仲介役を買っている人間は中立国家に何度も出入りして、ある所を根城にしているらしい」

「そんなところまで分るのか？」

「まあな…詳しくは話せないが、そいつは選考委員会のビルから数キロ離れた国立博物館に隠れているらしい。これは…私の勤だが…そいつは選考委員会に関わる人間を全て壊す気にいるんじゃないか？」

「どつして？」

「こいつは…純粹に国家を怨んでいる。お前はついでもかもしれないし、お前を殺してもそこで終わりってこともないだろ…」

「ついであって…随分な扱いだな」

「何にしても…国家からみたら危険人物なんだろうな。その癒着していた選考委員会の人間も消えているとしたら殺されたな…」

「しかし…なら何でこんなまどろっこしいことする？国家をひつく

り返そうとするならひっそりとやればいいじゃないか」

「そんなの知るかよ。私はいずれにしても双方に肩入れをする気はない」

「分かってる…」

「ふう… 国家がどう揺らぐかを見たいのもあるが、酒を飲み交わせる人間がいなくなってしまうのも困るな…」

そんなことを悩んでいたが、イズルはヴィンセントがそういう公平な立場であることを重々承知だったので突っかかることはしない。

「陳腐なことしか助言できないが、強いものは必然と生き残る。勝算など知らん。お前の信念が勝つか向こうの執念が勝つかだな…」

くいつとワインを飲み干してそんなことを口にした。

「そんな変わらないお前が羨ましい… 私は大人になることで一つずつ枷を身に付けていく気分なのだからな…」

自分の歩んできた道のりを思い返し皮肉にも話す。しかしヴィンセントの見解は違う。イズルは長いものに巻かれて生きてきたのではないとはつきりと感じた。

「そうかい？ 俺からしたら、素直な気持ちを話せるようになっただけでもお前は成長してる。昔のお前は自分の弱さなど口にはしない。そして他人の心配もすることなかったからな。飾る気のない本当の言葉はその人間の真の姿を現すんだよ…」

その言葉はイズルの心を軽くする。ありがたい。その一言だけが浮かび上がり口元は自然と緩んでいた。

「ふ…お前の方が幼く見えるのに…まるで母親のようだな…」

「幼いは余計…私の方が不器用な生き方をしてしまった分、お前に諭すことができるだけだ。目的は済んだんだろ？それなら早く行けよ」

照れ隠しをしているようにも見えたがイズルの言葉を嬉しくも思っていたようだ。

「イズル…お前が友人だからといって肩入れするわけじゃないが…お前のしていることは間違いじゃないよ、きつと…な…」

「ありがとうな」

## 55話

俊永たちはイズルの聞いた情報の場所である国立博物館に足を運んでいた。

思念を閉じ込めた小瓶はこの場所を的確に指し示し三人を誘導していたのだ。夕方からすっかり夜へと姿を変えてしまった周囲は街灯も点々としていたが、暗くてよく見えなかった。

「門限の時間過ぎてるけど…」

腕時計の時刻を見てザツハはそんな心配をした。

「馬鹿じゃないの？ここまでできたならそんなこと言ってられないですよ。何か掴んでからじゃなきゃ帰れないわよ」

「はいはい…」

暗闇の中の博物館の周りをうろつくと回っていた。流石にこの時間に訪問するのは誰もいないので、正面の扉は閉ざされている。幸いだったのは、警備員などが全くいないということだ。重要な文化財があるわけでもなく、高価な物も存在しないこの博物館には物取りが入ったところで大した痛手を追うことはないと思っっている結果でもあった。

簡単に施錠されているその扉も頼りない感じですが、簡単に壊すか、開錠できそうだった。

しかし三人はすぐに正面には向かわずまずは周囲の様子を観察す

ることから始めていた。

「とりあえず怪しいものはないよね。思念体の反応は建物の中に向いているから…このまま中に入った方がいいかしら？」

一周し終わり正面に戻ると、ザツハは携帯パソコンをいじりながら何かをチェックしていた。

「警備系の装置はどこにもなさそうだし…しかし…本当に無用心な国家だな、ここは…」

自国と比較してそんなことを話した。

「あのね。ないのに越したことはないでしょ。それなら、中に入って調べましょう。ザツハこれ壊さないで開錠できる？」

扉の目の前にある錠前を指差しそう質問したが、ザツハは首を横に振った。それを見るなりシズクはため息混じりに指先をこすり合わせる、勢いよく錠前に向かって手刀を振るった。

それと同時に堅い金属は両断され、地面に二つに分かれて落ちた。

「はいはい…さあ…行くわよ」

何事もなかったかのように振舞うシズクに俊永は圧倒されていた。大人しくその後ろをついていった。

目の前に広がるホールは暗く、明り一つなかった。大理石でできた床がこつこつと靴の音を響き渡らせる。流石にこの状態で歩くのは危険だと体が察知し足が止まる。

「ザッハ！」

まるで差し出した煙草に火を付けると言わんばかりにシズクは命令する。するとそれを忠実に再現するかのようにはザッハはアルケーエミツシオンを光らせ即席の灯りをそこに作る。

「おお！便利だな……」

こんな使い方もあるのだと俊永は感心していた。

「アルケーエナジীর火の属性を使えば簡単だよ。それよりもさつきシズクはどうやって錠前を壊した？まさか素手ってことはないだろう？」

「んな訳ないでしょ。あれは、水を高圧力で出したのよ……規模も程度も小さい簡単な魔法で大したものじゃないわ」

「なるほど……そういう使い方もあるということか……」

ザッハも感心しながら歩いていた。魔法の効力が自分の扱うアルケーエミツシオンとどのように違うのか分析しているようにも思える。

館内には人の気配など感じられないが、シズクの手に行っている小瓶は目的地を求めてひたすら方向を指し示す。一階をほぼ回りきると二階に続く狭い階段が見えた。

「階段か……シズク。思念体は？」

「上を指してる……」

そしてそのまま二階へと歩いた。二階は一階の展示室とは違い資料室やら倉庫の部屋が多数あり、一般人が入らないように関係者以外進入禁止の札で仕切られていた。

「ん……ザツハ…灯り消して」

「え？いいのか？」

「早く」

二階に上がる階段を上りきる前にそんなことをシズクは話すので、ザツハは戸惑いながらも灯りを消す。

「何かあるのか？」

俊永がそんなことを聞くと、シズクは足を止めて無言で口をひとさし指を当て静かにするように促した。

「思念体の反応がすごく強い…絶対にここにロツチに関わる何かがあるわ…それに…何かの気配を微かに感じる…」

「ロツチか？」

「分らない…でも…誰かがいるのは間違いない」

こんな時間に残っている職員もいなければ客もいない。だとしたら誰なのだろうか？そこから考えても普通の人間でないことには違いなかった。それだけで警戒心も高まり三人の気構えも変わっていく



る。一歩一歩の時間も普段の倍以上、微かな音にすら気を配り神経を尖らせていた。

「ロッチ本人ならいいが……」

ザツハの言葉に二人は心の中で同意していたが、それは分らない。見えない恐怖に怯える形で二階を見回す。灯りを消してしまったことで何も見えないので、壁に手をつきながらゆっくりとシズクを先頭に歩いた。

「思念はこの先の部屋を指している……この反応の大きさと本人に近いと思うけど……断定はできない。それに……空気が淀んでいるような気がする……気を抜かない方がいいわ」

魔法感知に敏感なシズクがそのような話をするだけで、全てが的を射ている気がした。しかし俊永は別の違和感を感じていた。

口にこそしなかったが、人とは違う何かを匂いのようなもので嗅ぎ取っていた。

獣？それに近い存在を感じる…しかしやばいものがある。

俊永の心臓が次第に高鳴り、足が進むのに比例して緊張感も高まってくる。ぞわぞわと自らの周囲にまわりつく圧迫感を取り除きたかったがそれを許さない。気配と殺意が膨れ上がり四肢の動きを奪うようだった。

シズクが先頭に立ち歩き、周囲を警戒しながら忍び足でゆっくりと奥にあるドアに手を掛けようとした。その時、後ろにいた俊永は、はつきりと感じ叫んだ。

「下がれ！」

ドアノブに手を掛けようとしたシズクはその声に驚き、びっくりとその手を離れた。

「な…何よ！」

俊永は説明している暇などないと思い、すぐにシズクの元へ駆け寄ると手を引っ張りドアから引き離れた。その勢いでシズクは後ろにしりもちをついたが、それと同時にぼんっという爆発音に近い音と共に鉄製の堅いドアから何かが突き破って出てくる。

「ぐう！」

ザツハと俊永は壁に張り付いた。シズクはドアの破片から身を裂けるように方腕で顔を覆った。

飛び出したのは単なる衝撃に過ぎなかったことを表すようにドアには無数の穴が開いていた。そしてそのままぎざぎざと錆び付いた音と鳴らしながらゆっくりと無人でドアが開いた。

シズクはすぐに立ち上がるとドアの正面には立たなかった。また何か飛び出すのではないかと警戒していたからだ。

しんと静まり返る廊下は暗闇がより一層三人の恐怖心を煽っている。ザツハはアルケーエミツシヨンを取り出し、シズクも魔法の詠唱準備を整えながら、自らの心拍数も必死に落ち着かせていた。

誰も動けない状態になってしまったから数分。硬直した状況を破るようにドアの奥から声が聞こえた。

「入るがいい…初動を避けたお前たちに免じて、一気に殺すのは止めてやるう」

低く太い男の声だった。

三人は互いに顔を見合わせるだけで声が出せなかった。もしかしたら罠かもしれない。ここで動けば攻撃されてしまうのではないかという考えがあったのだ。しかし声の主はそんな三人の考えを許さない行動に出た。

「入らないのならそれでもいい…すぐに殺してやるだけだ。訳も分らないままに死を望むと言うのならその意思も尊重しよう」

声の主は待つのが嫌らしい。だから答えを急かす。しかし殺意は本物なので脅し程度ですまないことはその場にいた全員が分った。いろんな打開策を考えても思い浮かばずもなく、その申し出にシズクは真っ先に動いた。

「分ったわ… 入るわ。だから…」

念押しをして自分たちの安全を確保したかった。

「攻撃はしない。お前らなどいつでも殺せる…」

こうして三人は大人しく部屋の中へ足を踏み入れた。

部屋の中は広がった。研究室らしく下のフロアに負けない広さを持っていた。しかし暗闇のせいもあってかその広さを十分に目で認識することができなかった。

声の主は見えない。暗闇の中に身を潜めているのだと思い、三人の心臓は止まりそうなくらいに速く動いていた。それだけの雰囲気相手を持っていたのだ。

「月明かりで十分だろう？」

そう話すと天窓から月明かりがすっと部屋に入り込み、真っ暗だった部屋が一瞬明るくなった。

「う…」

三人は驚いた。目の前には大きな初老の男が立っていたのだ。し

かも隠れていた訳ではなくずっとそこにいたのだ。自分が隠れる必要がどこにあるのだと言わんばかりの自信といつでも殺せるという言葉が嘘ではないくらいの気配を漂わせていた。

まるで殺意の塊だった。一瞬でも気を抜けば殺されるぐらいの…だから目が離せないし気も抜けなかった。

## 57話

「水雲：イズルの弟子だな？」

男がそう聞いてきたので素直に答えた。

「ここまでたどり着いたということは…リハエルド・ロツチのことだな？」

「そうだけど…あ…あなたは誰？私たちを殺したいみたいだけど…」

声が少し震えながらシズクは男に質問した。

「殺したい？それは違うな…俺が自らの欲求で殺したいのは水雲イズルだ。そこから考えればお前らはおまけみたいなものだ」

「イズル師の関係者ってこと？」

「想像に任せよう…」

「あなたがイズル先生を陥れようとしていたんですか？」

ザツハは敵にも関わらずいつものように敬語を使う事を止めなかった。

「素直に答えるなら…そうだな…」

無精ひげをいじりながらザツハを睨んだ。

「何が目的なの？イズル師の不利になるような状況を作ったり、バ口を使って殺そうとしたり…まどろっこしいことして！」

「俺なりの復讐さ。俺から出向いて殺し合い。それもいいだろう。しかしそれではつまらない。数年にも及ぶ俺の心を満たすだけの行為に値しないからな。状況は徐々に作り上げていくから達成感があるのだ。地位を崩し、弟子を壊し、絶望の中で殺してこそ本懐に繋がるのだ…過程の純度を高めるからこそその達成感だ」

自らの復讐の概念を話す男であったが、当然三人はその会話についていくことなどできなかった。

「イズル師をそこまで怨む理由は何？」

どんどん突っ込んでくるシズクに男はイラついた。

「おい！自惚れるなよ…ちょっと教えたから何でも話すと思うな。そこまでは、お前らガキに教える必要はない…俺の復讐心だけを知れば十分だろう？」

自らの心のうちを晒したくないのは明らかだったが、それ以上追求することはできなかった。だからあえて話題を変えた。

「ロツチはどうなったの？行方不明になっただけ…」

「知りたいのか？…それなら奥の箱を見るがいいさ」

指を指すと暗闇の奥に旅行鞆サイズの木製の箱があった。どう見ても人間一人が入れるサイズではない。三人の瞳孔は大きく開いた。そしてあらゆることを察したのだ。それと同時に三人の背後には死

の恐怖が張り付き、目の前の男の残忍さを無理やり脳裏に植え付けられた。

「口づるさい上に無能だったからなあ…さて、お前らはどうかかな？」

「…」

「俺の予想ではイズルが現れるまでには相当時間が掛かるはずだ。多少の抵抗はしろよ。無抵抗な人間をいたぶるのはあまり気が進まない…」

狂人はゆっくりと足を進める。これが開戦の合図だったのだろう。恐怖に体が動かない三人の思考は鈍っていた。相手の力量も分からない上に気持ちで負けている。このままでは容易く餌食になるのが目に見えていた。

そんな中で真っ先に動くことができたのはザツ八だった。元々の心構えのせいもあってか他の二人に比べていくらか冷静を保っていた。ザツ八の選択肢の中に戦うというものは始めから存在しなかった。だから退却の行動を数種類用意していたのだ。

懐から閃光弾を取り出し三発投げつけた。暗闇に走る眩い光は相手の視界と同時に俊永、シズクの視界も奪った。しかしザツ八は二人の手を握ると部屋の外まで誘導した。

僅かな距離を離れるだけでも相当の労力だった。しかし生きるための一歩ではあったので、そのまま階段まで一気に駆けた。

だが…荒れ狂う風が通路を覆う。



「うわあ！」

三人の体はまるで紙のように舞い上がる。暗闇の中では上にいるのか下にいるのか分からない状態だったので着地などできるはずもなく、体を床に思い切りたたきつけた。

「こほ…」

背中を強打することで呼吸もままならなかった。

ドアの向こうからは目を手のひらで覆っている男の姿があった。まだ視力が回復していないのは明らかだったが、シズクも俊永も同じだった。だからザッハは動く。

アルケーエミッションを最大限にまで威力を開放し、男の立つ八方の座標を素早く打ち込んだ。

八重座標指定。これは箱状に相手を取り囲むような攻撃が炸裂する。逃げ場は存在しない最大の攻撃であり、避けることは不可能とも言われていた。

火の属性の能力を極限まで引き出し、最大温度を高めた炎は触れただけで消滅させる勢いだった。そんなものに目の見えない状態で囲まれた男だったが、取り乱すことはしない。

右腕を大きく振るう。たったその動きだけで自分を中心に竜巻を起こすと、全ての炎をかき消した。

「なっ…」

死なないまでもにしても多少のダメージは与えられると思っていただけにこの結果はザツハの心を砕いた。

だから反撃に対応もできない。襲い掛かる風の追撃をまともに食らったのだ。

風圧はザツハの体ごと壁を突き破るほどだった。薄い壁とは言え、数センチのコンクリートを砕く力があるのは相当のものである。

ザツハは抵抗することなく脇の部屋に瓦礫と共に気を失っていた。

「ザツハ！」

見えないがザツハがやられたことを知ったシズクは叫んでいた。

「シズク！固まるな！離れる」

俊永はリアルな死に直面したことで今までのような鈍い動きをすることはなかった。脳内は活性化され生き残るための行動を探していた。薄っすらと見える周囲の様子を伺いながらも二人が一緒にいることは得策ではないと判断し叫んでいたのだ。

だから二人はその場から離脱すると両側の部屋に別々に入る。

「くくくく…賢いなあ…そうでなければ…イズルの弟子とは呼べない」

見ていないのに二人の行動が分かるかのように、両目に手のひらを当てながら男は笑っていた。

もしもそのまま二人が狭い階段に向かって走っていたのなら男の餌食になっていたのは違いなかった。分かりやすい退路ほど狙いやすいものはないのだ。それから間もなく男は動く。

「さあて…徐々に視力も回復してきた。鬼ごっこを始めようか…」

無人の廊下を見渡しながら男は自らの欲求を満たそうとしていた。ゆっくりと歩いてシズクの逃げた部屋に目をつけるとドアを開くことなどしない。触れることなくドアの周囲の壁ごと風圧で壊した。

そして目の前の崩れ行く壁をシズクは絶望の目で見ているなどしなかった。必ず一矢報いる…何もせずに終わらない。そういった強

一念に似た想いを抱きながら策を練っていた。

「アクア…デウス…ランケア！」

数秒で魔法の詠唱は既に済んでいた。

シズクの手には水で出来た神の槍が握られると、戦闘態勢の整わない標的に向かって一気に放たれた。速度、破壊力、出すタイミングとして申し分ない。相手が並みの人間ならば体には大きな穴が開いて即死だろう。

もらった！そう心の中でも大きく叫んでいた。

しかし相手は並みの人間ではなかった。殺戮に秀でた人間であり常に死を間近で感じている特異な生き物だった。だから凡人の考えなど手に取るように分かる。殺しの気配をいち早く察知すると自らの体を風の盾で覆うと最強の矛の支点をずらす。神の槍とも言われた最強の攻撃も些細な力の方向変換に逆らうこともできない。

「え？」

シズクの渾身の一撃は空しく標的を外す結果となった。最大の魔法だっただけに奪われた精神力と体力は相当のものである。

一撃必殺のこの技を避けられては追撃の力も出なかった。だから集中力を僅かに欠いてしまったのだ。

シズクは感じた。自らの体が疾風に包まれ目の前が真っ暗になるのを…

「あー！」

思考がついていくよりも先に体は暴風に飲み込まれ意識を刈り取られる結末となっていた。シズクの体は三回転すると奥の壁に激突していたのだ。体が壁に跳ね返るとそのまま床に倒れこみ動くことはなかった。

「終わり…かな？」

瓦礫が落ちる音と共に男は笑いながらそんなことを話した。

残された俊永は動けなかった。二人のように抵抗する武器もなければ能力もない。何ができる？肉弾戦を持ち込むのか？ぐちゃぐちゃといろんなことを考えて見ても現実は変わらない。そこには顔色一つ変えない殺戮に長けた者の姿がある。

「もっと实力を見たかったのはあるが…俺はそこまで余裕を持てる人間じゃないからな。さて…お前は どうする？見たところ死闘の場に何も持ち合わせていないようだが…」

「う…」

「呆けているだけか…ちっ張り合いのない。もう面倒だ。さっさと済まそう」

会話を引き伸ばすこともなかったの、俊永の延命の余地はなかった。男が手を上げて俊永を狙い撃ちしよう構えたが、俊永は何もできなかった。

明らかな実力差は体の動きすら止めてしまっていた。気迫で飲まれ、更には自らの退路が見えないほどの殺意が俊永の肉体に向けら

れていた。

どこに逃げようとも殺される。それをはっきりと感じていたのだ。

「死ね！」

男が勢いよく手を振り下ろそうとした瞬間に天井の窓ガラスが突如割れると何かが二人の間に割って入った。

「むっ……」

冷静な男もその音を聞いては、びくんと体が拒絶反応を示すかのよう動きを止めてしまった。空から舞う天井の窓ガラスが月明かりを浴びてきらきらと光ながら落ちてきて、登場した人間を神秘的な存在に思わせる。ひらりと軽い羽のように着地を済ますとすかさず俊永に話しかけた。

「お前ら……私の話を聞いてなかったか？」

「先生……」

俊永はどこかほっとした様子でイズルの顔を見た。

「水雲……イズル……」

男は憎悪と殺意に満ちた目で派手な登場を見せたシズクを睨みつける。一方でイズルは冷ややかな目で男を見ると何かに気づいた。よく知った顔だ。真っ先に浮かんだのはそのことだった。

十数年振りに見る友人の姿だったが確信はなかった。しかし自然

と声は出ていたのだ。

「お…お前…デュラス・カーチスなのか？」

自分の良く知っている人間にしては風貌が変わりすぎていたせいか、確認をしたが男はすぐに答えようとしない。敵を目の前にして軽々しく口を開いていいものか考えていたのだ。

「何故お前が、私を陥れようとする！私は…お前のことを探していたんだぞ？あの日からずっと…まさかこのことをヴァインセントも知っているのか？」

ヴァインセントの名が出ることでデュラスは口を開いた。

「あいつは関係ない…知るはずもない。国家から死刑同然の仕打ちを受けた俺に会えるはずもない…しかしな…お前は別なんだよ。俺と同じ目に合わせるまで、殺しだろ？が何でもするさ」

デュラスを動かしているものが純粹な復讐心ということが伺える答えだった。それだけにイズルは悲しかった。

自分が何をしてここまで彼を追い込んだのが分からない。かつての友人をここまで変えてしまった出来事は何だろ？いくら考えても答えがみつかることはなかった。

「分からない…何故私がそこまで怨まねなければならない？私が何をした！」

イズルもつい口調が強くなり相手に迫った。

「くくくくく…何をした？それを俺の口から答えさせるのか？あ！」



怒りが沸点に達したのか、言葉の勢いと共に近くにある壁を拳で粉々に打ち砕いた。冷静さは既に失い、いつ飛び掛ってきてもおかしくない緊迫した状況になってしまった。

「……」

俊永もこの様子を見守りながらとんでもないことが起こるのではないかと気が気ではなかった。

「頼む！教えてくれ！私は…何をした！」

イズルが強気のまま己を貫くことはしなかった。逆に自らの落ち度を感じたのか、それとも好奇心がそうさせたのか素直に教えてもらうように頼み込んだ。

そんな反転の行動が功を奏したのかデュラスの心が僅かに動いた。あの日のことを思い出し…自分を振り返る。

「俺は…別に国家をひっくり返そうなど考えていなかった。ただ万人に平等な世界を求めた…訴えかけた…それなのに…それなのに…自分の保身ばかりを考える人間が増えてしまったことでそんな世界は理想でしかないことに気づかされた。それだけならまだ一人よがりの身勝手な発想だったのだと諦めもつく…しかし…」

そこから険しい表情が更に変化する。瞳孔は大きく開き奥歯を思い切りかみ締めていた。

「お前は俺の容姿の変貌振りに驚いただろ？それはそうだ…同い年なのに見た目は老人の手前だ…副作用のせいで俺の細胞は一気に

老いに向かっているんだよ」

自らのしわだらけの手のひらを見ながら話す。イズルも知っている頃のデュラスはもつと若々しくすつきりとした顔立ちをしていて爽やかな感じだったので反論できなかった。

「人体実験だ…訳の分からない仮説の証明のせいで俺の体はいじくられたんだよ。思い出すだけでも怒りを通り越して笑ってしまう…人の存在自体を亡き者にして更にそれを利用して肉体までも奪い去ろうとするのだから…」

それは驚愕の事実だった。ヴィンセントから聞いた話だとデュラスは国家を追放される形で終わってしまったからだ。それに長年三国家を行き来しているのに人体実験という言葉は耳にしたことがなかった。

「ちよつ…人体実験だと？なんだそれは…三国を通しても私の耳にはそんな話は入ってこない」

「ある仮説を立てた者はこう話した。『古代人には今にない遺伝子が存在し、それを現代人は薄められた形で受け継いだ…もしもその欠落した遺伝子を補うことができれば人は更なる高みを目指せる…』と。そしてそんな曖昧な仮説は絵空事ではなく本格的に動き出した。何人も犠牲者を毎日出してな…だが当然の如くあいつらは死者を省みない、物のように扱い同じ行為を何度も繰り返し、屍を数十人と築き上げて止めることなどしなかった。頭がいかにしているとはこのことだ…数ヶ月に及ぶ薬物投与やら脳内をいじくる行為は人体に多大な影響を与え、現に俺の目の前で何人も人間が副作用でくたばった。発狂し、自らから命を絶つ者も珍しくない…そんな中で俺は一年も閉じ込められていた。あそこで正気を保つことは極

めて難しかった…」

シズクはそんな施設が存在すること自体知らない。非合法で人間のやる行為ではないことを平然とやれるその集団は一体何なのか…そのことが頭の中を駆け巡っていた。

「俺の精神と肉体は思った以上に強靱だったらしく…簡単には薬物にやられなかった。それが幸か不幸か…しばらくの間生殺しの状態が続いた。でも…俺は諦めなかった。このままくたばったらただの負け犬だろ？あいつらやぶざけた仮説立てた奴を殺すまで死ぬわけにはいかない。そう思っただけで生きる活力が自然と湧いたよ…あいつらは自分の力を過信しすぎた。だからその驕りが仇にもなるのだ…」

それから話されるたのはデュラスの逆転劇だった。

「自分たちの理論は完璧だ：そう話すのが癖の優男はいつも俺をガラス越しに覗いていた。自らは手を下すことなく俺らのくたばる姿を笑いながらいつも見ていた。だからあいつを絶望に落としてやつたらどんなに気分がすっきりするだろうと常に思っていた。そしてそれは現実に移すことができた：俺の遺伝子の欠落が偶然にも補われた瞬間にな」

「ごくりと唾を飲み込み、普段冷静なイズルですらその話の続きを聞くのを躊躇った。しかしその話をするデュラスは今思い出しても嬉しいといった様子で話した。

「俺の体に蓄積された復讐の力がまるで具現化されたように風の獣として現れた。それをあいつらが予想することなどできない：荒れる風の獣は獲物を貪るように襲いかかったよ。俺の意思のまま自由にな：これほどの快感はない。目の前で自分を物のように虐げてきた者が、自分たちが優位の立場に立っていた者が恐怖におののく姿を見たのだからな」

「なら…そいつらは…」

「聞くまでもない。そいつら全てを原型も分らない形に変えてやったよ：しかしだ。国家側の人間のお前がこの話を聞いて俺を軽蔑するか？殺したいと思うか？どうだ！自分の保身のため：国家のため：人が人を物のように扱う権利がどこにある？人の命を奪う権利のある者は自分が死んでもいい覚悟のある奴なんだよ。お前はどうかんだ？権力や功績に取り囲まれてがんじがらめなんじゃないのか？弱い者など見捨てられるほど非情になっただんじじゃないのか？」

「くっ…それは関係のない話だ。私が聞きたいのはもっと根本的な話だ。私がどうして怨まれなければならないのだ？」

「会話の中にもヒントはいくつもあつたのに気がつかないとは…お前も所詮、犠牲者を道具にしか考えないのだろうな…」

「そんなことはない！私は…権力や保身に逃げたことはない。自分の信念だけを生きてきたことを誇りにしているんだ。曲げられないことは私にもあるんだ」

「そうか…それは大層立派な理念だが…俺には関係ない。お前が俺を地獄に追い詰めたきっかけには違いない」

「どこがだ！確かに私は国家側の人間になつたが、そんなやましい集団との係わりはない。誓つてもいい！お前がそのような仕打ちを受けていることなども知らなかつたし、そんな集団が存在したのも知らない…それなのにどうあつても私を怨みの対称にしたいのか？」

自らの身の潔白をするようにイズルは大声で訴えかけたが、デュラスは自らの怒りの矛先はそこではないとすぐに話した。

「自らが無関係と言いたいらしいな…しかしだ。先ほど話した仮説…元々はお前が打ち出したものだ」

「え？」

「お前が考古学という学問を元に古代の文明を明らかにすることで科学者が…魔法使いが…興味を示すのと同時に人間の本質に近づきたくなつたのだ。遺伝子に関わる理論までも打ち出したのだからな」

だからお前は知らないでは済まされない…その分野を先導してるのだから。そして…お前が存在しなければ無数の罪のない人間も死ぬことはなかった」

「ちよつと待て…それでは被害妄想も甚だしい。私は自らの学問を純粹に後世の人間のために残したいと思っただけだ。そこに欲望も野望も存在はしない！」

「それならば知らない奴らが勝手に行った行為だから目を瞑れといたいのか？そんなことで済まされる話ではないの」

「いのは分かるだろう？それだけならまだしも…俺たちは必死にあの施設の存在を地上に向かって訴えかけたのだ。何人も人間が犠牲になり屍を築き上げる中でたった一人の男があそこから脱走した。」

「そして中立国家の自衛組織に訴えかけた。ぼろぼろの姿でな…あの時お前はあそこにいたはずだ。記録にも残っていた…」

「イズルは大量の記憶の海の中から合致するキーワードを手繰りよせるようにして探した。すると一つのワードが浮かんだ。」

「自衛組織…ネクサスのことか？しかしあそこに属していたわけではない…」

「ああ…数ヶ月の慰問のはずだ…中立国家の警備を見直す監督を任せられ、お前は滞在していた。その時にその男は訪れたのだ」

「ぼろぼろの…男…」

するとイズルの頭の中にそんな状況があつたことを微かに思い出した。しかしそれは明確ではないために自信もないし自分が会話したのかも記憶にない。

「男は違法な組織が出来上がっていることを必死に話したはずだ。何人も人間が犠牲になっっていることも…非人道的なことが行われていることも…しかしだ。門前払いするどころかバロとして扱いその話を詳しく聞くこともなく即刻射殺した」

流石にイズルは拳を握り締めて反論した。

「まさか！そんな出来事があれば私の耳に入ってくる。何かの間違いではないのか？」

「あの自衛組織はすぐに解体されてしまったが…その時に属していた人間を脅したら口を割った。そしてイズル…お前にも話は通したらしいがお前は…あっさりと捕らえるか殺した方が良いと助言したらしいぞ？」

「嘘だ！…そんなことはしていない…」

あの当時はイズルはめまぐるしく忙しく動いていた。自らの学問を立ち上げ、形になりつつあるので各国を飛び回り信用を売るためにも様々な業務に手助けをしていた。だからそんな中の小さな出来事など覚えてはいるはずもなかった。

イズルの耳に入ったのは、「表で訳の分からないことを話して暴れている者がいるのですがどうしたらいいですか？」という会話だった。そしてそこにいた者は口々にバロなのではないか？と変な勘ぐりを入れてしまう。群衆のいらぬ憶測が飛び交う中で普段は冷静に物事を見れるはずのイズルもその時ばかりはいつもと違った。

そこが全ての始まりだった。

## 61話

忙しさもあつた。判断も鈍っていた。確認も怠つた。その結果イズルが下した決断は、

「すぐに捕らえるか、しかるべき処置をしなさい」

そんな短い言葉だった。

「それは…抵抗するなら殺してもいいと？」

「相手にその危険性があるなら…止むを得ない。そもそもこの国の自衛はまだまだ甘すぎる。バロもそうだが、民間人の暴動にも耐えられないようでは真つ先にテロ行為も頻繁に起こる。弱い部分を見せては付け入る隙を与えかねない。だから…強気で責めることも必要だ」

中立国家の未来を考え、自衛の意味での姿勢を促していたのだが、そこで大事なことを見落としていたのだ。その男の話を直接聞かなかった。

もしも自分の耳でその男の言葉を聞いていたのなら別の選択肢もあつただろう。しかし又聞きを繰り返し、錯乱状態の人物だと教えられればイズルも出向くことなくそのような決断をしてしまう。

男は必死に叫んでいた。

「頼む！聞いてくれえ！俺は地下に存在する組織に捕らわれていた。そしてまだ何人も人間が実験の対象になつて殺されそうなんだよ



「早くしないと死ぬ人間が…どんどん増えていく」

警備員に懇願し迫るのだが、男はがつんと殴られ地べたに這い蹲る。

「いい加減にしろ！お前の戯言をいつまでも聞いてられるか。どこにそんな証拠がある？そんな話し聞いたこともない」

「そうだ…悪ふざけならそこまですておけ！」

「冗談でこんなこと話すか！頼む…信じてくれ！信じてくれよ。そうじゃなきゃ何のために俺だけがここに出てこれたのか…これじゃあ意味がないんだよ…死んだ者にも申し訳が立たないんだよお…」

涙を流しながら自らの話を聞いてくれるように何度でも頭を下げた。地面に頭をこすりつけ、額に血が流れるほどに。

その様子を伺いに来た新たな警備員は、イズルの決断をそこにいたものに言葉ではなくサインで伝える。

それを見た二人の警備員はサインを読み取り黙ってこくりと頷いた。

「なあ…上のお偉いさんにも掛け合ってくれ。その場所まで俺を連れて行けばこの話が嘘じゃないってことも分かる…」

男は顔を上げて話すが、二人の警備員の目は冷たかった。

「中立国家の住民の認証カードもなければ、魔法、科学国家の者とも認識されずだ…そんな者を信用できると思うか？」

「だから！何度も話しただろ！俺は全てを奪われたと！過去も…身分も…何もかも…何故信用しない。何故嘘だと決め付ける！」

「バロの疑いもあり…内部からのかく乱を狙った行動とも取れる…」

「ふざけるなよ！演技でこんなことできるかあ！」

一向に自分の話を聞いてくれない二人に怒りがこみ上げ、男は感情のままに思わず飛び掛ってしまった。それは最悪の状況だった。男が一人の警備員の胸倉を掴んだことでもう一人はすぐに反応したのだ。

「き…貴様！」

もう一人の警備員は自衛用の拳銃を抜くと躊躇うことなく引き金を引いた。そして三発、標的に向かって銃弾は発射された。

乾いた音が周囲に響き渡ると、男は地面に倒れてそのまま動かなくなつた。

「あ…あ…あ…」

男の視界には地面しか映らない。銃弾は心臓を貫いていたので死は免れなかった。

救えない。逃がしてくれた者たちの命も無駄になった。自分は何のために…ここに来た？どうして自分の話を信じてくれない。こんなにも必死に訴えかけているというのに…

「ち…く…しょう…」

最後の執念がそうさせたのか震える腕を必死に上げて警備員のズボンの裾を掴もうとしていたが、それも叶わずそこで力尽きた。

「お…おい…死んだのか？」

真つ赤に地面を染めて動かなくなかった男を見て怯えながらそう話した。

「ああ…しかし…あいつはお前を俺を殺そうと迫ってきたんだ。しようがないだろ。上からの命令もあつたからな…」

拳銃を抜いた男は死んで当然だと話した。

「そ…そうか…上の…命令なら仕方ないよな。でも…お前大丈夫か？その…人を殺した訳だし…」

相方の心理状態の心配をしていたが、そんなことを気にするなどあくまでも冷静に対応していた。

「悪いが…このことを報告に行ってくれないか？二人でここを離れるわけにもいかないしな…」

「あ…分かった。すぐに報告して誰かを呼んでくる」

そう話して一人は持ち場をすぐに離れたのだが、残った男はほつとしながら笑みを浮かべていた。

「危ないなあ…事前に報告が来てなければ秘密が全部ばれるところだったじゃないか」

死体を見ながらそんなことを一人呟いていた。

## 62話

この男はあの研究所の関係者だったのだ。極秘に進める研究に必要なのは情報の漏洩である。それを防ぐために自衛組織に何人か忍び込ませていたのだ。しかしそのことがきっかけてイズルは誇張された情報を耳にしていたのだ。

研究所に属する男は脱走した男を殺したかったので、そのように仕向けるような優位な発言に変えていた。だからイズルが判断を誤ったのも仕方がなかったのだ。

しかしデュラスはそれを許さない。

「所詮…自らの立場上での言い訳しかできないのだろう？お前はそうやって自分の地位を大事にしてきたんだよ！」

「それは…」

手違いだと言いたかったがきつと何を話しても無駄だろうと察して止めた。

「偶然にも生き残った俺に出来ることは知れたことだろう？俺は間違っているのか？どうだ！答える。イズル」

「くっ…」

かつての友人が自分を殺す勢いで迫っている。しかし自分は悪くないなどとは言えない。ヴィンセントはデュラスのことを心配して自ら国を捨てている。しかし自分はどうだ？積み上げた地位に身動

きが取れなくなり踏みとどまってしまったのだ。

これが裏切りではないという証明にはならないのだ。

「地位を捨てられない…それは本当かもしれない。しかしだ！自らの指し示す道を見つけてしまったんだ。こればかりはどうしようもないんだ！」

「くく…ははっ…そこまで言えるなら立派だよ…しかしだ。貴様に…毎日拷問を受けるような苦痛が分かるか？いつ殺されるか分からない恐怖で寝られぬ日々が分かるか？あの地獄を味わえば人など変わってしまう…俺はもうこの国に復讐しなくては気がすまないんだよ」

「選考委員会を内部から壊す気か？それで国を変えるつもりか？」

「手はずは整っている。そのためにはお前にも死んでもらわないとお前が殺したことにするんだからな…国家の英雄が暴挙に出ることで内部からの混乱も容易に作り出せる。そうすれば後はバ口を使ってこの国を正面から崩せばいい…お前には国家を怨むだけの理由がもうできているしな」

「まさか…そのためにあの弟子の能力検査を行ったのか？」

「…じゃなきゃこんなまどろっこしいことするか。自らの学問を亡き者にされることで反逆するかつての英雄。大した見出しになりそうだ…さて…話も長くなってしまった。騒ぎが大きくなる前に片付けるとしようか」

会話の半ばでデュラスは自らの殺気を一気に解放した。

「なっ……」

常人ならこの突風が自らの体に当たるだけで正気が保てなくなるだろう。しかしイズルは耐えていた。この雰囲気は飲み込まれないように必死にデュラスの目を見ていた。

「ほほう…流石だ…俺から目を逸らさないとは…普通は気迫に押されて目を逸らすんだがな…」

動いてはいないのにデュラスの殺気はどんどん大きくなっていった。イズルは初めての体験だった。人の殺気が生きているかのように蠢き、移動していた。

「デュラス…お前…体に何を宿した？」

イズルの頬を汗が伝い恐怖心を露にした。

「愚かな者たちが禁忌に手を出した結末だ…神に等しい力を手に入れたと勘違いしてなあ。だがどうだ？ほとんどの奴らが死んでしまった…」

「しかし…お前の体もその力によって蝕まれているのではないか？」

現にデュラスの体は老いが急激に早まっていた。この流れではあと数年で死ぬ運命である。

「自らの命などもう捨てている…あそこで俺は死んだんだ。だから死んだ人間の怖さを教えてやるよ…」

「やはり運命は変えられないか…いいだろう…それならここで決着をつけようか…俊永！」

イズルは怯える俊永に向かって大声で叫んだ。

「二人を連れてここを離れる…私とてお前らを巻き込まないであの怪物と戦える自信はない」

「う…あ…はい！」

俊永は震える体を無理やり動かすと、シズクの元へ駆け寄った。そして抱きかかえるとすぐに安全な場所まで運び出した。

「弟子の心配を最後までするとは…そんなに考古学が大切か？いらぬ知恵を掘り起こすことで俺のような犠牲者が増えるかもしれないというのに…」

「悪意を持って利用すればそうなる。しかし…人が人であるために自らのルーツを知ることが大事なのだ。そうでなきゃ何のために我々がここに存在しているのか分からない。意味はあるんだ…私はそう考えている」

「下らん。欺瞞にしか過ぎない…」

俊永は二人が話している隙にザツハも連れ出すことに成功した。イズルが相手を威嚇することで注意を背けてくれているのだ。



## 63話

「なら問おう！デュラス。お前にとっての人間とは何なんだ？」

話に熱が入りイズルは人間のあり方について問い詰めた。しかしデュラスは冷静に周囲を見回し確認すると、

「そこまでにしようか…お前の算段どおりに弟子は全てここから出払った。それなら何の障害もないだろ？」

あくまでも逃がす時間を待ってやったとばかりに笑った。そして昔の自分を思い返しながら話す。

「俺とは違い…ヴィンセントとお前は同じ中立国家出身だったのに特異な体質だったなあ…実に懐かしい！」

デュラスは右腕を大きく振るう。すると凄まじい衝撃波がイズルをかすり背後の壁を無数に切り分けてしまった。

「あの頃の俺と思うなよ…」

分厚い壁が粉塵を撒き散らしながら重低音と共に崩れてきた。それと同時にイズルの背筋も凍りついていた。今の攻撃が全く見えなかったのだ。風の属性はイズルも扱える。しかし全く別物だということを知った。風を認識したから体も自然と反応していた。

「風の属性を最大限に引き出しているのか？しかし…これは魔法ともアルケーエナジーとも呼びがたいものだな…」

見たことの無い力にイズルも力が入る。的確に見極めなければ死ぬ事以外の選択肢がないのだから当然である。

「俺の意思で自由に動き回る風の獣…カマイタチ…こいつは目にも見えないから厄介なんだ…そして俺の生命力で生きてい。だから…俺が死ねばこいつも死ぬ…」

「もしかして…お前の老化が早まっている原因は…」

無駄話をしすぎたと、デュラスはそのまま風の獣を自由自在に操る。イズルが知りえる情報は微かな気配と予測以外しかなかった。これは幾度の戦闘で培った経験がなければ成しえなもので、イズル以外の者なら反撃もできずに数秒で細切れになっていただろう。

皮膚を何度も鋭利な風がかすり恐怖心を積み重ねる。その間にもイズルは魔法での反撃を試みて術者に向かい上級魔法を二つ同時に放つ。

土の神を宿した右手と風の神を宿した左手で繰り出される連撃。しかしデュラスは自らの体も風の膜で覆い。魔法の衝撃をまるでなかったことのようにしてしまった。属性の相性の悪さもある。風を無効化する属性をイズルの能力では持ち合わせていない。だから自分に掛けた結界の魔法もことごとく分断される。

集中力を切らさずに数分攻撃を避けていたイズルも無数の見えないう圧力に押し切られ胸元を数センチの深さで横一線に切られた。

「くう！」

悲鳴をあげたことのないイズルが声を漏らす。しかしそのまま痛

みの余韻に浸り動けなければ頭が胴から離れる結末を迎えるのだが、何もせずに死ぬつもりはさらさらないという強い信念があった。そこからすぐに距離を取り再度反撃の魔法を発動させる。

右手の埴安神の力を最大限に引き出すことで床や壁のコンクリートがまるで生き物のようにデュラスを飲み込む。

しかしデュラスはそれらの全てを風の力でかき消す。まるで自らを台風の目にしてイズルの技を力をことごとくなくさせたことにしてしまったのだ。

その一部始終を見てイズルは決断した。こいつにはもう生半可な技や力は通用しないと。

博物館の二階は既に半壊してしまった。壁や天井、床は至る所が碎けて風通しが良くなっていったのだが、デュラスはまだまだ力を抑えているようにも見えた。

「息切れをしているな…まさか限界という訳ではないだろうな？」

出血と魔法の連発によりかなり体力を消耗していたらしく、見えないようにはしていたがデュラスに感づかれた。そしてデュラスは間を空けることなく距離を詰めると今度は肉弾戦に持ち込んだ。

「三国の英雄とまで崇められたお前が…」

右拳がイズルの顎をかする。しかしそれだけでも脳内を揺らすのに十分だった。胸の切り傷の痛みと平行してイズルの体は意思とは反対に動こうとしなかった。がくと腰を僅かに落とす。

「何も持たない俺に負ける姿はさぞかし悔しかろう！」

腹部に向かつて放たれた横蹴りは当然の如く直撃した。鍛え抜かれたイズルの腹筋でなければ内臓破裂を起こしていたのだろうが、それで体は宙を舞っていた。

「ぐうああ！」

背中をまともにコンクリートに叩きつけられ土にまみれた。それから更なる追撃にデュラスは走った。

その時俊永は三人を外に運び出していた。気絶した二人は思った以上に重く運ぶのに時間がかかったのだが、裏庭の芝生の上に寝かせるとほっと一息ついた。

ふとイズルのことを気に掛け施設の二階を見上げた。堅いコンクリートに覆われた中の様子はここからは分からない。音もほとんどしないのでどのような戦況なのか予想もつかなかった。

このままここを離れ助けを呼ぶことは簡単だ。しかしその間にイズルがどうなるのか想像もつかなかった。きっと無事では済まないだろう。現にデュラスのことを思い出すだけでも両足は震えていた。あれほど殺すという意味表示を全身から出している人間に出会ったことはなかったのだ。百戦錬磨のイズルでも分の悪さは素人目でも感じ取れた。

しかしこのままでいいのだろうか？あれほど自分のことに親身になつてくれた人間は今まで存在しなかった。自分の生き方を変えたと言つても過言ではない。そんな人間を見捨てるような形をとつても…様々な葛藤が生まれていた。

だけど自分がここで行ったところで足手まといになる。イズルならきつと何か策を持っているに違いない。俺がここにいてもそれでもいいんじゃないか？自分を正当化させる考えが浮かび上がってもいい。だが、俊永の足は何故かイズルたちの戦いの場に向かっていた。

まるで足の震えをかき消すかのように強い足取りで一步一步を踏みしめた。

## 64話

ふざけんな！俺は何もしてないじゃないか…シズクもザッハも戦い傷ついているのに俺だけ無傷だ？

その場の状況に酔ってしまったのかもしれないが、自分を変える何かが欲しいという願いが形になったのだ。迷いが断ち切れ一つのことにしか集中しない人間は強い。俊永はすぐに二階に駆け上がり、戦いの場を姿を見せたのだ。

「ん？」

そこにはデュラスに頭を足で踏みつけられている血まみれのイズルの姿があつた。体には先ほど以上に斬られた傷が増え、動くこともままならないのは一目瞭然だった。デュラスは俊永の突然の訪問に気づきそのまま視線を移した。

「お前…逃げたのではないのか？」

踏みつける足に力が入るとイズルが声も上げられずに苦痛に表情を歪めていた。

「残念ながら…お前の師匠は見ての通りだ…もう戦うこともできない」

お前は場に相応しくない人間だと言いたげな様子だったが、俊永の怒りは徐々に腹の底からこみ上げていた。

「それで…お前は何をしようというんだ？」

睨み付けるだけで俊永など萎縮して動くこともできないと思っていた。しかし俊永は戦いの場に生半可な気持ちを持ち合わせていなかった。どこか吹っ切れたという感じもするが、そうではない。イズルを救うことだけを考えていたのだ。

「俺は…先生を助ける。助ける！」

俊永は打算、計算そんなことはお構いなしとばかりに何も考えずに突っ込んだ。その動きを見るなりデュラスはイズルの頭部から足を離すと小ざかしいと片手を振るい風の獣を操る。しゅんつと空気の切れる音がする。

そんな見えない風の斬撃に俊英は横っ飛びで対応する。しかし完全に見切れていない分、足を斬られてしまった。

「ぐ…」

肉を数センチ斬らせたが、まだ足は動く。だから止めるのを止めない。先ほどよりもデュラスとの距離を縮めたのでそのまま突っ込んだ。

「愚かな！」

デュラスは再度間近に迫る俊永に向かって風の獣を解き放った。

「うー！」

結果は無残なものである。俊永は血を撒き散らしながら空中を舞っていた。不幸中の幸いだったのは至近距離だったことで風の斬撃は力を最大限に出し切る前に俊永の体に当たっていた。

そのため俊永の体はばらばらにならずに済んだ。傷は浅く、衝撃波によって後方に跳ね飛ばされたのだ。それでもその衝撃はすさまじく肋骨の数本を折るだけの力があつた。

「ぐううううう……」

地面に転がると俊永は激痛で体が思うように動かないのに気がつく。いくら気持ち前を向いても体は正直である。機能が低下すれば動かなくなるのだ。

「ちくしょう…ちくしょう…」

何もできない自分に悔しさがこみ上げる。

「しゅ…俊永…」

イズルは朧な目で俊永を見ていた。愛弟子が苦しんでいる姿を見ることはイズル自身も辛かった。地べたを這いながらもふるふると手を伸ばす。

そんな二人の姿を見ていたデュラスはとんだ茶番劇だと怒りを露にする。

「イズル…弟子の心配をしている場合か？お前が死ぬのが先なのだぞ？」

その言葉を聞いてイズルははっと我に返る。こいつは自分だけでなく自分に関わる者全て殺そうとしていると気がついたのだ。



「デュラス…私の命はくれてやる…だから弟子は見逃してくれ」

「都合のいいことだ…俺の同胞は無残にも殺されたのだぞ？お前の軽はずみな一言でなあ」

「それとこれとは違う！私は今の話をしているんだ！」

「どの道、お前に関わっている人間は殺す…逃げた弟子もお前のを追わせる」

「くっ…」

二人が揉めている間に俊永はあることに気がついた。懐に忍ばせていたあの古代の代物という一本の棒に亀裂が入っていたのだ。先ほど受けた衝撃のせいでもあったのだが、今まで見えなかったものが見えていた。

「これは…」

ぱらぱらと木片が剥げるとそこには鋭利に尖った金属が入っていた。それと同時に金属はまるで俊永の体に反応するかのように光る。

毎日触れることで、意識することでこの木片はただの木片でなくなっていた。不意に俊永の脳内に稲妻のように何か流れ込む。するとまるでそうすることが当たり前のように俊永はその金属を手にとると迷うことなくそのまま腕に突き刺した。

金属は突き刺さるのではなく、俊永の体に入り込んだ。

「ぐう！」

その瞬間、俊永の目の前は真っ白になる。全身が脱力し気絶したかのようにも見えたが違った。どくんどくと何かが体内を駆け巡るのだが、その力に逆らわないように体を預けていた。

時間にしたら数十秒だったのだが、細胞が覚醒し押し殺していた力が湧き上がる。痛みはもう感じなかった。ゆっくりと起き上がると俊永の体は熱く火照っていた。

まるで自分の体ではないようだ。そう思いながら両手を握り力が入ることを確認した。

デュラスは俊永の体の異変に気がついた。だからイズルの会話を中断し倒れている俊永の先に視線を移した。すると俊永はゆっくりであったが立ち上がっていた。

「はあ…はあ…はあ…」

その様子から見ても普通でないことは明らかであった。だからデュラスもすぐに動くことはしなかった。

俊永の肉体に見た目の変化はなく、傷も癒えているという訳ではなかった。しかし体の芯から放たれる雰囲気そのものが違った。殺気など肌を突き刺すような感覚ではなく穏やかな空気と自然との調和を基本とした清しいものを感じさせる。

そのことにはイズルも驚いた。

こんな独特の空気を放つ者を見たことがない。まるで触れればやさしく取り込まれてしまいそうだと感じた。

俊永本人は特にそのことに気がつきはしなかった。しかし自らの体に変化が起こっているのだけは分かった。自分は力を手に入れたのだろうか？それも分からない。ただ、先ほどのような死の恐怖を感じなければデュラスの殺気に飲まれることもなかった。

体が軽い…視界も広い…思考は無の状態に等しい。

## 65話

「ほう…何をしたか分からないが…まるで別人だ。しかしその力…お前も足を踏み入れたのだな…古代の力に…」

「古代の力？」

「俺と同類ってことだ…だが…目覚めたばかりの力にはどんな能力があるのか自分自身も分からないものだ…その間に…」

デュラスが床を蹴り上げると、俊永の目の前に現れる。俊永はそれを目で追えていない状態だったので、ただ立っていた。

「殺す！」

腕を床すれすれから上に向かって振り上げると風の斬撃が俊英の体に突き刺さる。

「む…」

しかし体には触れていない。無傷で俊永は事なきを得ていた。それを見るなり俊永はほっとしながらも後退する。

「運のいい奴だ…風の間隙に入ったか…」

デュラスは逃げる俊永を追いかけるながら、四方に両腕を振るい逃げ場のないほどの風を巻き起こす。

床も壁もチーズのように切れる。俊永は態勢を崩しながらもどう

にか軌道上からそれようと動いた。そしてまたもやデュラスの攻撃は空回りで終わったのだ。

「…」

その時点でデュラスはおかしいことに気づいた。自分は間違いなく俊永の体を捕らえるように攻撃をした。一度のミスなら分かる。しかし二度も自分がミスをした覚えはない。確実に俊永の体が寸断されてなければおかしいのだ。

それが自分のミスなのか俊永の能力なのかそれを探るためにもデュラスは更に俊永に接近した。

戦う経験のない俊永の動きなど非常に読みやすい。だからその先回りをしてデュラスは待ち構えた。

「うあああああ」

俊永の振るう拳をかわすとそのまま足払いをして地面に倒す。逃げ場はない。この状況でミスはない。だとしたらどうなる。そしてそのまま手のひらを俊永の体に見掛けて無数の斬撃を一気に放つ。

「な！」

次の瞬間、俊永の体にその斬撃の全てが取り込まれてしまった。まるで吸い込まれるかのように肉体には皮膚には傷一つない。それに驚いたのはデュラスだけではない。俊永本人も驚いていた。死ぬという感覚が過ぎるだけにこの不測の事態は胸を撫で下ろす結果となっただのだ。

俊永はその余韻に浸ることもなくデュラスの腹部を蹴り飛ばして立ちあがった。

死の恐怖を乗り越えた俊永の心臓はばくばくと激しく鼓動していたが、目線を相手から外すことはしなかった。そんな簡単なことを怠るだけで死んでしまう状況なのだ。

デュラスはというとすぐに動くこともせず ゆっくりと俊永の方を見た。

「そうか…」

そこで氷解した。

「お前の体…五大元素を吸収するようだな…」

「五大元素を吸収？」

「目覚めたばかりで気づいてないようだが…厄介な能力だな。科学も魔法も関係のない体とは…だが、吸収、解離、反発、…原子レベルで考えればそのようなことも起きても不思議ではない。古代の力にはそこまでの高みがあるのだから…」

「そんな力が…俺に…」

無我夢中で気がつかなかった俊永には実感などない。たまたまそのような結果になったとしか思っていなかった。

「しかし…それだけなんだよ。お前の力は…」

不意にデュラスの姿が消える。いや、そうではない。視界に移らないほど速い動きをしたのだ。風の力を利用し自らの体を高速移動させたのだ。

俊永の背後に瞬き一つで現れると、鋭い蹴りを背中に放った。

「ぐう！」

俊永の体が浮くと、勢いよく地面に転げまわった。当然、何が起こったかなど理解はできなかったから衝撃も大きい。体中の骨が砕けるような激痛が全身に走った。

「魔法：アルケーエネルギーを吸収するならそれを使わなければいいだけの話だ。物理的な攻撃ならお前を殺せる」

「うう…」

「経験不足が明るみに出たな…お前はまだ若い。殺し合いの場は初めてだろう」

俊永の意識が刈り取られることはなかった。だからすぐに立ち上がろうとするが、体が言うことを聞いてくれなかった。先ほどの一撃だけで全身に力が入らなかったのだ。

回復する間を与えてくれるほどデュラスはやさしくない。見えないう動きを再現すると俊永の間合いに悠々と姿を現す。

呼吸もままならない俊永は闇雲に手を出すか、その一つはかすりもせず逆にデュラスの重い一撃を腹部に受けてしまった。

肋骨は既に折れていた。下手すると内臓に突き刺さってもおかしくなかったのだが、俊永は必死に意地を見せていた。体の動く限りは抵抗してやろうと地面に体を預けることを拒否していた。



## 66話

「お前の体は…もうぼろぼろのはずだ…何故動く？そのちっぽけな意地のためか？」

その懸命な頑張りにデュラスは苛立っていた。全く敵わない相手に自分の限界を感じたら諦めた方が早いと思っていた。

俊永の命を握っている状態だけあって一瞬で止めを刺すか悩んでいた。すると俊永は語った。

「あんただって同じだろう？」

「何がだ？」

「復讐のために諦めることをしなかった…自分に言い訳をせずに…ただその目的だけのために…永遠と続く肉体の苦痛にも耐え、常軌を逸する精神的な圧迫にも耐え…」

俊永は足を引きずりながらデュラスに近づく。その目にはまだ生気が宿り、命の炎とでも言うべきものが体を包み込んでいるかのようだった。

「俺は…昔から駄目人間だったよ…自分に言い訳して、楽な方に逃げて…これまでちっとも生きることについて考えてこなかった。あんたから見たら俺はちっぽけかもしれない…生きたいと必死に願った人間から見たら殺したいかもしれない…でも…俺にも譲れないところがあることを知ったんだよ」

そこで俊永は足を止めた。

「知っている人間が目の前で殺されるのはご免だ。それ位なら俺が命を賭ける…どんな手段をとってもな！」

自分はそのから絶対に逃げないという宣言を果たした。するとデュラスの怒りは頂点に達した。自分の生き方を軽々しく口にし、比較し、あるうことか弱い身を挺してまで相手を救おうとしている。その言葉を口にできるほどの身分ではないのに。

だから不用意に近づいた俊永の顔面を見えないぐらいの速さで殴った。俊永は鼻血を撒き散らしながら後ろに倒れた。

「それはな…本当に強い人間が言う言葉だ。お前のようなちよつと能力のあるガキが軽々しく使っていい言葉じゃない」

俊永は顔を腫らしながらも再び立ち上がる。デュラスはその気迫に少しだが背筋がぞくりとした。

「ぐ…はあ…はあ…それでも…俺は…そうなりたいと願う」

肩で大きく息をしながら鼻血がぼたぼたと落ちていた。そして見るからに真っ直ぐ立てないほど体力を消耗していた。

「まだ言うか…貴様には無理だ…理想にはそれに足る力がなければ無意味…お前にはその資格もなければ力もない」

このまま殺してしまおうかという殺気をデュラスは体から吐き出す。しかし俊永の体は極度の疲労とダメージの蓄積で完全に無の状態に入っていた。だから殺気に対する反応は鈍いというよりも受け

流していた。

極限状態というものは何も悪いものばかりではない。あらゆる欲や雑念が消え去り瞑想状態に入ることでは万全の状態では見えないものが見えたりする。

事実俊永の体には確実な変化が起こっていた。デュラスにはそれが感じ取れなかったのだが、得体の知れない俊永の心境の変化にある程度の警戒はしていた。しかし俊永は感情のままに話を進める。

「資格とか、力とか：そんなの関係ない！俺は俺だ！俺が望むことができることで俺は存在してるんだ。生きてるんだよ！」

「ふん。青臭い：勢いだけの若者は山ほどいる：その成れの果ては存在意義も果たせず朽ち果てているのに：所詮は口だけで生きている証を残すのには乏しい者が多すぎるのだ。お前もその一人に過ぎない：若さゆえの一時の感情：勢い：お前は今の状況に酔っているだけで玉碎覚悟というものだ」

俊永の存在そのものを認めようとせず、全てを真つ向から否定した。しかしそんなデュラスの言葉に俊永は引く気はさらさらなかった。

「：大人つてのは大変なんだな：あらゆる可能性を潰してまでも勝つ、生き残ることのみを選択して確率の高い方を選ぼうとしている：それが何になるんだ？今だけを見ることの何が悪い？」

「今だけを：確かにな：死を覚悟すれば必然とそうなるか：だが御託はもういい。思わせぶりな言葉をいくら並べても結果は同じだ」

無駄口を叩けなくさせようとデユラスは確実に息の根を止めるべく動きに出た。

## 67話

今までの動きは偽りだと思わせるように風の力を解放して動くことで、俊永の目には映らない。残像すらも残らない。

風を切る音だけが部屋を包み込む。前後左右に音だけが響くと、次の一撃で自分が死ぬことが簡単に予測できた。

そうだ…あいつは自らの言葉を忠実に再現する。濁すことも偽ることもしない。そういう奴だ。

俊永は神経を集中させデュラスの動きを体で読もうとした。頭で考えると目で追うと無理だと言うことは百も承知だった。それなら本能に身を任せよう。自分を信じ、体に宿る古代の力の可能性に掛けて。

俺は守りたいんだ…力があるというならそれを使ってでも…

そのための力だろ？力があるなら出し惜しみをするな。俺の体よ！細胞よ！俺の力を…ある力を何でもいいから全部使いやがれ！俺の体なんか知ったことかよ！

そんな懇願、命令を自らの身に投げかけると、体が極限状態を迎えたことで俊永が見せた攻撃は本人の意思では行われなかった。

「うー！」

体から自然と解き放たれる。そんな感覚で、俊永の体の奥底に潜んでいた力が四方に向かって飛散した。

それはデュラスの放つ風の攻撃の数倍も速く鋭い。音速を超えるほどの勢いで俊永を中心に円を描くように飛び出す。一瞬の出来事で何が起こったかなど誰も理解できない。

そう、攻撃をしようとしていたデュラスにも…

閃光のような一撃が済んだ後には不自然な静けさが流れていた。地面に屈服していたイズルも何が起きたのか理解できずに目を丸くしていた。

そして今まで見えなかったデュラスの姿が俊永の背後にはっきりと見えると、そのままゆっくりと膝をついて崩れ落ちた。

「ぐ…き…貴様…」

押さえた胸部には深々と斬り傷が刻み込まれ血があふれ出していた。

俊永が何をしたのか理解するのにはそれから数秒掛かる。側にあった荷物やショーケースが斬れてずれ落ちたのだ。あちこちからどさどさと音がした。

イズルはそこではっきりと俊永が確実に攻撃をしたのだと分かった。

「まさか…デュラスの技をより強力にしたものを吐き出したのか？ 紛れもなくこれは風の力…」

あれだけの威力でデュラスの胴体が二つに斬れないで維持できて

いるのにも驚いていたが、それ以上に俊永の攻撃の鋭さに感服していた。

一方で自分の体が傷ついていることに驚き、理解できていない男がいた。

「なぜだ…何をしたんだ？…ごぶっ！」

大量の血液を吐き出しながら俊永を睨みつけていた。しかし当の本人も全く理解できていない。それどころか体に激痛が走り、そのままデュラスと同じように崩れ落ちると体を押さえてがたがたと震えた。

「う…う…う…う…」

体の体温が急激に下がっていくのが分かるように俊永の肌はみるみる白くなっていく。

「俊永！」

イズルはどうか体を起き上がらせると、ずりずりと足を引きずりながら近づく。

俊永の体は冷たくなっていて体の末端が小刻みに震えていた。どうやら解き放った攻撃の代償のようである。

四肢が動かず意識を失いかけていた。そして明らかに死の状況が迫っているのも見て分かる。

「おい！しっかりしろ！」

イズルも重傷に近い形だったが、そんなことよりも俊永の身を案じた。しかし俊永の体は良くならない。

「この馬鹿あ！弟子が命を掛けてまで師を護るなど立場が逆だろうが！」

荒々しい声だったが、その声の中には温かさもある。イズルの本心が思わず出てしまったことで俊永も嬉しかったらしく遠のく意識の中で笑みを浮かべていた。

「くそ…古代の力の…反動か…やはり現代人に使うだけの容量が足りないのか？…いや、そんなことを考えている場合か！」

イズルは悩んでいる時間がないことを悟った。俊永の体の状態がどんどん悪くなっている。肌は血色を失い、呼吸は小さくなっていた。だからだろう。迷うことはなかった。

「パーラトウス・オムネ・モトマルト・ペリークム」

自らの体に魔法を掛けると体の中から赤い球体が飛び出す。それは正にイズルの命そのものでもあった。赤々とした生命力が溢れる人間の命そのものが具現化した物は、脈打つかのように激しい鼓動を見せた。

イズルは自らの命を賭けて俊永を救おうとしていたのだ。

古代の力で大量の力を吸い上げられたのなら、それを補う行為がすればいい。そんな単純な発想ではあるが、自殺行為そのものでもあった。



イズルがそのまま自らの命ともよべる赤い球体を俊永の心臓に目掛けて打ち込むと、それは拒否反応を示すことなくすんなりと体の中に吸い込まれた。

するとどうだろう。俊永の血色は戻り、呼吸も次第に安定していたのだ。正常値に全てが戻ったかのように容態は回復に向かっていた。

その様子を見てイズルは安心した。

「む…昔の…お前は絶対にしない行為だな…まさか…自分の…命までも削るとは…」

そんな声が聞こえてイズルは慌てて後ろを振り返る。するとそこには瀕死のデュラスが体を起こすことも出来ずに地面に倒れながら話しかけた。イズルが俊永に施した術を見て言わずにはいられなかったのだ。

「そうだな…そこは否定できない。今思えば、あの頃の私は無我夢中で周囲の人間にまで気を配ることなど出来なかったから…だが、言い訳はする気もない…」

そんな話をしながらもイズルの顔は真っ青になっていた。そして先ほどの俊永と立場が逆転したかのように体の末端が震えていた。

「俺の…したことは…間違いだと思うか？」

デュラスは吐血しながらイズルに聞いた。

「間違い？それは…私の決めることじゃない。お前の決めることだ…」

その言葉でデュラスは思わず笑みを浮かべてしまった。今までの怨んでいたことなど忘れてしまったかのように自然に…

「ふん…お前らしい…それで…どうするんだ？俺をこのまま黙って死なせるのか？」

デュラスは別に命が惜しくてそんなことを口にしたわけではなかった。それはイズルも分かっていたので悲しい表情を見せた。

「私の性格を知っていてその言葉はズルいだろ…」

ふるふると両手を震わせていたのは、何も俊永に魔法を掛けた後遺症のせいではなかった。

「ああ…そうだな…俺もしゃべりすぎた…」

目を瞑り、楽しかった昔を思い出すことでデュラスは体の力を抜いていた。イズルは死を覚悟した人間の最後なのだとはつきり分かった。

「ああ…草原の香りが懐かしいな…三人でよく走り回った…ヴィンセント…走るの遅くて俺らに追いつかないから…ふくれっ面を見せていたな。馬鹿だな…イズルと俺はお前のことを置いていたりしないのに…」

うわ言のように回想していたことを口にしていた。イズルは涙をばたばたと落としながら右手を振り上げていた。

「静かに眠れ…わが友よ…」

そのまま傷口に向かって魔法を掛けた右の手のひらをそっと置いた。

どくん…

「あ…」

デュラスはそのままびくと体が反応すると、二度と動かなくなつた。

イズルは水属性の魔法で血液の流れを支配したのだ。そして心臓を止めた。デュラスはそのまま苦しむこともなく命のともし火を消した。

それと同時にイズルも全ての力を使い果たしたようでその場に崩れ落ちてしまった。

三人の人間がその場に倒れていたのだが、起きることができたのは俊永だけだった。

「う…うう…」

意識が戻つたとはいえ、まだ頭の中がぼーっとしていた。血液を大量に抜かれたような状態に近く、体のたるさもあった。

ぼやけた視界に映ったのは二人の人間が倒れている光景だったから驚いた。

「せ…先生！」

慌ててイズルの元へと駆け寄った。そして時俊永は、イズルがデュラスを倒して力尽きたのだと判断した。デュラスは血の海に沈んで動くことをしなかった。それを見ただけで壮絶な戦いの末の結果だとも思い血の気が引きそうだった。

そこでその日は幕を閉じた。

デュラスが死んだことでいろんなことが明るみに出た。

選考委員会の人間が賄賂をもらい国を揺るがす行為に手を貸していたことや、過去に起きた出来事をもみ消していたことの疑い、国家の重要人物が知らない研究など…：数え上げたらきりのないものだった。

それが長年の膿であり、波風の立たない歴史の結果とも取れた。ぬるま湯に浸かりすぎることで人の管理や気持ちりが杜撰になっていたのだ。

その膿を出すためにも選考委員会の見直しと国家の重要人物の情報開示も求められるようになったのだが、それは表向きだけである。多少の入れ替え等はあるものの内部でもみ消したり、情報操作をして虚偽の報告をしたりもしていたのだ。

国家が腐っているというよりは大きな混乱を招くことを選ぶよりも平安を求めるための致し方ない手段とも取れるのだが、一般人にはそこまで興味のある話でもなかったのだ。何も戦争をするわけでもないし、バロが攻め込んで次々と虐殺を繰り返すと言っ訳ではなかったからだ。興味関心を持っているのは一部の反逆者や後釜を狙っている連中だった。

表向きはいつもと変わらない日常が流れていたが、デュラスの起こした行為は多少のきっかけにはなっていた。

そのことは選考人には速やかに伝えられ、弟子たちも同様に迂闊

に情報を一般人に漏らさないようにと警告された。そして選考委員会の代わりに在任を裁く審判協会が取り仕切っていた。これは三大協会といって審判、行政、自衛と国家に必要なものの一つである。

「選考委員会はしばし凍結。選考人は我々の指示に従ってもらおう……」

偉そうな男が部屋に入って俊永たちに説明した。

「今までの生活とは変わりはないから心配しなくてもいい……まあ……事件に関わってもいるから調査協力はしてもらうがね……私は他も回らなくてはならないから、このぐらいで……それでは追って連絡をするので虚偽の報告は絶対にしないように」

それだけを話すと男は忙しそうに部屋を出て行った。

「で……どうするんです？先生？」

三人はいつものように山のように積みまれた書類の前で煙草をふかしているイズルの方を見た。

「ん？ああ……別に……聞いたふりしとけばいいさ……」

そんな風に大したことないといった様子で天井を見ながら話した。

「それにしても……体は大丈夫なんですか？入院を勧められたはずですよ……」

「そんな大げさなことじゃない。第一入院したら煙草吸えないじゃないか……」

「それだけの理由なんですか…」

「嘘だよ。他人に体をいじくられるのが嫌いなだけだ…それに私のストックしてある生命エネルギーと五大元素の力でどうとでもなる。それよりもお前らの体は大丈夫なのか？」

俊永もシズクもザツハもあちこちが包帯で覆われていたのだ。どう見ても外傷のないイズルよりも重傷である。

「それぞれが全治一ヶ月つてところか…シズク…免疫力を高める魔法は使えないのか？水の属性を扱えるなら必須科目つて所だが？」

身体を流れる液体も操作できてこそその一人前だとイズルは話したが、シズクは困った顔を見せた。

「うう…すみません…まだまだ未熟なんで…」

「お前にも苦手な分野があるんだね…」

「先生。そんなことよりもこれからどうなるんですか？このままつてことにはならないんじゃない？」

「心配するな…お前らが刑を食らうこともなければ、私が拘束されることもない…それだけ自分が大事なんだよ…みんな…選考委員会にしても解体されたとしても名前を変えて再び構築されるさ…」

「先生はそれでいいんですか？その…差し出がましいことかもしねませんが、そんな態勢の下でかけがえのない友人を失ったんですよ」

そんなことを臆すこともなく俊英が先陣を切って話した。他の二人は大丈夫なのだろうかとはらはらしていた。しかしイズルはそのことに腹を立てるわけでもなく落ち着いて諭すように話した。

「お前らも知る頃がくれば分かる…所詮は人間、一人の力で理想だけでは何もできないってことがな…それでも…まあ…理想も大事だ。若い頃は無気力な存在よりも希望を燃やして生きることが国家の活性化に繋がるのだからな。今回の一件はお前らがいるんな国家の現状を知る良い機会にもなっただろう。そして…そこからお前らがどう生きたいかが大事だ。だから逆に聞こう、お前らは腐敗した国家の裏の顔を見た上でこれからどうしたい？」

視線はシズクに向けられた。するとシズクは迷うこともなく答えた。

「私は変わりません…イズル師を越える魔法使いになっていろんな人を救いたいです」

「ほう…ならザッハはどうなんだ？」

「僕は…古代の力を知ることによって人の生活により役立つ文明を築きたいです」

「お前らしいな…俊永…お前は？」

「俺ですか…俺は…その…自分の生きる意味を探したいですね」

「へえ…その根拠は？」



「あるわけないじゃないですか。でも…この世に生をもらっただんなら何かの意味もあるのかなって最近感じた訳で…」

「ほう…お前にしては前向きじゃないか…それも生きる意味なんたのがまた哲学っぽくていいね…」

「からかってるんですか？」

「いやいや…お前の言ってることがもつともだと思ってるなあ…」

「え？」

「人つてのは…いろいろ頭の中で考えすぎるから面倒なんだよ。欲にまみれて本質をすっかり見失ってしまふ。でも…それをひつくるめて人間ということもある…欲を克服するかそれに飲まれるか…お前の話のように純粹に自分という生物の生き方そして死に方を真剣に考えればそんなことも消し飛んでしまつかもな…」

「しかし…全員がそこに到達するのは無理でしょう」

「だろうな…でもな…そういう心構えは大事だ。命は永遠じゃない…自分の生き方を見直すことは死ぬ準備にも繋がるのだ…例えば命運尽きていきなり死んだとしても後悔を残さないようにな…」

「常に死ぬ覚悟を持ってってことですか？」

「うーん…それができればいいのだがな…普通の人間には無理だろ。しかしこれから考古学を学ぶ上で危険と隣り合わせの身なのだから覚悟はしておけ…」

そこまで話すと煙草を取り出していつものように火をつけた。

「小難しい話はここまで。これからのことも話すから黙って聞いとけ」

ふつつと大きく煙を吐き出すと、早速資料を三人に投げてよこし、今後のカリキュラムを説明した。

「この冊子に書かれている通り修士課程を取ってもらってからそのつもりでな…その中でも弟子の能力試験はまたあるはずだから自己の鍛錬も怠らない。一般の学業での成績も落とすことは許さない。まあ…多少の予定変更はあるが残り数ヶ月みっちり鍛えてやるからそのつもりで…な」

不適な笑みを浮かべるイズルを見た三人は背後に寒気を感じた。

それから三人が部屋から出ると、イズルは一人煙草をもみ消しながら窓から外を眺めていた。

「さあて…これから大変だな」

数カ月後、三人は全ての修士課程を済ませた。そして卒業間近になつていた。

「今日の授業はこれでお終いだ…後は…卒業後の活動についてか…」  
「卒業したらどうなるんですか？」

「別に今までと大きな変化はないが…一般教養は学ばなくてもいい。私の専門分野だけでな…それと給料も出る」

「ええ！そうなんですか？」

俊永の目の色が変わった。今までと同じ境遇でお金をもらえらるゝなれば興奮するのも仕方がなかった。

「詳しい話は卒業証書を受け取ってからだ…そしてお前らはまだ半人前だから私から一人前の称号をもらえなければいつまで経つても弟子のまま…そして使えなかつたらすぐに解雇するからな」

「ええ！」

「だからだ…学ぶ気持ちを忘れるな。それと…自己の鍛錬は欠かすなということだ」

それからイズルは書類を取り出しているいろいろ説明して、卒業後の手続きの話をした。三国を出入りするための通関書や身分証、その他契約書まで取り出してきた。

どうしてこんなに面倒くさいのか俊永たちは理解できなかったのだが、それだけ重要な身分に自分達がなっているのだということも実感していた。

「卒業したら何が変わるかを端的に話すと…基本は発掘、研究。そして発表となるのだが、それ以外にもバロから三国を守る自衛の存在にもなる…」

「自衛組織も作られているのに…どうしてです？」

「あいつらは三国の力が混在しているんだ。だから自衛組織でも手に負えない者も存在するから私らのような人間の出番なんだよ。しかし…この百年近く大きな動きはないから皆無のままかもしれないが…デュラスのこともある。警戒は解かないにこしたことはないんだ」

その名前を挙げられると三人は何も言えなかった。そして自分達を奮い立たせているかのようだった。

「こんなところで卒業後の話は終わるがいいか？」

それ以上は話すのも面倒くさいといった様子だったので三人も黙って頷いていた。

「なら…私は用事があるから今日はここで終わりだ」

そのままイズルは出掛ける準備を整えると三人を部屋に置いてさっさと出て行った。

中立国家の中にある共同墓地は手入れなどされていない草原の中にある。無数ともいえる墓石の中には苔がびっしりと生えているものもあり時代を物語ってもいた。あちこちに無造作に点在する墓石はひどく殺風景でまるで草原に捨てられた石のようにも思えた。

そんな中で身寄りの無い者、忘れ去られた者がここに眠っていたのだ。三国で最も家庭環境の悪い者が存在する中立国家にはこのような無縁仏が集合していたのだ。そしてその場所にヴィンセントの姿があった。まだ寒い時期だったので普段は着ないような似合わないコートに身を包んでいた。全く服装を気に掛けることもないのに死者の手前ということもあってかそれなりに綺麗な格好だった。

灰色の空の下で自分で積んできた花をただの石ころのような一つの墓に供えた。すると背後から気配を感じたのか振り返った。

「やはり…来てたか…」

背後に立っていたのはイズルだった。ヴィンセントは何も話さず視線を墓に戻すと祈った。イズルもそれを見て横に並んで同じような動作を取る。

しばらくの間二人は無言のまま同じ気持ちでいた。懐かしい若き頃のことを思い出していたのだ。

周囲の音は一切なく静けさがその場を支配していた。

「イズル…何故今日の日に再びここに？」

命日なら来るのも分かるがといった様子でヴィンセントが聞いた。しかしイズルは迷うことも恥ずかしがることもなく本心で語った。

「私らが…夢を誓って卒業した日だからだよ…あの日…私らはお互いの夢に向かって突き進もうとしていた…それにだ…お前がここに来るとすれば今日かとも思っていたらな」

まいったといった様子でヴィンセントは思わず頭をかいていた。

「そうだな…やはり…考える事は一緒か…」

変わらない友人の一面を見て嬉しそうだった。それから二人は並んで墓地の中を歩いていた。

「ヴィンセント…お前は私を怨むか？」

その質問でヴィンセントは足を止めた。イズルははつきりさせておきたかった。自らの手で友人を葬ったことで新たな憎しみを生むのであればそれも覚悟しよう…しかしヴィンセントは何を馬鹿なことを話しているのだといった様子でため息混じりに答えた。

「互いの純粋な志の果てだ。そこに私が入り込んだらデュラスに対する冒瀆だ…そんなことあいつも望んでいないだろ…お前はお前でこれからも生きる道を変えることはないのだろう？それならそのまま進むがいいさ…」

第三者であることで冷静な意見を出してくれた。それにはイズルも嬉しく思い、素直にその意見を受け止めた。

「ありがとう…」

「さて…私はもう行くよ。いつもまでもこんな所でうろつろつしていたらまずいからな。お前も立場上のこともあるんだから、私とはあまり係わるな…」

するとヴィンセントはそのまま足早に去っていった。

イズルはその背中を見ながら数少ない友人に心から感謝していた。

それから一週間後。三人は晴れて水雲イズルの正当な弟子となり、イズルの部屋を訪れた。どこか緊張した様子でイズルの前に立つと、指示を待った。

「さあ…今日からお前らも私を追い抜く気持ちで仕事に取り掛かれよ」

「それで…先生…僕らの机はどこでしょうか？見当たらないような気も…」

ザッハが恐る恐る聞いてみたが、イズルは平然とした顔で山盛りの書類がある場所を指差した。

「あそこだ。多分…いや…あそこにあるはずだ…まあ適当に掃除して使えよ」

それを見た瞬間、三人はやはりか…と肩を落としていた。これからもイズルの身の回りの世話を自分達がやらなくてはならないと思

うだけで気持ちが悪くなっていたのだ。

書類の山を下に下ろしようやく形が見えたところで三つの机をそれぞれ場所に移動したが、下に物がたくさん落ちているので、何度も引つ掛けたり踏みつけたりしてしまった。

どうにか三人の持ち場が確保されると業務内容の確認をした。

「イズル師…早速仕事は何をすればいいんですか？」

出勤初日とあってかシズクは元気に質問したのだが、イズルはあっさり、何も無いよと一言返した。

「え？」

「外見てごらん…雨降ってるでしょ。これじゃあ発掘も無理だって」

外は暗くなっていて微かに雨が降っていた。

「じゃあ…国家からの依頼とかはないんですか？」

「そんなに頻繁にあるわけないでしょ…って…あ…そういえば…」

「何かあるんですね！」

シズクは仕事してもらえると頑張って張り切ったのだが、そんな期待通りのものが出てくる事もなく、

「ここらにある書類と書籍関係を分類別にまとめてくれる…それと…提出しなくてはならないもの、重要機密等々もお願いね…お前ら



の机が踏んでる物や破れている物も元通りにしといてね」

紙と本と服が入り混じった中を指差して話した。三人は一日で終わるのだろうか心配になった。

「ほら！ぼさつとしないですっさとやる！」

イズルが急かすと三人は気持ちも乗らないままに無気力な返事をして動き出した。

こんな状態でこれからどうなるのか三人にも分からなかった。

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1638o/>

---

魔法と科学と考古学

2011年1月20日11時09分発行